

トラウマの原因が覆さ
れたら、その世界はど
うなるか。

袖野 霧亜

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

葉山隼人がいつぞやかボヤいていたあのセリフ、比企谷八幡が雪乃達の学校にいたら
の二次創作。そして、ただ単にかおりとくつつけたかつたからという俺の願望が生んだ
作品です。ある意味最悪（という名の最高）です。

ぶつちやけ捻デレくんとマイペースな彼女とかそんな感じの名前にしようかなと
思つたけど…、なんかオリキャラが出てきてソイツと付き合いそうな感じの題名だつ
たので辞めました。

ただ、原作通りにやると確実にまた八幡が振られてしまうので中学生になるまでの過
程を改变させました。あしからず。

目 次

やはり俺が折本に告白するのは間違つて いる。	1
やはり俺が折本に告白するのは間違つて いたらしい。	11
たまには回顧するのも悪くないかもしれ ない。	17
捻くれながらも俺は折本付き合うことに なる。	21
やはり折本は鳥頭で、俺の日常を壊して いく。	30
やはり俺は体育館裏に呼び出されてし まつたようだ。	36

やはり俺の妹は天使である。 —————	43
やはり俺の改造計画は間違つていなら しい。 —————	49
またしても俺は体育館に呼ばれてしまつ たようだ。 —————	55
俺と折本は初めて体験をする。 —————	61
やはり小町に俺と折本が付き合つている ことを話すのは間違つていない。	68
俺と小町と折本と。 —————	74
やはり俺が小町達に料理を作るのは間 違つてない？ —————	78
やはり俺の妹は天使な件について。	

やはり俺が、彼女を家に送るのは間違つて……るのか？

やはり俺が折本にデートの申し込みを受けるのは……その、照れる。

初デートは買い物で始まる。 ①

初デートは買い物で始まる。 ②

初デートは買い物で始まる。 ③

89

95

103

113

121

136 129

時は過ぎ去り、比企谷八幡は切に願う。

141

改編された世界は徐々に元の世界との違いを現してくる。

物事を一度後回しにするとやりたくない更に先送りしてしまうものである。

雪ノ下雪乃と葉山隼人と比企谷八幡。

改めまして、入部する事になります。

由比ヶ浜、クッキー作るつてさ ①

170

初デートは買い物で始まる。 ③

最初の月曜日

感想会

183

由比ヶ浜、クツキー作るつてさ

②

②

242

由比ヶ浜、クツキー作るつてさ

③

終

192

由比ヶ浜、クツキー作るつてさ

終

209

248

剣豪将軍・材木座義輝がマジで剣豪過ぎ

やはり俺の職場見学の希望調査票はまち
がつている。

263

デートがデートぼくないっていうのは言

葉山隼人は比企谷八幡に頼る。

267

わないお約束。

224

273

たまにラブコメの神様は余計な事をする

人を貶める行為に、穩便に済ませるとい
う行為は相応しくない。

289

279

たまにラブコメの神様は余計な事をする

解消の仕方

289

279

俺と葉山隼人

戸塚、接近中。

そうして、比企谷八幡という存在をまた乖離する。

川崎沙希

川崎沙希

川崎沙希

川崎沙希

川崎沙希

川崎沙希

川崎沙希

川崎沙希

川崎沙希

②
①

⑦
⑥
⑤
④
③
②
①

362 357 353 344 337 333 322 315 310 304

299 294

由比ヶ浜、
由比ヶ浜、

ハピバ
ハピバ

⑤
④
③

|||

375 370 366

やはり俺が折本に告白するのは間違っている。

「好きです。俺と付き合ってください」「うん、いいよー」

2 やはり俺が折本に告白するのは間違っている。

!

俺の名前は比企谷八幡。中学2年生。なんてラノベやアニメとかでありきたりな事を言つてはいるが、別に誰に向けて言つたわけではない。何故なら俺はボツチだからな

まあなぜボツチなのか、と聞かれれば小学生の頃少々やんちゃしたからだ。八幡つてばおてんばさんなのね！　はい気持ち悪い。

その件に関しては過程がなんであれ最終的に俺が全て悪いと全員が判断したためその噂は今でも学校に蔓延^{はびこ}つている。ま、今思い返してみてもアレは最低なやり方だとは思つてはいる。いやあ、あの時の女子のあの目を思い出すとゾクゾクしちゃう！　いや、変態的な意味じゃないよ？

このような経歴を持つ俺は現在、自分の席で昼メシを食べ終えと机と愛し合つている。いや別にね？　俺が机を愛してるんじゃないよ？　机が俺を離してくれないだけであつて、他に行けるところがないからとかそんなんじやないんだからねつ！

『でさー！ アイツってば酷いんだよー！』

『あ、知ってる！ ていうかその話知らないの方が多いでしょ！』
『だよねー！』

と5人組の女子のギヤーギヤーうるさい声が聞こえる。マジでうるさいな。アイツつてドイツだよ。あー、なんか○戯王にそんなカードあつたなー。友達いないから遊び○したことないけど。なんなら友達と遊んだことすらない。

『そういうえばかおりー、結局どうしたあの告白？』

かおりという名前を聞いて少しピクッと動いてしまった。

折本かおり。俺と同じクラスの女子だ。俺なんかにも話しかけてくれるいいやつなのが、裏表が皆無に等しく思つたことはズバツと紳助さん並に言つてくる。あの人テレビに戻つてきてくれねえかな……。好きだつたのに。

『あー、あれね。断つたわ』

『えー！ なかなかイケメンだつたじやん！』

『アイツ、あたしのことイヤラシイ目で見てくるからさー？』

『うわー、相変わらずスパツと言うねー。かーわいそー』

『かおりつてすごいよねー。もう今年に入つてから何人目よ？』

『んー、8人目くらいじゃん？ 全員体目当てみたいだつたから拒否つたけど』

『スタイルいいしねー』

『もう羨ましい限りよ』

『もううんざりだけどね。もうちょいウケるやつとか出てくれればいいのにさー』

『へー、例えば？』

『んー、まあ大体ウケてるんだけどさ』

『『だよねー！』』

……本当にうるせえな。寝れねえじやねえか。にしても8人か。なかなか多くね？

あ、一応言つておくが別に聞きたくて聞いたわけじやない。勝手にこの耳がこの会話を拾つただけなんだ！ 俺は悪くねえ！ ……誰に言い訳してんだ俺？

それにしてもこんだけクラスで持ち切りにされてるのに未だに玉碎覚悟の告白が続いているのはなんでだ？ よくよく思い返してみると今の会話、まあそれだけではなくその前の告白された、という会話は1人目から全部この教室で話されていたから俺でも知つている。少しあのグループのやり取りを思い出し、ある一つの共通点を見つけた。それは全ての会話に相手の名前が出されていないことだ。男子共もどうせ名前は出されないから恥をかくことはないと知つていてるから玉碎特攻を決めているのか。

よし、疑問が解消されてスッキリした。どうせ俺には何も出来ない。このままゆつく

り目を閉じて次の授業まで――

『もういい加減止めて欲しいわ。誰か何とかしてくんないかなー?』

.....。

時は流れ放課後、クラスの連中は帰る支度を滞りなく終わらせていた。俺は既に終わ

6 やはり俺が折本に告白するのは間違っている。

らせて いるけどな。もちろんです、プロですか。このネタなんだつけ？
『ちょっとトイレ行つてくるから待つてー』

折本がいつものメンツ、略してイツメンから離れていくのを確認し、残ったメンバー
に近づき、

「お前らに話がある」

久しぶりに女子に話しかけた。

次の日の放課後、俺は校舎の屋上に来ている。物陰には折本といつもつるんでるメンバーもいる。なぜいるかって？ 俺が呼んだからだ。折本の今置かれている現状を開するために協力を頼んだ。手順としては俺が嘘の告白をして振られたあと、そこに隠れていたアイツらが出てくる。そのまま俺を貶すだけ貶して屋上から出していく。次日にその話題を教室で言いふらす。もちろん、俺の名前を出してだ。そうすればこれら先折本は迷惑行為は受けなくなるだろう。まあアイツらは俺の噂を知っているから却下される可能性もあつたが、もし俺が折本に酷いことをしようとした瞬間止めに入ることもできるという理由で承諾してくれた。うん、俺の信頼度ミリ単位もないね。もしかしたらミクロですらないかも。あらヤダなにそれ泣きそうだ。

おっと、そんなバカみたいな茶番を一人で（ボツチたるもの、この程度できなくてどうします？）繰り広げているとようやく今回のメインが来たな。アイツらもちゃんと隠れているみたいだし、これで後は俺が振られてアイツらが出てくれば終了の作業ゲーだ。

「よーす比企谷一。なんか用？」

「ああ。来てくれてありがとうな折本」

「まさか告るとかじゃないよねー？ もしそうならウケるんだけど」

いやウケねえから。おつと、そんなことはどうでもいい。今は俺のすべきことをしないとな。

「好きです。付き合ってください」

「うん、いいよー」

よし、これで俺の任務は終了だ。後はアイツらが出てきて終了だ。これでこれから先折本に対する玉碎特攻はなくなるだろう。

……しかししあいつら遅いな、どんだけためてるんだ。ちやちやっと出てこいよ。下げた頭が上げられねえだろ。

「比企谷ー？ いつまで下向いてるん、マジウケる」

「いやウケねえよ」

つい顔を上げてツッコミをしてしまう。く、これがリア充の力か！ ていうかいつまで隠れてんだよ早く来いよ俺のライフポイントガリガリ削れてんだよ。

「まあいいや、とりあえず比企谷一緒に帰らない？」

……へ？

「なんでそんな顔してんの、マジウケるんだけど」

「え、いや、あの、は？」

「何その反応マジウケる」

あつれれく、おつかしいぞおく？ 僕振られたよね？ なのになんで一緒に帰ろうになつてんの？

「あ、あのく」

とようやく隠れてたやつらが出てきた。なんでそんな腰低くしてるの？ ていうか出てくるの遅くないですか？

「あれ？ 千佳に、皆もいるじやん。何この状況ウケる」

「おっせえよ出てくんの……」

誰にも聞こえないようにぼそっと口からこぼれる。焦らしプレイは八幡の許容量オーバーしてるからやめてね。

「それよりかおり、比企谷と付き合うつてマジ？」

……………はい？

「あーうん。そのつもりだけど？」

「あー、うん。そ、そつかあ……」

「え、なになに？ 千佳も比企谷狙つてたとか？」

「いや、そういうんじゃないけど」

そんなスッパリと言わると心が痛い。ていうかちよつとありえない言葉が出てきたような。

10 やはり俺が折本に告白するのは間違っている。

「あれ？ 俺つて振られてないの？」

「んなわけないじやん。もしかしてさつきまで振られたとか思つてたん？ ウケる」「いや、ウケねえって」

「…………は」「…………は」「…………は」「…………は」「…………は」「…………は」「…………は」

「はああああああああ！」

失敗しなければならない作戦がまさかの成功を収めてしまつた。本当に八幡つてば
ドジツ子ね！ はい気持ち悪い。

やはり俺が折本に告白するのは間違っていたらしい。

「おーい、比企谷ー？」

誰かが俺を呼んでいる。いや待て、ここは学校だ。俺に話しかけるやつはいない。更に言えば外であれば俺を苗字で呼ぶヤツは皆無だ。つまり俺じやない別の比企谷だ。そうだ、そうに違いない。

「比企谷ー？」

まつたく、人騒がせなやつだ。一瞬俺のことかつて机の上で伏せている顔を上げちゃうところだつた。まあ俺はプロボッヂだからそんな安い手には引っかかるわけがないがな。

「ねえ比企谷つてば」

おいおい、いい加減反応してやれよ比企谷さん。君を呼んでいる人がかわいそうだろ？

「かおりー、どうしたのー？」

「なんか比企谷が呼んでも返事してくんないんだよねー。ウケる」

「なにそれ。無視されてるの？　かおりを無視するなんてねー」

12 やはり俺が折本に告白するのは間違っていたらしい。

どうやら比企谷さんは折本に呼ばれているらしい。そうだよな、無視は良くないよな。俺も虫は嫌いだ。あ、これ『むし』違うだ。漢字を間違えるとニュアンスがガラッと変わるよね。ほら、帰ると蛙も違うし。

「ほらかおり、最終手段使っちゃいなよ」
「そうだねー、まあ仕方ないわ」

なにやら不穏な空気を感じる。まあどうせ俺の事じやないし平氣だろ。確証はないけど。まあ比企谷さんとやら、せいぜい頑張つて――

「おりや」

がしつ、と俺のわき腹を折本の手に掴まれる。……は？　俺のですか？　え、いや
ちよつと待て俺わきだけは、

「こちよこちよこちよ」

「くくくくくく！？」

く、こ、こらえろ俺っ！　頑張れ頑張れお前なら出来る！　ほら炎の妖精さんだつて
諦めんなよつて言つてるよ！　大丈夫だ、俺ならでき――

「――に、ふつ、くう…」

出来ませんでした。いや、無理だからね？　こんなにも折本の指が的確に俺のツボ押
してゐんだから。足ツボマッサージで痛いつて言わないくらい無理だからね？　やつ

てもらつたことないけど。

「……昨日も思つたけど、なんか比企谷にくすぐりするとさ)……」う、イケナイ気持ちになるよね」

「……わからなくないから何も言えないと」

そう、こんな状況になつた原因は昨日の屋上での出来事だ。

「ちょっと、比企谷うるさいよー？ いきなり叫ぶとかウケるんだけど」

「わ、悪い……。じゃなくては？ お前、は？」

くそ、俺としたことが突然の出来事すぎて頭が追いついてねえ。なぜだ。そんなフランク無かつたはずだぞ？ 普通に振られる前提の計画だつたからな……。俺の噂知ってるはずだろ？ どうすりやいいんだこの状況。

「何そんなどもつてんの比企谷。ウケる」

「や、ウケねえから」

やつとまともに返せたのがこれだよ。どんだけテンパつてんだよ。

「ところで比企谷君、これからどうすんの？」

「はつ？ どうつて？」

「いやいや、比企谷君が告つてかおりがOKしたんだよ？ 付き合うの？」

「……」

ぶつちやけ何も言えない。いやまあ折本が嫌いではない。むしろ好意的では…、げふんげふん。いや、何でもない。

しかし折本はなんで俺の告白受けたんだ？ 意味がわからん

「んー？ 千佳と比企谷何話してんの？ てか千佳つてば比企谷と知り合いなの？ ウケる」

「や、だからウケねえから」

「口癖か？ 口癖なんだよな？ いやもう口癖以外のなんだよってくらいウケるって言つてるよなコイツ。」

「んで、千佳は比企谷と何か企んでた？ まるで比企谷があたしに告白するのわかつてたみたいな口ぶりだつたけど」

「え、あー、それは」

「いや、俺が言つた方がいいだろ」

俺は折本に計画の概要を完結に伝えた。別にここで嘘ついても仕方ないしな。

「ふーん、そういうことだつたんだー」

「怒らないのか？」

「んー、まあ別に？ ていうか比企谷があたしの予想通りのやつでウケるんだけど」

「予想通り？ どういうことだ？ いやまあ、最低最悪野郎っていうのは認めるけど、

言い方に棘が無い。ますます意味がわからない。」

「かおり、予想通りつて？」

「あー、なんか比企谷の噂知つてるつしょ？ それがさー、全部人から聞いたとかちゃん

16 やはり俺が折本に告白するのは間違っていたらしい。

と自分で見た人がいなかつたんだよね。だから噂が流れ始めた時とその前にあつた事を聞いて回つてたらこんなネタが出てきたんだよ」

「ネタ？」

何故か俺の中で危険信号が鳴り響く。これ以上折本に何も言わせてはいけない、と脳が勝手に判断を下し俺の口から折本の言葉を遮るように声を出す。

「お、おい。それ以上は——」

しかしそれを更に遮るように折本は言い放つた。

「なんか、比企谷がイジメをしていた奴らに何か言つたらしいんだよね。そんで比企谷がイジメの対象になつたんじゃないの？」

たまには回顧するのも悪くないかもしれない。

昔、と言つても俺が小学生の頃だつた。

その時の俺はまあまだ目は腐つていなく、純粹なヤツだつた。特に変わらない、そちら辺にいる子供とだつた。

平和で平穏で悪意も欺瞞も無い普通の日常を送つていたが、そんな日常は俺の知らないところで綻びを見せ始めていた。まあ端的に言えばイジメだ。無論俺が受けているわけではない。俺ではなく、同じクラスにいた女の子だ。ソイツはとにかく男子からモテる。クラス外でも人気で更にイケメンで幼なじみの男子がいる。なんでも出来てしまい容姿端麗であるため俺も多少他の女子より気になつっていた。仕方ないよね、男の子だもん。

まあこんな女子がいるなら妬みや僻み等の悪意が生まれる。この中にはクラスの女子がその大半、残りは振られた男の逆怨みがぎつしり詰まつて。おお、醜い醜い。

最初はたいして酷くないものだつた。しかし何もアクションを起こさない少女にイラついたのかだんだんイジメのレベルが上がつていつた。それでも何もしない少女に味を占めたのか更にエスカレートしていく。

18 たまには回顧するのも悪くないかもしれない。

ついには幼なじみのイケメンな男の子も気づいて注意した。

しかしそれは逆効果に終わり、表面上終わつても裏ではドロドロとした物が女の子に絡みつく。

テレビで誰かが言つていた『イジメは無くならない』という言葉を思い出した。まさしく今の状況がそれだ。

ちなみにイケメン君はもうイジメが終わつたものだと勘違いをしているため笑顔で友達と遊んでいる。

もうヤツには期待出来ない。

かと言つて先生に言つたところで口頭注意がせいぜいだ。これもテレビで得た知識だが、下手に手を出しても悪化させるだけかもしれない。

ならば俺も見て見ぬ振りをしようと思った。

そう、思つていたんだ。

ある日、俺は教室に宿題を忘れてしまい帰り道を逆走していた。たしかその日の宿題は算数だつた気がする。まあ俺の苦手科目だつたというのもあるが、この後に見た光景と一緒に覚えていた。何かを覚える時は他に印象強いものと一緒に覚えると良いとうのもこの時に学んだ。やつたね。

教室に入ろうと扉に手をかける寸前、中からすすり泣く音が聞こえた。

ゆっくりと扉を開けて除いてみる。そこにいたのはイジメにあつていた少女だ。
何かを探しているみたいだが、おそらく誰かにその何かを隠されたのだろう。
しかしその時の俺はそんなことはどうでもよかつた。

俺が一番目がいったのはその女の子の泣いた顔だつた。

俺は勘違いをしていた。

イジメをしているヤツらを決して気にしていないわけではなく、何も出来ずにいたの
だと。

今思うとこの頃の俺つて愚かすぎないか？　この程度のことすらわからなかつたわ
けだし。

教室から離れ階段の踊り場に移動する。そして俺はあの子が置かれているあの現状
をなんとか出来ないか考えた。

しかし、考えたからといつて俺に何が出来る？　恐らく俺には何も出来ない。

誰も傷つかずにイジメを終わらせるなんてことは不可能に近い。いや、近いではない
な。不可能だ。俺は知つているはずだ。『イジメは無くならない』と。

それでも俺はあの子がもうこれ以上苦しまずには済む方法はないか一生懸命に考えた。
考え抜いた結果この時の俺には最高の一手、今の俺には最悪の一手となつてゐるが一
つだけアイディアが出てきた。

20 たまには回顧するのも悪くないかもしない。

ああ
そ
う
だ。

あの子に向いている悪意を代わりに俺が受ければいいんだ。

捻くれながらも俺は折本付き合うことになる。

結論から言つて作戦は成功した。あの子に向いていた悪意がほとんど俺に向けることが出来た。そう、ほんとんだ。残りはまたイジメをしていたようだが、驚くことに返り討ちにあつていた。それからはあの子への悪意は無くなつていつた。俺の方は変わらずあつたけど。

なんていう思い出に逃避していたらいつの間にか俺の前に立つていた折本が手をひらひらと俺の目の前で振つていた。

「おーい比企谷ー？　なんで固まつてんのウケるんだけど」

いや、ウケねえから。つーかコイツよく調べたなそんなどうでもいいこと。コイツほど行動力あるやつそういうだろ。

「比企谷ー？　無視するとかウケないからなんか反応くんない？」

いや、それでもなんで折本は俺なんかの告白受け入れたんだ？　まさか俺にも春が！？　んなわけないのは自分でもわかってる。あれ、なんだろう目から汗が出てきた気がする。

「比企谷ー？」

いや、ひとまずこの状況をなんとかしなければ。まず折本に今の告白は嘘だつていうのは話したから無効になつていいのはば……だよね？

「……」

もし、万が一折本がそれを許さなかつたら俺は折本と付き合うことになる。いや、別に文句ないよ？ 好きか嫌いかで言われたら好きだとゲフンゲフン。とにかく俺はこの場から脱出することを——

「おりや」

「つ！」

ガシッと俺の両脇が掴まれそのままこちよこちよされる。

は？ こんなもん効くわけ……。

「比企谷、無視はよくないと思うよ」

「……」

……効くわけ、

「あれ？ まさかこちよこちよ効かないのかな？」

「…………つ」

……効くわけが、

「こちよこちよこちよこちよ」

「…………う、ぐつ」

まあ効きますわ。無理だろこんなん。初めてされたけどすごい。マジやばい。俺のボキヤブラリーもヤバイけどこちよこちよつてこんなにヤバイのか。

「おつ、やつと反応した。てか脇効くんだねウケる」

「やつ、ウケねえ、から……。ちょ、あのもう離してくれませんかね？」

「いやー、思いの外効いてるからめっちゃウケるんだよね」

「いやつ、だからつ、ウケねえか…………！」

いやマジで本当に止めてくんない？ 結構キツいから。

「ほらかおり。いい加減にしどきなさいって」

「こ」で仲町さんが折本を引き剥がしてくれる。た、助かつた……。

「私もやってみたいから」

「へつ？」

今度は仲町さんが脇をくすぐりにきた。いや待てなぜそこでお前も混ざつてくる。ふざけるなあ！

「う、くう、やめろつ、つーの」

「お、おお……。やっぱいわこれ。ハマリそうだわ」

いやハマらないでくださいマジで。ていうかやるなら俺にじやなくてそつちでやつ

てくださいお願ひします。

「いやー、なんでか私達全員これが効かなくてさ。……いけないこれめつちやヤバイ樂しそうる」

「ヤバイつ、のは、お前のボキヤブラリーツ、だろうが……！」

『ね、ねえ千佳。私達も……』

「ま、待つて。もう少し……、あと少しだけっ！」

「あと少しも何もねえよ……。頼むからそろそろ離してくれ。いや離してくださいお願ひします」

そろそろガマンが出来なくなってきた。これ以上されたら……。

「いいじやん比企谷一。私もまだし足りないしさー」

そう言うと折本が俺の後ろに回り込んで更にくすぐりにきた。あ、もうダメだこれ。「んつ、くう……！」

あまりのくすぐったさに身をよじつてしまふ。たぶん顔も真っ赤になつて目に涙を溜めてるかもしれない。ろくな抵抗も出来ずなすがままにされるだけだった。

「…………」

「ふつ、んん、はあ……。ふあ？」

どういうわけかそつと折本と仲町が離れる。な、なんだ？　あまりに俺の出す声がキ

モすぎて耳が腐りそうになつたのか？ ヤダなにそれ泣きそう。

「お、終わった、のか？」

「…………え、ああうん！ もう終わりだよ！」

「そ、そうだね！ ていうかこれ以上やつたら変な気分に……」

最後の部分は聞き取れなかつたがとにかくもうくすぐりは無いことがわかるとほつとした。あれ以上されたらと思うと――、

『えいっ』

「ひやつ！？」

不意打ちで脇をつつかれた。ちょ、あのすゞい変な声出たんだけど。めっちゃ恥ずかしい！

『お、おお……。これはなかなかクセになりそうな……』

『そのくらいにしどきなつて。ひき、ひき、ヒキガヤ？ 君がホントにヤバいことになつてるから』

いやホント、助けていただきありがとうございます！ ざいます名も知らぬ方。ていうか本来何の話してたんだつけ？

「ん、んんっ！ 話戻すけど結局かおりと比企谷君は付き合うの？」

「え？ 付き合わないつていう話で終わつたんじゃないんですか？」

26 捻くれながらも俺は折本付き合うことになる。

「なんで敬語になつてるんだしウケる」

「いやウケねえ、あーもういいやそれで」

今は折本の口癖に構つてゐる場合じやない。この状況の打破をしなくては。

「あたしは比企谷と付き合つてもいいと思つてるけど?」

「じゃあ付き合うことに決定なのね」

「いやなんでそうなるの? 俺に拒否権は無いのか?」

「無いでしょ」

理不尽とはこのことを言うのかと思った。小町にもこんな仕打ちされたことあつたわ。無いって言いたかったなー。

「念のため聴いておくけど理由は?」

「比企谷がかおりのこと好きだから?」

「そんなわけ——」

「へー、好きでもない相手にそうやつて誰にでも告白するような人なんだ比企谷君つてー」

「……何が言いたい」

「いやー? べつづにー? あーあかおりかわいそー。せつかく好きな人からの告白が嘘の告白だなんてなー」

『うわー、比企谷サイテー』

『人でなしー』

『チキンラーメンー』

「おいらなんだお前らその棒読み。ていうか最後のやつ悪口じやないじやん。いや、別に悪口を言つてほしかったわけじやないよ？ ホントだよ？ ハチマンウソツカナイ。

「しようがないかー、比企谷君つてかおりのこと嫌いなんだもんねー」

「え、そうなの？」

笑つてはいるが少し悲しそうな顔をする折本。え、なに？ 僕が悪いの？ いやそもそも別に俺は折本のこと嫌いじやないしむしろす——なんでもない。

「比企谷、あたしのこと嫌い、なの？」

「うぐつ、上目遣い止めて罪悪感がハンパないから！

「き、嫌いではないぞ？」

若干目をそらしつつ答える。いや無理だからね？ 折本レベルの美少女の上目遣い

だよ？ 耐えられるわけないじやない！

「捻くれねえよ。俺ほど正直者はいない。むしろ正直すぎて勝手に行動に出ちやうくら

う」と、さすがに口をつぐむ。しかし、さすがに口をつぐむ。しかし、さすがに口をつぐむ。

いだ

「ならかおりに告白したのも比企谷君がかおりのこと好きだからってことだよね？」

あ、やべ墓穴掘つた。

『たしかに正直者だね』

『かなり捻くれてるけどね』

『比企谷 は『捻デレ』を憶えた!』

もうやめて！ハチマンのライフはもうゼロよ！ていうか捻デレってなんだよ。

ツンデレヤンデレの最新バージョンなの？誰得だよ。

「なんだ。比企谷つてやっぱりあたしのこと好きなんじやん。ウケる」「いやウケねえから。……はあ、わかつたよ。付き合えばいいんだろ」

「しぶしぶなら諦めるけど」

「俺と付き合つてくださいお願ひします」

反射的に腰から90。折り曲げて懇願する。

「ん、これからよろしく比企谷！」

「ただ、頼みがある」

「なに？」

「それは——」

俺が言つた頼みに折本はしぶしぶながら了承し、仲町さん達はやれやれこの捻デレはと言つた感じになつてしまつた。解せぬ。

やはり折本は鳥頭で、俺の日常を壊していく。

時は戻り現在は折本に告白した翌日の昼休み、俺は脇をくすぐられるのを一旦やめて
もらい折本と対面した。

「お前、昨日のアレ聞いてなかつたのかよ」

「へ？ なんのこと？」

「教室では話しかけるなってやつ」

昨日の屋上でコイツに出した条件というのは『教室で話しかけるな』だ。なぜかだつ
て？ 教室だと人多すぎるわ目に付くわ噂流れるわで面倒だからな。まあ元々噂は流
れるよう仕向けたけどこんな内容になるとは俺も思つてなかつたからな。俺の平穏な
中学生活が真黒に染まる、それだけは避けたい事態なのだ。

「あー、忘れてたわ」

えー、昨日の今日でなんで忘れるちやつてるのコイツ。アレなの？ 鳥頭なの？

「鳥頭かよお前」

うつかり思つてたことが口から出てしまつた。いつけない八幡てば正直者ね！
「鳥頭とか酷くない？ マジウケるんだけど」

「たしかにかおりはこういう時鳥頭並に約束破るよね」

「違うつてば千佳～。忘れてるんだつてばー」

「いやこっちからしてみたら破ったのと同じですけど？」

「いやこっちからしてみたら破ったのと同じだからね？」

まさかの仲町さんと同じ考え方かよマジウケる。

「つて比企谷君が思つてるからね？」

「なに？ 僕の思つてたことわかつてて言つたの？ 代弁してくれてありがとう」「どういたしまして」

「アタシ二人にめっちゃ責められてんだけど！ マジウケる！」

「いや、ウケねえから」

なんなのコイツ責められてウケるとか実はドMなんじやねえの？

「ほらあ、比企谷君にドMなんじやないかつて疑われてるよ？」

「え、マジで？」

「だからなんで俺の考え方読めるの？ 超能力者なの？」

「それは私だからだよ」

なにそれ意味わかんない！ もう某スクールアイドルみたいな言い方になつちまたよちくしそう。あのアニメ見たことないけど。

「とりあえず周りの目が痛い。用がないならあつちに行つてくれ」

「えー、一緒にご飯食べようよ」

「お前さつきの流れ忘れたの？ 本当に鳥頭なんじやねえのか？」

「鳥頭とか比企谷失礼すぎだしマジウケる！」

「だからウケねえから」

もうやだこの人。ハチマンオウチカエル。

「とは言つても比企谷君。もう既に手遅れっぽい……」

「え？ は？ ……あ」

仲町さんに言われ周りを見渡す。するとそこかしこからこちらへ目線が集まつていた。やだ八幡つてばおバカさんね自分でも教室内で話しかけるなやら周りの目が痛いとか言つたばかりなのに教室で普通に折本と話しかやつてるなんてね。

……いやマジでやつちまつた少し現実逃避し過ぎてうつかりカバン持つて帰ろうとしちまつたよ。てかこの状況いつからなつてたんだ？ 視線が痛すぎて胃に穴が……。「ちなみにかおりが比企谷君をくすぐり始めてからこんな感じだよ？」やつたね比企谷君皆にあの声聞かれてたよ」

「ねえなんでそういうこと早く言ってくれないのいい加減泣くぞ」
いやマジで泣きたい。昨日まであつたはずの平穏はどこへ旅立つてしまつたんだろ

う。俺はお前がいないと何も出来ないんだ！ 帰つてきてくれ俺の安らかな時間！

「もういいじゃん比企谷。もう諦めなつて」

「この元凶が何かほざいてるけど仲町さん、とりあえずコイツ殴りたい」

「比企谷君、かおりのそれは一生治らないって医者も匙を投げるレベルだから観念して？」

「やつぱりこの二人ひつどいよねー！ てか息が合いすぎてマジウケるんだけど！」

「だからウケねえから！」

ああ、もう折本の席で固まってるイツメンが俺らを見て呆れてるのが見え、更に周囲からの反応が痛すぎる。ああ小町。俺のマイエンジエル。お兄ちゃん、もう家に引きこもりたいよ。

てか来年から小町もこの学校に来るんだなー。やつたぜ八幡、心のオアシスといれる時間が増えるよ。またぶん声かけてくれないだろうけど。やだ、涙でそう。でも泣かない。だつて八幡は男の子なんだもん！

「はあ……。もう諦めるしかないのか」

「どうしてもイヤなら私達がかおりをシバいて教室では話しかけさせないようにするけど？」

「いやシバかなくていい。こいつに声をかけた俺が悪いからな。俺が折れればいい話

だ

「えっと、遠回しにいつでもかおりと一緒にいてやるって言つた？」

なんでそんな風に聴き取れるんだよおかしいだろ。確かに俺は捻デレかもしけねえけどおいこら誰が捻デレだおかしな造語で俺を語るな！　あ、言つたの俺ですよねごめんなさい。

「いやー、美咲の言う通り捻デレって言い得て妙だね」

「俺のデレとか誰得だよ。てか美咲って誰だよ」

「比企谷ー、美咲を知らないとか人生の七割無かつたことになるよー？」

俺の人生ほぼ無駄だつたんですねわかります。いや、本当に知らないな。なんならこの学校で名前覚えたヤツ一人もいないほどだからな。

「三木美咲、この学校のマスコットキャラクターを知らないなんてねー。てか昨日も一緒にいたじやんな。

そういうえばアイツらの名前仲町さん以外聞いてなかつたわ。今度聞いておかないとな。

『あ、あの折本さん。ソイツとどういう関係なんだ？』

おずおずとクラスの男子が折本に質問する。あ、バカお前そんなこと聞いたら、
「えー？　恋人だよ。私の彼氏」

ほら、こう言うに決まってるじゃん。見てみろ、質問してきた男子はおろかクラスの空気が固まつたぞ。ナニコレ面白い！　もう現実どころかお家に逃避したくなっちゃう！

そして俺に捻デレの称号を与えてくれた女子がいつの間にか近くに来ていて俺の肩をポンッと叩くと、

「仕方ないよ。かおりは残酷なんだから」

なんか聞いたことがあるフレーズだな。てか意外とこいつもアニメとか見るんだな。まあ某進撃する巨人は結構な人気あつたしな。別に驚くことでもないか。

おっと、そろそろ俺も現実を直視しないといけなくなつてしまつたようだ。さあ、今 のうちに耳を塞ごう。え？　なんでそんなことするのかつて？　はつ、決まつてんだろ？

『『ええええええええええええ！』』

こんな感じで皆が絶叫するんだから。ちなみに折本と仲町さんはその声にビクツึとしていた。一瞬かわいいとか思つたのは秘密だ。

やはり俺は体育館裏に呼び出されてしまったようだ。

時は放課後、俺はただいま体育館裏におります。

え、なぜかつて？ ははつ、わかるだろ？ ヒントは鳥頭で学校で有名すぎる俺の彼女が教室の真ん中で俺と付き合ってるなんていう発言しましたので男共に囲まれてまさか俺にモテ期でも来たのか！ と錯覚してしまったくらいだ。やつたすつゞく嬉しいわけねえわ。俺はホモじやないんで。

「なあ、お前どういうつもりだよ？」

「ど、どういうちゅもりとは何の事でひようか？」

ただのぼつちだつた俺がいきなりこんな人数に囲まれてキヨドらずに喋れると思うか？ いや、無い！ そんなこと出来るわけないだろ。は？ そんなんでよく折本に告れたなつて？ 知るか自分で調べろそんなこと。

「とぼけんなよ！ なんでお前みたいな奴がかおりと付き合つてんだよ！」

いやまあどうしてつて聞かれてもなあ。俺から言えることは「さあ？」の一言なんだよ。昨日は無理矢理納得したけど未だにアイツの考えてることわかんねえし。いや、わかる奴いるか？ いなくね？ 仲町さんですらわからなそうなのに。

「いや待て。俺の話を聞いてくれ」

「うるせえこのクソ野郎！ どうせお前のことだ、脅して無理矢理付き合わせてんだろ！」

「ばつかちげえよ。んなことして俺が何か得するのか？」

「ふざけるな！ いいか、かおりはこの学校で男女問わず1番の人気者だぞ！ それなお前に前みたいなクズがそもそも関わっていいわけがないだろう！」

「だから待てつての。俺の話を——」

「ゴチャゴチャうるせえんだよ！」

ダメだコイツ話を聞かないタイプだ。おそらくコイツは次に「俺と勝負しろ！」

勝つたらかおりに二度と関わるな！」と言う。

「俺と勝負しろ！ 俺が勝つたらかおりに二度と関わるな！」

やつぱりな。コイツほど単純バカは初めて見たわ。さて、ぶっちゃけ面倒だし別に受けなくてもいいんだが後々面倒事が押し寄せてきそうだし受けておくか。あ、ついでに俺が勝つたら話を聞くよう頼んでみるか。

「わかった。その代わり俺が勝つたらゆっくり俺の話を聞いてもらおう」

「はあ？ なんでお前の話を聞かなきやいけねえんだよ？」

「負けるのが怖いから俺の条件は飲めないのか。別に俺はこのくつだらない勝負に応じ

なくともいいんだ。それをわざわざ受けてやるって言つてるんだぜ？ それくらい受け入れる器持てよ。女の子から、もとい折本に嫌われるぜ？」

「なっ！」

あ、うつかり余計なこと言つちゃつた。いや、敢えて言い訳すると少し今のこの状況が俺の胃をキリキリと痛めて俺にストレスを与えているんだ。だから『僕は悪くない』。

あ、今のはなんか某ボックスの漫画で出てくるキャラみたいだつた！ 嬉しいつ！『お前いい加減にしろよ！ この状況わかつてんのか！』

『もういい！ コイツやつちまおうぜ！』

え？ ヤつちまおうぜ？ やだ俺犯されちゃう！ んなわけないですよね気持ち悪い。

い。

「そうだな、なら勝負の内容は『相手を先に背を付けさせる』でどうだ？ もちろんルールは無しでな！」

『は？』

俺は素早く一番前にいたソイツの顔面を掴み身体を反転させて壁に打ち付けた。加減はしているもののかなり痛いだろう。しかし問題ない。すぐに痛みが引くレベルだ。相手の身体が硬直しているうちに頭を持ちつつ大外刈りの要領で倒す。ハチマンは

勝負に勝つた！ ハチマンはレベルが上がった！ ハチマンは新しく格闘スキルを覚えた！ ……あんまり必要無さそうなんだけどな。使う機会は少ない方がいいだろこんなスキル。

『て、てめえ！ よくもやりやがったな！』

「いや、ルール決めたのコイツだろ？ 僕悪いことしたか？」

これで文句つけられるなら俺はどうすればいいんですか？ 問答無用で集団リンチ喰らえばいいんですか？ まあ痛いのは遠慮しておきたいんですが。

それよりなんで俺が壁ドン（物理）と床ドン（物理）が出来るのかというと、鍛えたからとしか言いようがない。その他はイメトレだ。イメトレの意味知らない人はググってくれ。

『つ、コイツ！ 皆、やつちま――』

「はーいストップストップ！」

『『つ!?』』

ここで登場折本グループの方々。なんでこないなところでおんねん？ わいビックリしてもーいたわ。

「比企谷、こんなところで何してんの？」

「お前が起こした暴動を収めようとしてんだよ」

「これあたしのせいなんだウケる」

「いやウケねえから。ていうか、そういうお前はなんでここにいんだよ」「それは私が説明しよう。いいかい比企谷。かおりは基本バカだからいつかこんな日が来るかもしれないと思いイジメや集団リンチをしそうなところは全て私が把握しているのだよ」

三木さんアンタマジすぎな。口調と身長が微妙に噛み合ってないけど。

「なんか失礼な事言われた気がする」

「アタシも美咲に失礼な事言われてんだけどマジウケるわ！」

「はいはいウケるウケる」

仲町さんの折本の扱いが若干酷くなつた気がしなくもない。

『え、いや別にイジメとか集団リンチしようとしてたわけじやなくて』

「ゴメンねえ、全部録画済みだから君達に弁明の余地無いんだよ」

三木がこの紋所が目に入らぬかあ！ と言いたげな顔をしながらスマホを突き出す。

うわつ、俺こんなえげつない事してたのか。八幡つてば乱暴者ね！

「よし、じやあ比企谷帰ろー。あと帰りにどつか寄つて行かない？」

「いや帰ろーじやねえよ。この状況どうすんだよ」

「どうするつて？」

あ、この子本格的にバカなんだっけ？　忘れてました。俺も折本の扱いが悪くなつて
いるのは仲町さんの影響なのです。

「まあいいじやん。とりあえず比企谷には色々とやつてもらいたいことがあるからさつ
さと行くよ」

「は？　なに？　なんなの？」

「後でゆつくり話すつて」

『さつさと行くよー』

『アタシサークルのトリプルアイス食べたいんだから早く』

何この状況さつきまで修羅場だつたのにいきなり花畠だよ？　いや、花畠は言い過ぎ
か。しかし昨日から思つてたがフワツといい匂いがゲ芬芳ゲフン。

『ま、待て！　まだ話は——』

「あ、じゃあこうしよう」

折本がクルツと男子連中に向き直り、

「集団でイジメをするような人達とは関わりたくありません。ゴメンなさい」

『『なつ……』』

ペコリとおじぎをするとすぐに体制を戻して俺を引っ張つて歩いていく。あの、まさ
かこのまま行くつもりですか？　俺まだカバンが、

「安心して。君のカバンはここだ」

「お前さつきから気が効きすぎだろホレるぞ」

「そう。なら私に乗り換える?」

「首を少し傾げる。あれ? 俺まさかフラグ作ってるわけないですよね。だって俺だもん。……なんか自分で言つて泣きそうになつた。

「ちよ、比企谷それはないでしょ? 今はあたしの彼氏なんだよ?」
「確かに美咲の方がよかつたかもね」

「千佳も軽く酷いよね」。マジウケ――

「かおり、ちよつと本気で比企谷狙うからよろしく」

「いや、それはガチでウケないからね美咲!?'

「なんか俺の知つているところでアレやコレや言わないでっ! もう理解することを諦めてるから!」

「とりあえず行きますか。皆も準備OKみたいだし」

「なんか俺の知らないところで話が進んでんだけど、何しに行くんだ?」

『『『比企谷改造計画』』』

拝啓父さん、母ちゃん、小町へ。俺、とうとう悪の軍団に連れ去られてしまします。

やはり俺の妹は天使である。

「たでえまあ～……」

折本達に強制的に買い物に付き合わされボロボロになりながらなんとか自分の家に着くことが出来た。

現在時刻は短針が6と7の間くらいだ。いつもならすでに部屋着になつてゴロゴロしている時間だ。

主の折本達め……、小町が泣いてたらどうしてくれようか！　あ、でも返答が来ないから居ないのかな？　居なかつたら一大事だ。探しに行かなくてわ。

「小町ー、いるかー？」

リビングに入り小町がいるか確認する。するとソファーアに丸まつてすやすやと眠る妹の姿があつた。よかつた、また前みたいに家を飛び出してなくてわ。

「はあ……、癒しだ」

昨日今日で色々ありすぎて小町が天使に見え始めてきた。元からかわいくて癒しだつたが、この2日で精神を磨耗していたので天使、いや女神にも見えてきた。絶対嫁にやらん！　とか言つてると小町にキモがられるので自重する。

さてと、小町の無事を確認出来たし飯の準備をするか。オムライスでいいよな？ 米も冷凍のがあつたはずだし、その他もろもろはあれば入れよう。

ふつ、専業主夫志望の俺の実力、思い知るがいい！ 誰に向かつて言つてるんだ俺は。

「よつしや、出来たつと」

作り始めてから十数分、小町と俺の2人分のオムライスが出来た。しかし小町は未だに眠つたままだ。仕方ない、ゆすつて起こしてやるか。

「小町ー、ご飯だぞー。起きろー」

少し肩を掴み揺らす。これで起きなかつたらオムライスの匂いを嗅がせる。それでもダメなら両肩を掴みガンガン揺らす。最後のやつは絶対にやらないが。

「んー、……んう？」

「お、起きたな。小町、ご飯だ。冷めないうちに食べてくれ」

「…………だあれ？」

「………… what？」

誰、誰だつて言つた？ まさかお兄ちゃんの顔を忘れちやつたの？ ショックのあまり顔を覆い隠して泣きそうになつたところで気がついた。そう言えば俺まだ折本達に無理矢理付けさせられた眼鏡かけてたんだな。そりやわかんねえわ。

俺はそれを外して小町に顔を向けて俺だと言うとまだ寝ぼけているのか「あー、お兄

ちやんだあ」とかわいらしくほにやんと笑顔を向けてくれる。やはり俺の妹が千葉で一番だ！ 高坂家には悪いがこれだけは譲らんぞ！

「ほら、起きたなら顔洗つてこい」

「はあーい」

とてとてと洗面所に歩いていく天使を見送り席に着く。そして今日のオムライスのデキを見てみよう。卵の焼け具合、キレイに包んであるか、匂い、とりあえずはそこら辺だな。

いや、見ただけで味までは流石にわかんねえっす。勘弁してつかんさあい。

「お待たせお兄ちゃん」

おつと、さつきまでのほにやんとした表情からいつも通りに戻つたな。いつもあんな顔でいられたら困るけどな。かわいすぎて。

「おう、はよ席に着け」

「うん！」

またしてもとてと歩く小町。その歩き方流行つてるの？ カわいいから許すけど。

「「いただきます」」

一口食べてみる。……うむ、いい出来だ。

「もごろめおみいみやん！ もうはもこまつためも、もこいつてたの？」

「ん？ 今日は買い物に付き合わされてな。あと口の中に物を入れながら喋るな」
ちなみに小町は「どころでお兄ちゃん！ 今日は遅かつたけど、どこ行つてたの？」と言
いたかつたんだろう。良い子は口の中に物を入れながら喋っちゃダメだよ！ お兄
ちゃんとのお約束！ よく伝わつたなとか疑問に思つたそこのお前！ 妹の考へてる
ことくらいわからぬで千葉のお兄ちゃんになれるわけないだろ！ だからさつきか
ら俺は誰に向かつて言つているんだ。

「そうなんだ。……まさか荷物持ちさせられたり？」

「あー、いやそういうのではない。なんなら俺の買い物？ なんだ」

「お兄ちゃんの？ なんで？」

「なんであつて聞かれてもなあ。強いていうならアレだな。『比企谷改造計画』だつけか
？ 結局このメガネ買つたくらいだけだ。金とかもそんな無いし。その分服とか
色々着せ替えさせられたけどな！」

「そう言えばお兄ちゃんメガネかけてなかつた？ どうしたのそれ？」

「ん？ あーアレか。買わされたんだよ。これかけるとな、ほれ」

ポケットに入れておいたメガネを装着する。するとなんていうことでしょう。小町
ちゃんがスプーンを床に落としてしまつたではありませんか。

「おい小町？ 大丈夫か？」

「お、おお、おおおおお兄ちゃんの腐り目が隠れてる！」

「小町ちゃん？ ちよいと言いすぎでは？ お兄ちゃん心に傷を負いますよ？」

「まあ俺もこれかけて鏡見たら別人に見えたしな。どうだ？ 似合つてるか？」

「うん！ かつこいいよお兄ちゃん！」

よし、これから毎日これかけよう。小町の好感度もうなぎのぼりみたいだしな。

「それでお兄ちゃんは誰と買いに行つたの？ もしかして女人の人？」

「そうだぞ。小町にも褒められたし今回ばかりは折本に感謝しねえとな」

「へえ～、折本さんって言うんだ。そつかあ。お兄ちゃんが女人の人とね～」

そう言うとまたぱくぱくとオムライスを食べ始めた。しばらくテレビを見ながらオムライスを食べ、きちんとごちそうさまをした後食器を小町と一緒に洗い風呂に入つてリビングでまつたりとし、時間もいい具合になつたところで寝ることにした。

「それじゃあお兄ちゃんおやすみ～」

「おう、おやすみ」

ふう、今日は疲れたな……。早く寝るか。電気を消しベッドにダイブして目をつぶる。ああ、そう言えば明日髪型もセットしてくるよう言われたなーなんて思い出しつつ意識を――

「お兄ちゃんが女人とお買い物した!?」
「うおおお!?」

手放そうとしたところで小町が廊下を走った勢いのまま俺の部屋の扉をすごい勢いで開けてきた。ちょ、小町ちゃん!? なんでそんなに慌ててるの?
「お、お兄ちゃん！ 女の人と買い物したってどういう事!?」

「ま、待て小町。落ち着け」

「だつてあのお兄ちゃんだよ!? なんで!? どうしたらそうなつたの!?」

あのつてどのお兄ちゃんでしようか？ まあ確かにぼっちの俺が女子と買い物だなんておかしいからな。小町が取り乱すのも無理はないのか？

「とりあえず今日はもう遅いから明日でいいか？ お兄ちゃん今日は疲れちゃつたんだ

だ

「うー、わかつた。その代わりお兄ちゃん！ 今日は一緒に寝ましょー！」

「おう、そのくらいならいいぞ。ほれ、枕持つてこい」

「はーい！」

はあ、明日は明日でまた忙しくなりそうだな……。
やはり俺の中学生活はまちがい始めている。

やはり俺の改造計画は間違つていないらしい。

翌日の朝、小町に昨日何があつたのかめちゃくちゃ話させられた。そのせいで小町が少し登校するのが遅れてしまった。俺が女子とお出かけするのがそんなにおかしいのか？ おかしいですよねわかります。なんなら男とも出かけたことなかつたし。友達いないから！

さて、俺もさつさと行きたいところなんだが思いの外身支度に手間取つてしまいギリギリの登校になつてしまつた。いつもはリビングでのんびりしてからギリギリ間に合うように行つてゐるのに。結局ギリギリなのかよ。

ところ変わつて学校に着いたわけなんだがどういう訳かあちこちから変な視線を感じる。

え、なんですか俺の今の格好おかしいですかおかしいですよねわかります。俺でさえ誰だ貴様つて感じだし。どうせ周りの奴らも「えー、イメチエンしたの？」「イメチエンが許されるのは1年生の夏までだよねー」「きやはははは！」とかそんな感じの会話だろ？

大丈夫、少し目が湿つてきただけだから。うん、ホントに全然大丈夫だよ？ だつて

八幡は強い子だもん！

そしてとうとう俺は教室の前に着てしまつた。

……やつぱ今からでもメガネとつて髪もいつも通りにしたい。したいんだけどまた折本とかが言つてきそうだ。それは大変面倒臭い。面倒じやなかつたらやらないんですわかりやがれ。まあいつまでもここにつつ立つてると怪奇な目で見られるため覚悟を決めて入るか。いいか？ 1、2の3だぞ？ いくぞ？ 1、2の――

ガラツ

3で開けようとしたら目の前にクラスの女子が現れた！ ハチマンはどうする！

1. 逃げる

2. 謝る

3. 土下座

4. 死んだふりをする

とりあえず4は却下だ。そんなことしたら俺の中学生生活は別の意味でも終わつてしまふ。そして3も相手に迷惑を被る！ 1は1で失礼になる！ なら俺の選択肢は1つ！

「あ、えっと、す、すみません……」

バツカ！ 僕のバーカ！ なんで5文字の単語ですら噛むんだよ！ あとどもりす

ぎだバーカバーカ！ 僕のバカー！

『あ、いえ大丈夫です……』

ほら見ろ！ 僕があまりにも俺が気持ち悪すぎて引いてるじゃねえか！

ああ、もうヤダ八幡お家帰りたい……。

はあ、とりあえず自分の席に着くか。折本たちにちゃんと身だしなみ整えてることを報告するのはまた後でいいだろ。まあそんなこと思つてると来るんだろうなあいつら。

「おーい比企谷一。ちょっとこっち来てー」

来るんじやなくて俺が呼ばれることになりました。ここで無視してもいい事はないため素直に折本達が集まつての方に向かうこととした。

「んー、やっぱりこっちの方がいいよねー」

「たしかに。目がいい感じに隠れてるし」

「これはいいビフォーアフターの例だねー」

『それなー』

あのもういいですか？ クラスの目線がズシャズシャくるんですよ。ちょっと効果音が痛すぎない？ 皆どんだけこっちを凝視してんだよ。

「よし、とりあえず首から上の問題は完了だね。そしたら最後に……」

「美咲！」

「がつてん」

何故か仲町と三木が俺の後ろに立ち両腕を掴む。ん？ 何が始まるつて――

「せいやつ」

「――つい！」

俺の腕を後ろに回され、背中には足裏の感触がしている。いやそれだけではない。痛みだ。純粹な痛みが俺の身体を駆け巡るううう！

「え、ちよなにこれ待て痛い痛い痛い！」

「比企谷つてばかりなり猫背だから姿勢も直さないと」

いやだからつてキツすぎやしませんかね!? 何事も急にやるのは良くないと思います！

「許せ比企谷。これは私のストレス発散のためのものもあるんだ。ほれほれ、いい声を聞かせておくれ」

「美咲が変なキャラになつてるけど気にならないでね比企谷君。なんやかんや言つて美咲も比企谷君のために頑張つてるから」

「千佳、わざわざそういう事を言わないのも愛なんだよ」

「それはわかつたからそろそろやめてくれっ。本格的に身体のつ、反り返りが、ヤバく

なってきたつ」

身体からミシミシと聞こえたらいけない音が聞こえ始めた。いい加減離してくれないどつかの骨が折れる。いや、実際折れるかは知らんけど。

「ん、じゃあそろそろいいかな」

「もう少しやりたかった」

なんとか両腕が開放された。にしてもかなり痛てえな。女子2人がかりでまさかここまでやられるとは……。

「ほら比企谷もシャキッと立つてみ？」

シャキッつて言われてもなあ。そんな変わんねえと思——

「あ？ あれ？」

しつかり背筋を伸ばして立つてみると、だいぶ目線が高くなつた気がする。もしかして俺つてそんなに猫背だつたのか？

「よし！ これで『比企谷改造計画』もだいたい終わつたかな」

「そうだねー。てか比企谷めつちや見た目変わりすぎて受けるんだけど！」

「かつこいいかつこいい。鼻血が吹き出ちやいそうなくらいかつこいい」

『あー、美咲のヨダレ垂れてるよ』

『まつたく、ほらこれ使いな』

「ありがとーお礼にギュッしてあげる」

『逆にギュッてさせて』

そんな変わってるのか？ たしかに昨日寝ぼけていたとはいえ身内の小町でさえ俺だとわからなかつたしな。メガネしただけなのに。あれ？ もしかして俺つて小町に目の濁りで俺だつて判別されてた？ なにそれ泣きたくなつてきた。

『あのー、折本さん。その人つてまさかあの比企谷なの？』

どうやらこちらの話が漏れていたらしく未だにクラスの視線が集まつている。そして折本は、

「そうだよー。あたしの彼氏の比企谷八幡だよ」

と言つた。ヤバい何かデジヤヴが。耳を塞ぐ準備をしなくてわ。同じことを思つたのか仲町さんたちも耳を塞いでいた。あ、もう想定してたんですねわかります。

『『『ええええええええ！』』』

(((((もうテンプレになりそうだ（よね）（よな）このやり取り))))

おそらく俺と仲町さんたちの思つたことは同じだつたと思つてゐる。いやなテンプ
レだなおい。

またしても俺は体育館に呼ばれてしまつたようだ。

時は放課後、俺はただいま体育館裏におります……つてなんかこのパターンもうやつたな。何なの？ 皆どんだけ体育館裏好きなの？ ベタすぎて俺までベツタベタの物語の主人公にさせられちゃうの？

あ、余談だけどベツタベタつてなんかばつちい感じがするよね。どうでもいいけど。さて、それじやあ俺が今どういう状況かどうせわからない人がいないと思うため説明は省かせてもらおう。ならば俺がすべきことはただ一つ。

『おい比企谷。お前どういうつもりだ』

「はいはいちよいとストップです。もつと穏やかな雰囲気で話をしてもらいましょ。貴方たちの獲物がビクビクしてるじゃないですかヤバいなにこの生き物持ち帰りたい」「俺はお前にストップをかけたいんだが。なんでここにいるんだよ」

「面白そだつたから？」

「疑問形で返すなよ……」

なぜ三木がこの場にいるかは面倒とかではなく本当にわからぬいためこの説明も省かざるを得ない。いや、ホントだよ？ 実は堂々と俺の隣を歩いてたなんて知らないよ

? ハチマンウソツカナイ。

『くそ、まさか我が校のマスコットまで……！』

『許すまじまじ比企谷某つ！』

『もうアイツ殺して顔の皮剥いで俺に付け替えればいいんじゃ……。ふ、フフフフフ
フフフフ』

なんかすごい危ない雰囲気なんだけど。てか最後のやつ過激すぎない？ 俺なんか
の皮を剥いでも目の濁りなんかしねえと後悔しかしねえぞ？

「とにかくだ比企谷。お前そのメガネとか髪型はなんだ」

あれ、コイツたしか昨日俺が壁ドン（物理）したやつじやねえか。おかわり欲しいの
？

「なんだかんだと聞かれたら、答えてあげるが世の情け、世界の破壊を防ぐため世界の平
和を守るため、愛と真実の悪を貫く、ラブリー・チャーミーな敵役——」

「話が進まねえから少し静かにしてろ。メガネは目の濁り隠しのための伊達メガネで髪
型は折本に強制されたんだよ」

『なら今朝の三木と仲町の足蹴はなんだよ！ 羨ま、じやなくて妬ましいぞ！』

「アレは猫背の矯正だ。乱暴過ぎて目の前に川が見えたな」

「そつかそつか。そんなに気持ちよかつたんだ。またやつてあげる」

「ちよつと？ 今死にかけたっていう話をしてたんですけど？ 気持ちよかつたらお花畠だろ普通」

極楽浄土と厭離穢土並の違いがあるからね？ それになんでこの歳で閻魔様に裁かれにやならんのだ。あ、でも某幻想な？ に出てくるヤマザナドウにだつたら裁かれたいです。え？ 鬼灯さん？ 知らない人ですねえ。

『とにかく昨日の今日でこんなにかつこよ、じやなく変わるなんておかしすぎる！ 本当はイケメンだつたパターンとかマンガやアニメだけの話じやないのか畜生が！ 俺もメガネかければイケメンになれるのかそうなのか!?』

なんか八つ当たりみたいな感じになつてるんですけど。つーかメガネかけただけでそんな変わらんと思うけどな。てかお前も充分イケメンだろ。つち！ 爆ぜろイケメン！

「大丈夫、私達がいるここもとあるラノベの二次創さ——

「おいバカやめる」

なぜかそれ以上言わせたらいけない気がしたため口をふさがせてもらつた。いや、たぶんホントにダメだから。メタいから。

「ひひふあふあ。ふおおふえほふあはひへ」

「ん？ ああスマン」

三木の口をふさいでいた手をどけ謝る。いや、たしかに今のは俺が悪かつたな。半分くらいはな。残り半分コイツのせい。

「つーかさつきから脱線しまくってんな。恐るべし三木美咲。ネタの塊だな。
「とりあえず話をしよう。結局俺になんの話があつて呼んだんだよ」

実は授業中も昨日の疲れがとれていなかつたのか居眠りしたので、早く家に帰つてもう一眠りしたいんだよ。

「あー、いやその実はだな……。お前には、話が……」

なんだコイツもじもじし始めたぞ。トイレか？ さつきといけよ。

『おい頑張れよ！ こんなところで挫けるお前じやないだろ！』

『そうだ！ お前なら出来る！』

『ネバーギブアップ！』

「もつとお米食べろよ！」

「お、お前ら……！」

え、なんなんですかこの空気。てか三木さん？ 関係ないんだからこつちでおとなしくしてなさい。

「ひ、比企谷八幡！」

「ふあ、ふあい！」

ビッククリして声が上ずつちまつたよちくしょうめ。

「お前に惚れた！ 付き合つて——」

「ストオオオオオオオツプ！」

『『『[?]』』』

「いらない！ 比企谷にBL要素いらないから！」

いきなりどーんと横から衝撃が走る。

ちよつ、えつ、誰？ と思つた衝撃が来た方を見るとそこにいたのは折本だった。

あの折本さん？ 「びーえる要素」つていつたいなんでせうか？

「邪魔しないでくれかおり！ 僕は純粹に比企谷のことを！」

「あーもううつさい！ 比企谷はあたしのなの！ 比企谷に近づくなホモ！ マジウケ

ねえから！」

「さあ比企谷。ここは『やめて！ 私のために争わないで！』つていう場面だよ」

「比企谷を少しの間いじつていいから美咲は黙つて！」

「やつたぜ」

ヤバいなんだこのカオス。てか「びーえる」と「ホモ」つて何？ どういう意味？

「BLつていうのはボーイズラブの略称だよ。それでホモはね、簡単に言うと男の人が同性を好きになることを言うんだよ。やつたね比企谷愛人が出来るよ」

「いやいらねえから。つーか折本のやつなんであんなキレイてんだ?」

「そりやあ比企谷のこと好きだからね。あ、ちなみに私も好きだよ?」

「……おお、そうか」

「あれ? なんか少しここら辺の温度高くなつてない? ちよつと暑いなー。」

「だいたい昨日比企谷のことを——!」

「それは謝る。だが——!」

ていうかあつちはいつになつたら終わるんでしょうね。もう眠いし現実逃避も兼ね
て寝るか。

俺と折本は初めて体験をする。

体育館裏でのゴタゴタが終わって、俺は折本と二人だけで帰っている。

本当なら三木達も一緒に帰るつもりだったのだが、一昨日は結局一人で帰り、昨日は折本グループに買い物に付き合わされて二人つきりになれずじまいに恋人みたいな事が出来てない。だから一人で帰ろう！ と折本に誘われたからである。

ちなみに三木もちやつかり一緒になつて帰ろうとしてたが仲町達に引きずられて帰つていつた。なので付き合い始めて3日目にしてようやく一緒に下校イベントが発生した。

いや、普通とかそういうの知らないけどたぶん遅くない？

このイベントつてそんなもつたいぶるようなものじゃないよね？ あ、でもアレだよ？ 別にしたくなくてしてなかつたわけじゃないんだよ？ ホントだよ？ 面倒だつたとか周りの人の視線が気になるからとかそんなんじゃないんだからね！ なんでツンデレ風になつてんだよ気持ち悪いな。そもそもなんだよ女子と下校するつて。んなことしたことねえからソワソワするんだよ。

チラッと折本の方を見てみるとまだ怒つている感じがする。なんで怒つてんだ？

俺がホモ？ とかいうのに告白されたからか？

それにしてもあの時の折本はキヤラ崩壊しそうじやないか？ いつもウケるとか言つてる折本だぞ？ なんかのドラマ？ で見た「おめえの席ねえから」って言つてた人の人並の眼光だつたぞ。

え、わからない？ ググれ。

「ねえ比企谷」

「ひや、ひやい」

頭の中で色々考え事していた時にいきなり呼ばれたため声が裏返つてしまう。いや、そうじやなくとも俺は裏返る時はあるが。

「驚きすぎだつて。……比企谷はさ、男の子に興味があつたりする？」

「は？」

ちょっと折本さん？ いきなり何を言つているんですか？

「いやさ、別に同性同士で好きになつちやうっていうのはなくはないことだと思うし、もしかしたら比企谷もそうなのかなー、つて思つてさ」

つまりあれか？ 僕が男好きのホモ野郎じやないかつて疑つているつてことなのかな？ よし、少し想像してみよう。俺がアイツとイチャイチャして――、

「おえええ……」

した瞬間吐き気がした。これはマズイ。本当に吐きたくなつた。

「ちよ、比企谷大丈夫!？」

「ああ、気にするな。ちよっともし俺がホモだつたらという想像をしたら吐き気を催しただけ」

「おえ、ちよつと酸っぱい匂いが……。少し休みたいわ。

「ちよつとそこの公園のベンチで休まない？ 飲み物買つてくるから」

「大丈夫だ、問題ない。でもベンチには座らせてくれ。少し休みたい」

なんとか公園内にあるベンチに腰掛ける。折本も俺の隣を陣取りつつ、スカートを正しながらスッと座る。

ふう、座るつて素晴らしいよな。立つてる時よりも圧倒的に楽だもん。まさかこんな事でそう思う事になるとは……。

「……ん、これもしかして吐き気を催してなかつたらカツプルみたいな行為なのかな？」

ふと、そんな事を考えてみる。

一般的な男女の交際をいくつか妬ましい気持ちと共にその光景を見てみたが、下校途中に公園等の落ち着ける場所で二人で語らう。そういうものがカツプルの形の一つでは無いか。

「カツプルとか比企谷が言うとウケるんだけど」

その眩きを聞いた折本は少し呆けた顔をしたかと思うと、すぐにふふっと堪える様に笑ってきた。

「なんでだよ。俺がカツプルとかいう単語使うのがおかしいか？ それとも俺と折本付き合っているわけないじゃんっていうパターン？ もしそうだつたら泣くぞ俺？」

なんなら社会的にも死ぬし物理的にも死んじやうまである。

「あー違う違う。ほら比企谷つて捻くれてるからそういう事言わなそุดだなーって思つてさ」

「別に俺は捻くれてねえと思うけどな……」

そんなに捻くれてんのか？ 帰つたら小町に聞いてみるか。小町が言うのであればそうなのだろう。なんやかんやでもう12年は一緒にいるからな。別に小町に甘いわけじやないからな？ ずっと一緒にいる相手に言われたら認めざるを得ないだけであるからして決して甘いわけではない。

「ほら、もつとこっちに寄つて」

パンパンどこだっこ、と言わんばかりに折本に誘われそこに座る。すると何を思つたのか俺の頭を掴み無理矢理引っ張られた。するとなんてことだろうか。俺の視界が90度回転したではないか。

あの折本さん、頭を椅子にぶつけるのでやめてください。ほら、頭に柔らかい感覚が

……。

柔らかい感触？

「あのー折本さん？ これはどういう」

これというのは折本による強制膝枕の事だ。うわなんだこれすげえ柔らかいいい匂いじやなくて、アレだ、恥ずかしいな。

「べつづにー？」 美咲が寝ている比企谷にこういうことしてて羨ましいとかそういうんじゃないから気にしなくていいんじゃない？ てかこの状態学校の誰かに見られたらどうしよ、マジでウケる

「いやウケねえから。てか俺そんなことされてたのか？」

「そん時熟睡してたっぽいしね。美咲め、こればっかりはウケないわ」

「それで今この状況はなんなんだ？ やりたかつただけなのか？ 恥ずかしいからやめたいたんだが」

「えー、それはないっしょ比企谷ー。なら他のこと……あつ」

何を思いついたのか知らんが解放されたため体制を整えて折本を見るとめっちゃいい笑顔をしている。おかげで俺は冷や汗がダツクダクだ。

「ねえ、ひーきーがーやーくーん」

「な、なんでひょうか折本ひやん」

「んっ」

腕を広げてくる折本。えっと、これでどうしろと言うんだ？

「ほらはやくー。ハグだよハグ」

……まさか俺からやらせようつて言うのか？ 言つちやあなんだが俺にそんな度胸ねえよ。小町にならいくらでもしてやれるが。あれ？ もしかして俺つてば折本より小町の方が好きなんですかね？」

「…………比企谷？」

なんでそんな目をうるうるさせんだよ。しかも上目遣いで。普通にドキッとしたじやねえかよ。しかしながらさすがに腐つても恋人を待たせるのはアレなため覚悟を決めおそるおそる折本を抱き寄せた。すると折本も俺の身体にしがみつくようにギュツとしてきた。

「……へへっ、比企谷つて女の子にこうしたことしたことがあるの？」

「妹を抜きにして考えるなら無いな。てか知つてんだろう？」

「まあ、ね。ヒヒツ、比企谷の初めてもらつちゃつた」

「言い方が酷すぎやしませんかね」

何も知らない人が聞いたら他のことを思い浮かべるだろうな。ナニとな言わなが。「ね、もう少し強くしてくれない？」

耳元でささやかれる折本の声に少し反応してしまつたが、それに答えようと力を強めようとしたところで、

「ほほう、お兄ちゃんも折本さんもなかなか大胆ですねこんな場所で」
もしかしたら折本よりも好きなんじやないかと疑われている小町ちゃんが携帯を持ちつつニヤニヤとしていた。

やはり小町に俺と折本が付き合っていることを話すのは間違つていな。

おっす！ オラ八幡！ ヤベエぞ、折本に抱きしめてたところを小町に見られちまつた！ これから何されつかわかったもんじやねえぞ☆

……なんだこれ。どこぞのスーパー野菜人だよ。動搖しすぎて口調変わりまくりじゃねえか。小町の手に握られてる携帯が気にならないレベル。

「小町、いつから見てた？」

「えー？ お兄ちゃんが学校から出てきたところくらいからかなー？ たまにはお兄ちゃんと一緒に帰ろうと思つて迎えに来たの！」

最初から見てたんだね小町ちゃんよ。ついでに写メ撮りながらつけてきたのか。ということは俺がひざ枕されてたところも撮つたつて事だよな？ 後で送つてくれねえかな。

「比企谷、この娘つて比企谷の妹なの？」

「ん？ ああ。まさしく俺のかわいい妹、天使だな」

「やだなーお兄ちゃん。かわいいなんて上手なんだからー」

事実だから仕方ないな。うちの家族は全員小町を愛してるからな。なんなら俺への愛も小町に注いでるくらいだ。親父とかマジでそれだ。この頃だと愛が重すぎて小町からウザがられてるからザマアミロとしか言いようがない。小町は俺の妹だ！ 絶対嫁にはやらん！

「改めまして、比企谷小町です！ 兄がお世話になつているようで」

「あ、折本かおりだよ。よろしくね小町ちゃん」

「はい！ よろしくお願ひしますかおりさん！ ほっほう、あなたが話に聞いたかおりさんでしたか。時にかおりさん、お兄ちゃんとはどこまでいきましたか？」

「……へ？」

「ちょっと小町ちゃん？ いきなりビストレートすぎやしません？ まだ付き合つてから3日目なのよ？ 何かあるわけないジャマイカ。

「いえいえ、最近の子どもはこういうのは早いと聞いてますし。それで、どこまで行つたんですか？」

「小町、一応言つておくが俺らまだちゃんと話すようになつたの二日前だぞ。何かあるわけないだろ」

「え、それなのにひざ枕とかハグしてたりしてたの？」
地味に痛いところ突いてくるな。確かにさつきのアレを見たらタダの友達とは思わ

「ねえよな。俺だつて爆発しろとか思うし。」

「ところで比企谷、小町ちゃんに私達の事つて」

「いや、まだ話してない。お前の存在を教えたのも昨日の夜だつたし」

ヒソヒソと耳打ちをしてきた折本に対しても、俺も折本の耳に口を近づけて話す。くすぐつたいのか吐息を漏らしていたのがエロいと思つた俺は正常だと願いたい。

「それでお兄ちゃんととかおりさんはどんな間柄なんですか？　まさか未来のお義姉ちゃん候補!?」

「あー、小町？　実はだな」

「私達、付き合つててさ」

「……へあ!?」

なにその奇声。さすがのお兄ちゃんでも引いちやうよ？

「ま、まさか冗談半分で言つたのに、お、おおおお兄ちゃんに彼女？　嘘、コレ現実？」

「ん、まあ現実だと思うぞ」

「……お兄ちゃん、念のため小町のほっぺたつまんで」

「こうか？」

びよーんと小町のほっぺを左右に引っ張る。やーらけー。ずっとやつても飽きねえ。もう持ち帰つていいか？　あ、同じ家だつたか。これは失念した。

「ふう、夢じやないみたいだね。ところでどつちから告白したんですか？　お兄ちゃんはアレなのでかおりさんからの方が可能性がありそうな感じが——」

「比企谷から告白されたよ」

「…………へ？」

「比企谷から告白されたよ」

「すみません小町の耳はお兄ちゃんの目くらい腐つてきたみたいで、もう一度お願ひしてもいいですか？」

「比企谷から告白されたよ」

「…………へあ!?」

　　はい本日2回目のへあ!?　いたできました。それより小町ちゃん、俺の目と同じくらい耳が腐つたってどういう事？　耳鼻科に行つても手遅れなレベルじゃないの。
「いやー、比企谷の告白男らしかったよー？　ちゃんと面と向かつて告白してきたり、そ
こらの男より遙かにいい男だとと思うよ?」

まあ告白の理由が酷いものなので絶対言わねえけど。言つたら小町に嫌われる。そ
れだけは絶対に回避したい。

「そ、そうなんですか。やるじやんお兄ちゃん」

「まあな」

言えない。この純粹な目の前ではどうして俺が告白したのか絶対に言えない。言つたら確實に侮蔑の目に変わってしまう。もしされたら何もかもを捨てて死ぬかもしれない。

「あ、お兄ちゃんはちょっとあつちに行つてくれない？ ちょびつとだけかおりさんとお話ししたいから」

「ええ？ お兄ちゃんちょっと気分悪くて座つてたんだが……まあいいか。ならついでに飲み物買つてくるが小町はオレンジジュースで折本は何がいい？」

「え、あ、いいよ別に」

「そうか？ なら行つてくる」

折本達から離れてほんの数分。マツ缶を片手に自販機の前でボーッとする。いつも俺じや考えられないシチュエーションだ。平日は寄り道せず直帰するし、土日祝日はよほどのことがない限り外に出るなんてありえないからな。こうやつて外でぼんやりする日が来るとは予想もしてなかつた。

ところでちょっと席を外してつて言われたもののどれくらい待てばいいだろうか。
まあそろそろ行つてもいいだろ。とか適当な判断をして小町と折本用に飲み物を自販
機からお金を対価にペットボトルと缶を生成した。これが鍊金術だぜ！　いや、違うか
？　違うな。

「は、八幡！」

戻つた俺を待ち受けていたのは真つ赤な顔をして俺の名前を呼ぶ折本の団だつた。

僕と小町と折本と。

「は、八幡！」

顔を真っ赤にした折本がそう言つた。いや、待て待て待て。これは一体どういう事なんのん？ 小町か。小町が原因なのか。

「いやあ、せつかく恋人同士になつたんだから下の名前で呼びあつた方がいいんじやないかなーって」

「なるほど、とりあえず小町は帰つたら覚えとけ」

なんで!? と驚いている小町を放置して折本の方に体を向ける。するとあははと照れくさそうに笑う。

「い、いやー、慣れないことするもんじやないね。ちょっと緊張してウケたわ」

「すまんなうちの妹が」

「んーん、別にいいよ。小町ちゃんの言い分もあるかなーって思つたし」

「まあ……、たしかにそうかもしれないな」

最近読んだラノベでも恋人同士で苗字で呼びあつてるカップル見たことねえし。てか付き合つてんのにお互い苗字呼びつて無しなのか？ 別に呼びやすい方で呼べばい

いと思うんだが。

「うわー、お兄ちゃんそれはないよ」

「待ちなさい小町ちゃん？ いきなりお兄ちゃんの思考を読まないでくれない？ 少しピックリするから」

「だつてお兄ちゃんつてばけつこー顔に出てるんだもん。わかりやすいよ？」

「マジか。俺としてはかなり精度の高いポーカーフエイスしてると思つてたんだが……。八幡、ちょっとショックよ。」

「それでそれでかおりさん！ どうです？ 今後お兄ちゃんのこと八幡つて呼んでみては？」

「あー、一旦保留で」

「そうですかー。残念です！」

ニパッと笑う小町を見て思わず頭を撫でかけてしまう。待て、落ち着くんだ八幡。

家に帰ればいくらでも出来るだろ！ 家に帰つたら結局やつちやうのかよ。

「ところで比企谷はどうする？」

「どうするつて何が？」

「私のことかおりつて呼んでみる？」

「ちょっとハードルが高すぎて着地失敗して大怪我しそうだから辞めとく」

「なにそれ意味わからなすぎウケる」

「いや、ウケねえから」

もう恒例行事なのん？ つて思うほどこのやり取りしたな。もう両手で数え切れな
いくらいやつたんじやないかしら？ 実際にはまだそこまでやつてないが。

「もー、お兄ちゃんつてばヘタレなんだがら」

「お前それどこで習つた？ まだそういう言葉は覚えなくていいからな」

本当に誰だ。俺の天使にこんな入れ知恵したヤツ。絶対に許さねえ。

「まあいいや。お兄ちゃんだし」

「まあ比企谷だしね」

えー、なんか2人してよくわからない納得の仕方したんだけど。俺だから何なんだ
よ。誰か教えてくれなんでもするから。

「あ、そうだ！ かおりさんはこの後何か用事とかありますか？」

「特に無いけど？」

「よかつたら家に寄つていきませんか？ 歓迎しますよ！」

「は？」

「え、いいの？」

「はい！ もう全然うえるこめ？ です！」

それを言うならウエルカムだろ。まあまだ小六だし仕方ないっていうか勝手に折本を家に招こうとするなよ。部屋散らかってんだよ。

「じゃあお言葉に甘えようかな。いいでしょ比企谷？」

やめてっ！ そんな上目遣いで俺を見ないで！ 腐った目が浄化しちゃう！ いや、

浄化した方がいい気がする。むしろいい事だつたわ。

しかし彼女とはいえいきなり家に招き入れるのはどうかと思う。ここは断つた方がいい。よし、そうしよう。

「……少しだけだぞ」

あっれれー？ なんか思つてたことと違う言葉が出た気がするぞおー？ どこに行つたさつきまであつたはずの決意は。

「ではではお兄ちゃんのお許しも出たので早速行きましょー！」

朗らかな小町を先頭歩いていく二人の背中を見てため息を一つついて俺も歩き始めた。少し口角がつり上がりつていたと思うが、まあ気のせいだろう。

やはり俺が小町達に料理を作るのは間違つてない?

折本を我が家に招き久々に小町以外の人と晚餐をすることになつた今日。料理を担当するのは俺だ。

あれ、俺が作るのか? 折本に? ハードル高えなオイ。

「おじやましまーす」

「それじゃあお兄ちゃん。腕によりをかけて作つてね! 小町はかおりさんとお部屋でお話してから!」

リビングに入つてすぐに小町はお兄ちゃんを手伝わない宣言をし、それを涙目ながら引き受ける俺の図。まあ別にいいんだけどね? でもせめて俺の目の届くところのいて欲しかつたな。

「え、ひき——八幡が作るの?」

「まあな。まだ小学生の小町に料理作らせて包丁で指とか切つちまつたら俺は罪悪感に押し潰された後、親父にオーバーキルされた後で母ちゃんに死体撃ちされるからな」「へー、そなんだ」

無関心な返事ありがとう。おかげで俺の心へのダメージが増し増しになつたよ。

「まあその分小町には洗濯物を干してもらうという重労働をしてもらつてるからおあいこなんだよ」

「つまりそれ以外はひ、じやなくて八幡の仕事なの?」

「そうだな。ていうか、無理して下の名前で呼ばなくともいいぞ」

呼びなれてない分俺も少し恥ずかしいし。

「えー、せっかく恋人同士なのにー?」

「とは言つてもな小町よ。もしお前に好きな人が出来てソイツと付き合うことが出来たとしてソイツを下の名前でいきなり呼ぶことできるか? まあそれ以前に俺がソイツぶつ飛ばすけど

「うーん、まあそうかもしないけど……。あと最後のはいらないよね?」

「最重要項目だ」

家の天使を誰があげるかつてんだ。お兄ちゃん許しませんよ!」

「比企谷つてシスコン?」

「断じて違う。ただ妹がかわいいだけだ」

「やだなあお兄ちゃんつてばそんなこと言われると小町照れるよ〜」

「やつぱり小町はかわいい」

「お兄ちゃん……」

「ああ、俺はなんて素晴らしい妹を持つてしまつたんだろうか。俺はコイツのためだけに生きていいける自信が——」

「まあ小町はそうでもないけどね」

「ぐはあ」

「小町の攻撃！ クリティカルヒット！ 八幡は8万のダメージを受けた！」

い、今のは本当に心が折れかけた。普通に目の前が真っ暗になつたよ？ もう少しでシヨツク死するか飛び降り自殺くらいはする可能性もありえないな。小町を残して逝く程俺はクズじやない！

「……시스コン」

「待て折本。なんでそんな冷ややかな目で俺を見てくる」

「べつにー？」

「何も無いし」

いや完全に怒つてるだろ。しかしながら何故折本は怒つているんだ？ よし、ここは八幡の八万あるうちの1つの特技、『状況整理』をしてみよう。

今は廊下のど真ん中。そして俺と小町がイチャついていた。なるほど、原因まるつきりそれじyan。

「あー、悪かつた。お客様をもてなす前にこんな事されてたらイラつくわな」「……別にそんなんじゃないし」

「あーあ、お兄ちゃんつてば女心がわかってないなー」

いや、この状況だとそれぐらいしか思いつかないんだけど。え、何？　俺つてそんなに女心わかつてない？　いやいや、少女マンガも購読している俺にそんな死角があるわけない！

「じゃあ軽く飯作つてるから小町の部屋でくつろいでてくれ」「ラジャー！」

「あ、私もなんか手伝つた方が」

「いいんだよ。客人に手伝わせるわけにはいかん。暇なら小町の相手してやつてくれ」「んー、まあそう言うなら……」

「じゃあ小町。後は任せた」

はーいと可愛らしい返事を背に台所へ向かう。さて、何を作ろうか。ぶつちやけまだ時間は沢山あるからなー。あ、折本つて好き嫌いあるのか聞くの忘れてた。くつ、八幡、一生の不覚！　この程度が不覚になるほど他にやらかした事が無いだけなんだけど。ほら、俺、ぼつちだから。ぼつちだから！

まあいいや。煮込む系の料理作る。材料は——あるな。よつし、愛しの小町と折本の

ために頑張っちゃうぞ☆ はい気持ち悪い。

82 やはり俺が小町達に料理を作るのは間違ってない?

「よつし、こんなもんか」

現在時刻は七時と少し過ぎ、エプロンをとつてハンガーに掛ける。リビングに小町達が居ないことから自室にいるのだろうと思い目的地へ。階段を上つていると話し声が聞こえてきた。何故か俺の部屋から。

は？ なんで俺の部屋にいるん？ もしかして俺の見てはならない秘密のノートとか探し当てられてそれを肴に話してるので？ そんなことする子には晩御飯抜きだからね！ まあ最終的に小町の上目遣いで許しちゃうんだけど。

『へー、まさか比企谷にこんな趣味があつたなんてねー』

『小町もよく借りに来るんですけど、なんで小町よりこんなに多く……』

中からこんな会話が聴こえてくる。おつと、勘違いしないでもらいたい。俺は決して盗み聞きしている訳では無い。ただ中の様子を探っているだけだ。ホントだよ？ ハチマンウソツカナイ。

まあいつまでもここに立っているわけにもいかない。せつかくのご飯が冷めてしまう。意を決して我が城塞へ侵入する！

「おーい、飯だぞ」

「あ、お兄ちゃん。随分長かつたね」

「おう。てかなんで俺の部屋に？」

「いやー、暇だつたからお兄ちゃんの漫画読もうつてことになつて」

せめて一言俺に確認しようね？ 俺にもプライバシーがあるから。

「あ、比企谷ー！ このシリーズ貸してくれない？ 意外と面白くてさー」

「別に構わねえけど、次からは勝手に部屋に入らないようにしろよ？」

「なんど？」

「いやなんでつて……」

そりやあ男の子の部屋つて何があるか分かつたもんじやないじやん？ 女の子に見られたらヤバイやつとか。

「まあいいじやん。それよりご飯出来たんでしょ？」

「ん? ああ。今日は小町も好きかもしれないやつだぞ」

「もし小町が好きじゃないものだつたらどうする?」

「作り直す」

「食材がもつたいないから止めてね? そもそもお兄ちゃんの作つた料理で小町が好きじやないものなんて無いから」

「こ、 小町……」

「お兄ちゃん……」

「おーい、 私が蚊帳の外で寂しいよ。全然ウケないんだけどー」

「あ、ごめんなさい」

「許す」

許しちゃうのかよ。さつきやつたら不機嫌になつたのにどういうことだつてばさ。

「じゃあそれ片付けてから早く下に来いよ。せつかくの料理が冷めちゃうからな」

「はーい」

そう言い俺は部屋から出る。さてと、お米をよそつたりして待つてるか。ふふふ、あまりの美味しさに悶絶するがいい! ふはははは!

あ、
まだ中二病が治つてなかつた☆

てへぺろつ☆

やはり俺の妹は天使な件について。

「「ゞ」馳走様でした」

「おう、お粗末さん」

ちゃんと折本も美味しそうに食べててくれてよかつたわ。もし不味いなんて言われたら死ねるな。ちなみに小町に言われたら躊躇いなく首を吊るね。

「いやー、凄いね比企谷！ すつごく美味しかったし！」

おいおい、そんなキラキラした顔を俺に見せるな魅入った後告白して振られちやうだろ。あ、告白もしたし振られてなかつたわ。

「そうか、それはよかつた」

「今度あたしにも教えてくれない？ 上手に作れるようになつたらあたしも作つてあげるからさ！」

「ん、まあそのうちな」

「絶対比企谷のこと骨抜き出来るくらい美味しいもの作つてみせるから！ あ、てか骨抜きつて少し卑猥に聞こえるね！ ウケ——」

「小町が変な言葉を覚えちやうからそれ以上口を開いたら縫い合わすぞ」

まつたく。純粹無垢な大天使になんて言葉を覚えさせようとしたんだコイツ。うつかり肩をガツシリ……？ ガツシリ、だと？

「ひ、比企谷？ 私が悪かつたから……」

「あ、ああ。わりゆい……」

いかんな。折本のせい（おかげとも言うが）で人に対する距離感がおかしくなつている。気を付けろ俺。誰にでもこんな感じになつたらいつか通報されるぞ。

「へえ～。お兄ちゃん、なかなか積極的だね」

「今のこれを見てそう思うか？」

いや確かにこれだけならそうかもしけんがな。いつもは折本がグイグイ来てるし。

「ふう、いや確かに今のは不意打ちもあつてかなりグッと来たよ。いつもの比企谷から想像できない事だつたし！ ウケる！」

「いやウケねえだろ」

確かに今までの俺を鑑みるにそんな事は絶対しないはずだった。どれもこれも折本のせいだな。うん、そうに違いない。これからは更に気を引き締めていないと学校でもやらかすかも。

「いいな～お兄ちゃん。小町も彼氏作ろうかな？」

「よし、その時が来たらまず俺のところに連れてこい。処刑お話してやるしてやる」

「お兄ちゃん、本音がダダ漏れだよ……」

「比企谷のシスコンつぶりヤバいんだけど！ ウケる！」

仕方ないだろ？ 天使に近づいてくる虫なんぞ八万の必殺技シリーズを全部喰らわせただけじや足りないくらい愚かな行為なんだ。そもそも俺だけじやなく親父もいるからな。俺で終わつたら運がいい。親父は小町に俺の分の愛情を捧げているくらい小町のこと愛しているからな。もし彼氏の存在を知つた瞬間そこら辺火の海になるんじゃね？」

「まあ？ 小町はお兄ちゃんが一番大好きだから？ 作る気はないんだけどね？」

「ぐはっ」

か、可愛いいいい！ 可愛いぞ俺の妹！ 折本なんか目じやないぜ！ 我が妹の可愛さは宇宙一いいいいいい！

「……なんか美咲の前に小町ちやんに比企谷が盗られそうな気がしてならなくなつてきた。あたしも頑張らないとダメ、かなあ」

なんか折本が一人でブツブツ言つてるけど、それより小町を愛でるのに忙しくて聞き取る事が出来なかつた。

やはり俺が、彼女を家に送るのは間違つて……るのか？

しばらく小町と折本が談笑し、時折俺が合いの手をいれること一時間程。いい加減折本を帰さないと親御さんが心配するだろう時間になつてきた。しかし思いの外アレだな。時が流れるのが早く感じるな。

「折本、そろそろ帰らんとまずくないか？」

「へ？ あ、うわっ！ やつばい！ 連絡するのも忘れてた！」

「おいおい……」

「ご、ゴメン比企谷！ 小町ちゃん！ 帰るね！」

お、慌てすぎてドタバタしてゐるな。新鮮な気分になるな。ほら、いつもマイペースな折本だし。

「おい落ち着け折本。今更焦つてもしようがねえだろ」

「……それもそつか」

「とりあえず親に連絡しとけ」

「オッケー！」

折本がポケットからガラケーを取り出しカコカコと操作しているのを尻目に小町に

折本の荷物を持つてくるよう伝える。その間、俺はと言うと特に何もしなかつた。

いやまあアレですよ？ 勝手に女子の荷物を触つて見られたくないものとかあつたら危ないじやん？ だから俺は悪くない！ ていうか俺にもちやんとこの後仕事するからね？ いやホントマジで。

「よっし！ これで大丈夫！」

「あつ、かおりさんの荷物持つてきましたよ！」

「ありがと小町ちゃん！」

二階から学校指定のカバンを持って降りてきた小町を労う。
さて、ここから先が俺の仕事だな。

「ん、じゃあ行くぞ」

「行く？ どこに？」

折本の頭の上をクエスチョンマークが踊っているのが見える、気がする。

「送る」

「へ？」

「送るつつってんだよ」

「…………ごめん、もう一回言つて？」

「嫌なら別にいいんだけど」

「わー！　ごめんごめん！　お願ひ！　送つてつて！」

確かに俺が言いそうにならないからって面白がつて上手く聞き取れなかつたフリをするのはやめなさい。ホントに一人で帰すぞ。小町に嫌われそだからそんな事しないけども。

「んじや、先に外で準備してつから。小町、片付けと留守番を頼む。チャイムが鳴つても出ちゃダメだぞ？」

「はーい！　ささ、かおりさん！　お兄ちゃんの気が変わらないうちに！」

ちよつと小町ちゃん？　さすがのお兄ちゃんでもそんな早くやめようとか思わないからね？　いやまあ、待ち合わせで時間になつても待ち人が来なかつたら即行で帰るけどね？　俺も暇じやないし。ほら、アニメ観たり、本を読んだり……あれ？　俺つて結構暇人？

「お待たせ比企谷！」

「おう、待ったぞ」

「……少しは気の利いたこと、は言えるわけないか」

よくわかつているじやないか。さすがに俺と付き合おうとしたヤツだな。

「よし、んじやほれ」

俺はジエスチャードで折本に俺の後ろに乗るよう促した。もちろん自転車ですよ? バイクとか乗れるようになりたいがまだ乗れる歳じやないし……。カッコイイよね? バイクに乗れる人つて。まあ仮面ライダー程上手く乗れるようになりたい訳じやないけど。いやホントだよ? ハチマンウソツカナイ。

「うん、ありがとう」

「よし、じやあ行くぞ。道案内頼む」

「任せて!」

それからしばらくは折本とのんびり駄弁つたりしながら自転車を漕いでいた。しかしまあ、俺がこんな青春をするなんてな。去年の俺とか見てみろ。一人で本を読んでるか寝たフリしてるかだもんな。

「あ、トップ比企谷。ここまでで大丈夫」

意外と近かったな。これなら一緒に登下校とか出来そうだ……つておい、俺は今何を考えた? 折本と、一緒に、登下校だと? あまり思い上がるな盛った猿かつての。自

制を、理性を強く持たなければ。

「おう。あー、悪かつたな。こんな時間まで」

「いいよ、私もちゃんと連絡してなかつたわけだし

「……やっぱり謝りに行つた方がいいのか？ いや、でもなあ」

「？ 何独り言してんの？」

「……いや、何でもない。じやあまた明日な」

「あ、ストップ比企谷！」

「あがつ!?」

ペダルに力を入れ帰路に行こうとしたところで折本に台車を掴まれバランスを崩してサドルから尻が落ちて骨組みの所に股間を強かに打ち付けた。

ぐおおおおおお!? 何これ、潰れた？ ちよつと危ない感じがしたんだけど？ 無事か？俺の八幡は無事なのか？

「ぶつ、比企谷何今の声つ！ ちょーウケたわ！」

「…………」

「あれ？ 比企谷？」

「…………」

「おーい？ 比企谷？？」

94 やはり俺が、彼女を家に送るのは間違って……るのか?

「…………折本」

「な、何?」

「…………用があるなら三分くらい待つてくれ」

やはり俺が折本にデートの申し込みを受けるのは……その、照れる。

「…………それで折本、何の用だ？」

股間の痛みに耐えること数分。やつと治まってきたので折本の話を聞くことにした。
男子ならわかるよね？ 股間を打ちつけるこの痛みが。

「あー、えっと、ちょっと話がしたいから家に入ってくれないかなーって思つたんだけど
……ダメだよね～？」

「え、あ、ああ。家に居るとはいさすがに小町をこんな時間に一人にしておくのは心配
だしな」

「そつか……。うん、じゃあ次の土曜遊びに行かない？ ほら、付き合つてから美咲達と
ずっと一緒だったから二人きりで、っていうのが無かつたでしょ？ だからさ、いいで
しょ？」

つまりそれは、デートの申し込みですか？ ええ、いきなり？

でもそうだよな。付き合つてるならデートの一つや二つくらいするよな。俺が愛読
している少女漫画もデートしてる描写もあるからなあ。

でもなあ……、デートだろお？

いや、出来まい。
俺に出来る気がしない、というか俺つてリード出来るのか？

今までずっと他人と距離を置きまくつてた俺だ。一般学生のそれとは明らかにかけ離れているだろう。小学生の頃なんて一緒に遊べる奴いなくて一人野球とか一人テニスとか一人バレーくらいしかした事ない。……おかしいな、全部一人じや出来ないはずなの出來てる俺マジ強え。

じやなくて、さてどうしたものか。デートだろ？ デートなら受けるべき……いや待て。別に折本は「デート」とは言つていない。いやでも話の流れ的に2人つきりでのデートを示しているからやつぱり「デート」なのは間違いないはずだ。しかし現国のテストには絶対や言い過ぎ表現はほぼほぼバツだ。ならこの場合も合つていないことに――

—比企谷？ おい？」

「…………あ、ああすまん。ちょっと考え方をだな」「そつか…………。それで返事は？」

二
八

「だから、土曜のデート！ 嫌なら嫌でいいから！」

で、で、で、で、で、で、で、
デー、ト、す、つ、て、！？

し落ち着け。ここはビシツと決めるところだ！　あ、待つて顔熱いし心臓バクバクして
声が出せない！　こ、この！　出ろっての！

「あ……、い、いいじよ。行くか」

ぐうあああ……！ 嘘んだしどり過ぎだ俺のバカつ！
格好つかねえじやんか

「——っ！ そ、そつか！ ジヤ、ジヤあまた後で詳しい時間とか送るから！」

「それだけ！ じゃあまた！」

そそくさと家に帰つていく。俺もその勢いに釣られるように小町が待つ家に帰る。帰路では特に問題は無かつたが、家に着いて小町に色々聞かれた気がするが何も反応出来ずにそのまま部屋に入りベッドにダイブすると今まで溜め込んでいたものが思い切り飛び出してしまい小町からとても怒られました。

98 やはり俺が折本にデートの申し込みを受けるのは……その、照れる。

「どしたのお兄ちゃん。昨日からずつとぼけーつてしてるけど」

「……ん、ああ、いや何でもない」

朝ごはんを食べていると小町からそう指摘される。昨日の事が脳裏にこべりついて離れない。

なんか悪い事が起きたみたいな言い方をしているがまあいいだろう。いや、悪い事では無かつたよ？　ただ衝撃的だつただけで別に嫌悪するような事じやないからね？
むしろ役得ゲフングエフン。何でもないです。

いやー、マジでどうしよう。昨日の折本かわいい……、じゃなくて土曜のデート、でもなくお出かけだお出かけ。いつかはする事になるだろうとは思つてたけどまさか

あつちから誘つてくるとは。いや、アイツなら当然か。でもこういうのって普通男の俺から誘うものだよな？　いや俺は普通じやないからいいのか。自分で普通じやないって言うのはなんだかなあ。

「ふーん、それでお兄ちゃん。かおりさんと何かあつた」

「んぐっふ！」

口に含んでいたみそ汁を思つきし吹いた。一応卓上に撒き散らさなかつたからよかつたけどへタしたら向かいにいる小町に吹きかけるところだつた。

「うわっ、汚いなー。それで、どうしたの？」

「けほっ。いや、別に何も無いぞ。むしろ何も無さすぎて俺の人生は折本と付き合えたことでこれからイベントは無いも等しい」

「ふーん？　かおりさんと何かあつたんだ」

「こふつ」

飲み込もうとしていたみそ汁の具材が逆流した。今度は全部口の中で留まってくれたがそれでも少し苦しい。

小町ちゃん鋭すぎない？　見た目は子供の頭脳は大人で苗字がエドガーさんの名前を日本名に無理やり変えてペンネームにした人と同じのアイツなの？

「お兄ちゃん大丈夫？」

「大丈夫じゃないからこの話は無かつたことに」

「出来るわけないよね」

「ですよねー」

小町のヤツ、そんなに折本が気に入ったのか？ まあ長年ボツチだつた俺に近づいてきてくれただけで小町的にはポイントは高かつたんだろう。それに公園でのやり取りも見て大丈夫だと確信してくれたんだろう。まあもし折本に悪意があれば付き合うことは無かつたけどな。

「あー、実はだな、折本と出かける約束をしてな」

「二人で？」

「二人で」

「いつ？」

「次の土曜」

「何時に？」

「まだ決まってないが」

「服は？」

「俺にそのセンスは無い！」

「そこは小町に任せて。うん、とりあえず土曜までにコーディネートしないと。お兄

ちゃんはどこ行くかちゃんと考えてよ！ 初デートなんだから！」

「え、あ、はい。え、いや小町？ たぶんデートってわけじゃ」

「何言つてるのおバカちゃん。男女交際してる2人がお出かけするつていうのはデートなんだよ？」

「なん……だと……？」

なら今まで目を背けていたデートの3文字は正しかったと？ うお、意識すると顔が熱くなってきた。これが俗にいう照れるっていうやつ？

「はあ、しようがないんだから。じゃあお兄ちゃんも自覚したところで今はとりあえずここまでね。遅刻しちゃうしね」

「あ、ああ。すまんな」

「いいよ。ただ、帰つてきたら対策会議だからね？」

「おう。世話を掛ける」

「もー、それは言わない約束だよ」

ウインクしてにぱつと笑う。良い妹を持つたなあ。こんな可愛くて兄思いな妹なんてそういうないだろう。ましては俺みたいな兄だと尚更だ。

「ああ、ありがとうな」

だから、小町には聞こえない程度の声量でそう言つた。さすがに直接言うのは照れく

102 やはり俺が折本にデートの申し込みを受けるのは……その、照れる。

さ
い
し
な
。

初デートは買い物で始まる。 ①

土曜朝九時半の千葉駅。今日までに折本と話し合いでどこに集まるかを決めたり小町にファッショングエックをされたりで忙しない日々だった。初めての女の子とのお出かけなので気持ちが先走りしてしまい集合の三十分も早く着いてしまった。

時になぜ集合場所が千葉駅なのかといえば、この駅の最寄にあるららぽで買い物をするからだ。……小町とお袋で経験しているが女の買い物は長いから回避したかつたが仕方ない。せっかくの初デートなのだ大目に見てもいいだろう。なぜ上から目線になつてるんだ俺は……。

「——がや」

そういうえば漠然とららぽに行くことは決まつてはいるがどちら辺を回るか決めてなかつたな。意外とあそこは広いから一日かけて買い物か？ 休日は家でゴロゴロしてるとか小町の買い物にたまに付き合うくらいだから体力には自信ないぞ。

「——きがや」

つーかもし女性服売り場に連れていかれたらどうしよう。さすがに不審がられるだろうし店の外で待つてみたい……。

「——えいつ

「うひい!?」

突然脇にくすぐったい感覚が襲い掛かってきて変な声が出てしまつた。いきなり脇に手を差し込んできた折本は誰だ。折本って思いつきり言つてるじゃん。「くつ、なに比企谷。今の声ちよーウケるんだけど」

「普通に呼べないのかよお前」

「呼んでるのに反応しなかつたじやん」

「はて？ そんなことされたか？ 思いの外深くまで考え方をしていたらしい。いや、おそらくそれだけじやないだろうけど。

「そうだったか。すまん」

「まああたしとしては面白いもの見れたからいいけどね」

「ホントに不意打ちで脇を擦りにくるのやめてくれ」

「そんなことより早く行かない？ ほら時間は有限だし！」

「話をそらされた……。コイツにやられて初めて気付いたけど脇つて思つた以上にこしょばゆいから不意打ちされると変な声が出て死にたくなる。いや、教室でやられたら恥ずかしいからね？ 恥ずか死するからね？」

「まあたしかにそろそろ行かねえとな。初デートでグダグダするのは鉄板ネタだがせつ

かくなら楽しみたい……し？」

お、おや？ 折本がボニョのように真っ赤つ赤になつてしまつたぞ？ 如何致したのでしよう？

「……比企谷」

「な、なんでしよう？」

「……あまりそういう事ほいほい言わないで。心臓がもたない」

そういうとスタッタとららぽの方に向かつて歩いていつてしまつた。そういう事？ そういう事つてどういう事だ？ よくわからん。

「ほ、比企谷もなかなか攻めてるねえ」

「ねえ美咲。私達一体何をしに呼ばれたの？」

「第一回・かおりと比企谷のデートを付けよう二十四時」

「なるほど、いじるネタ探し」

『ちよつとお二人さん？ 言い方が酷くない？』

『バレたらタダじや済まなそくなんだけど』

「じゃあ二人は帰るかい？ 面白いもの見れそうなのに？」

例えさつきのかおりの照

れ顔とか

『よし行こう是非もない！』

「よし、一人が乗り気になつたところで早く追いかけよう。あっちの方向つて確からら
ぱだし見失っちゃう」

「途中参戦とかは？」

「無しの方向で」

「ところで折本。どこから回るつもりなんだ？」

折本も買いたいものがあつてららぽを選んだんだし、そこから絞つて行くのがベストだろう。少しでも楽したいからな。

「買うわけじゃないけどとりあえず服からかな。もちろん比企谷のも合わせるからね」

「は？ 僕も？」

「何その顔！ ウケる！」

「いやウケねえから。え、何？ 僕も服選ばなきやいけねえの？」

「そりやそうでしょ」

さも当然のように言う折本に顔をしかめる。めんどくさい。いや、服ってよくわからんけど種類が異様に多いじゃん？ その中から自分に合ったのを探しだすのがとてもめんどくさい。この気持ちわかる人いるかな？ あ、僕だけなのかそうなのかな？…。

「いやなの？」

「まあ面倒つていうのが一番の理由だな」

「ふーん、じやあぱぱつと済ませちゃおう」

「ああ、俺のはそれでいいが折本はゆつくりでもいいぞ」

「？ どういうこと？ 面倒だつて」

「面倒なのは自分の服探しであつて別に買い物そのものが面倒なわけじゃない。それに小町で慣れてるしな」

「なるほどねー。比企谷は小町ちゃんの服とか選んであげたりするの？」
さてどうだろうか。たまにどちらを買うかで悩んだ時に聞かれたりするが大抵僕が

選んだのじやない方を選ぶからな小町のやつ。たまに一から選ばがあるけど全部没にされたし。俺にはこう、そういうセンスが無いんだろう。だから今回も棒立ちになる自信がある。

「小町は自分の好みをちゃんと理解してるとこあるから俺は荷物持ちなんだよ」「ふーん……。よし、今日の予定決まり！」

今会話で何が決まったんだ？

「今日は比企谷の好みと何が合うのか徹底的に調べる！ついでに私の好みを知つてもらう！」

「はあ、なら先に俺のからでいいか？」

「ダメ、それだと比企谷のことだからお昼で話をすり替えて私の買い物にするつもりでしょ？」

「何お前エスパーかなんかなの？　まるつきりそのまんまの行動しようと思つたんだけど」

「そういうことだから。……ところで比企谷、眼鏡は？」

「眼鏡？　あーそういえば掛けてくるの忘れてた。学校では念を押されてるから持つていくけど、今日はそもそも存在を忘れてた。」

「はあ、これなら昨日比企谷から眼鏡預かつておけばよかつた」

「すまん、すっかり忘れてた」

「いいけど、次は気を付けてよ？ またやつたら揃りじや済まさないからね？」

「肝に銘じる」

脇を人質にされてしまつたからにはきちんと持つてくるようにしなくちゃな。
「よつし、まずは私のからだから……あつちからかな。行こつか」

「はいよ」

とはいえる女子の買い物は長いと相場が決まつてゐるからな。出来るだけ俺も折本の買
い物の時間を引き伸ばして俺に割く時間を無くしていく作戦にしよう。

「……バカな」

「どしたの比企谷、そんな絶望しきつた顔して」

現時刻は午後の一時。そこのところに腹も減ってきたところでららぽにあるフードコートで昼食をとることにした俺と折本。

絶望しきつてるかはさておき、想定の二分の一以下の時間で終わつたのは驚きだ本来なら五、六時間くらいは粘ろうと思つてたんだけどなあ……。

「ま、自分に合う服とお店は知つてるからね。そりや時間もそんなにかからないよ」

そ、そんなんチートやチーターやん！　ワイはこないなこと認めへん！　認めへん！
大事な事だからもう一度、認めへん！

ふう、少し落ち着いた。やはり気を沈めるにはキバ〇オウさんに限るな。

「じゃあお昼食べたら次は比企谷の服探しに行くからね」

「……へいへい。わかっ——」

「ん？ どしたの比企谷

「あ、いや何でもない」

「氣のせいいか窓の外に見覚えのある顔が二人いた気がしたが……、まあ氣のせいだろう。俺に顔見知りすらいなかつたしな。自虐で胸が痛くなつてきたが気にしない方向で。

「ふーん。とりあえず覚悟しどきなよ。へとへとになるまで連れ回すからね」「……御手柔らかに頼む」

初デートは買い物で始まる。 ↗②↖

ららぽで昼飯を食べ終わつた俺と折本は……俺の……服を…………見に行く事に…………。

「どしたの比企谷。 そんなに疲れた顔して」

「…………疲れるに決まつてるだろ…………ふう」

いや本当になんで折本はピンピンしてるの？ 午前中にも歩き回つたのお忘れですか？ 無尽蔵の体力だなホント。

「あつははは！ へばりすぎでしょ！ 少しは運動とかしたら？ 休みの日とか家にこもつて本ばつか読んでるでしょ」

「俺をただの引きこもりだと思うなよ。 軽い運動くらいなら毎日やつてる」

「へえ、意外」

意外と思われるのは仕方ないだろう。いつも本を読んでるか寝た振りをしているかしか学校では見せてないからな。

ぼつちの俺を守ってくれる奴は誰一人としていないから自分の身くらい守れるだけの力は必要になつてくる。いつぞやかのホモさんにも壁ドン（物理）とか大外刈りが出

来たのはそのお陰だ。ていうか運動してなきやあんなこと出来るわけ無いしな。

しかし運動しているといつてもそこまで体育の成績が良いわけでは無い。さすがに運動部のような運動量をしているわけでもないし、目立たないようにする技術の一環として多少手を抜いているからな。決してダルいからとか面倒くさいからじやないよ？いやホントホント。いつも言つてるでしょ？ ハチマンウソツカナイ。

「まあ運動がバリバリできる比企谷つて想像できなけどね！ ウケる！」

「はいはいウケるウケる！」

「……なんか千佳達と同じ反応でウケない」

「じゃあどんな反応すればいいんだよ。ていうかなんでそんなにむくれてんだ？」 か

わいいゲフンゲフン、少し萌えたじやねえか。萌えとか二次元の産物じやねーの？

「そういう折本はどうなんだよ。結構運動してるんじやないか？」

「え？ あー、趣味でサイクリングするけどその程度だし」

「じゃあなんでこんなに疲れの差が出るんだ？ 慣れの差か？」

「小町ちゃんの買い物にも着いていくんでしょ？ ちよつとくらい買い物にも慣れてるでしょ？」

「いや、いつも誰得なファッショニショナーとかもあつたからな。そのせいもある」

本当に疲れた。何回着せ替えさせられたことか。服なんて基本買ってきてもらつた

ものを適当に組み合わせて着るだけだからどうにもな……。

「慣れないことをするのは良くないっていうのが身に染みるな」「遠回しに引きこもり発言してるし！ ウケる！」

「いや何が遠回しなのかわからんし何がウケるのかわかんねえよ」「まあまあ。ていうかこれも慣れてもらわないと。これからも一緒に買い物とか付き合つてもらうんだから」

「……そうだな」

これからつて言うのがいつたいどれくらいまで続くかわからんが、中学生の男女の付き合うつて言うのはあまり長続きしないというのは聞いたことがある。ソースは学校の連中。俺がソース？ そんなものあるわけないだろ。男女の付き合いどころか男女の付き合いすらないんだぞ？ ……なんかちよつとゾワッとしたんだが、気の所為か？

「さて、と！ 休憩も買い物も済んだし、少し遊んでいかない？」

「帰る」

「荷物もロツカーニいれとけばオツケーでしょ」

「あれ、俺今帰るつて言ったよね？ 聞いてた？ いや聞こえてなかつたんだよね？ 頼む聞こえてないことにしてくれじやないともうなんかヤバい。語彙力も無くなるく

らいヤバい。ウケる」

人に無視されるのは慣れないことなので心にくるものがある。今日慣れないことしぐじやない？ 僕もう頑張ったよ。もう疲れたよパトラッシュ。しばらく何もしたくない。お家で寝ていたい。食う寝る遊ぶの遊ぶを抜いた2連コンボで休日を終わらせたい。頼む、もう俺に慣れないことをさせたりしないでくれ。お願ひします、何でもしますから！

「比企谷に私の口癖が感染つてる！ ウケる！」

「あーもうそれでいいや。わーいウケるー」

「心を擦られてく感覚がたまらないなあ」

「心を擦られてく感覚がたまらないなあ」

ホントに涙がちよちよ切れそう……。俺の心は硝子なんだから優しく扱つてほしい。

「ほら、せつかくの初デートなんだからもう少し付き合つて！」

「……はあ、わかつたよ」

「ほうほう、中々良い雰囲気じやないかな?」

「ちょっと妬みが……パルパル……」

「パルパル? あ、2人が外に出る」

『かおりがこれで解散なんてありえないし、まだどつかでぶらつくんじゃない?』

『いや、比企谷が疲れてるし家に帰るとか——無いか』

「うん、それは無い」

「なんやかんやで比企谷がかおりに振り回されるに一票」

『荷物をロツカーリに入れて、ゲーセン辺りでプリクラを無理矢理撮らされるに一票』

『なんやかんやで良い雰囲気になつていけるところまでいつてしまえに一票』

『全部ありそう。最後のはともかく』

「比企谷だしねえ」

『それよりかおり達追いかけないと見失うよ?』

『あ、ホントだ。見失わないようになつかつ見つからないように』

「追跡追跡つと」

「よし、遊ぶよ！」

「へいへい」

「ゲーセンなんて久しぶりだなあ」

「仲町さんと来たりするのか？」

「そうだねー。あとはたまに男子が混じつて来たりするね」

「ほーん」

やはり折本達のグループにも男も混じることもあるんだなと、まあなんとも言えないものが来たがまあ問題無い。何が問題なのかわからんが問題無い。

「聞いておいて反応薄すぎ！ ウケる！」

「んで、何するんだ？ 帰る？ 帰宅？」

「帰りたすぎじゃない!? 何？ 私といるのはそんなんに嫌？」

「いや別に？」

「……なんか比企谷つてよくわからないね」

「俺だからな。そもそも、他人がそいつを全てわかつたつもりなのは傲慢すぎるだろ」

「んー？ よくわからないな」

「要は人と人は全部をわかりあうことは無い、そしてわかつたつもりになつたら必ず何かしら悪いことが起きる。そんだけだ」

「じゃあまずはプリクラ撮りに行こう！」

「聞いておいて反応無さすぎ！ ウケる！」

「ハイハイウケるウケる！ ほら早く行くよ！」

「あ、こら手を引っ張るな！ 惣れるだろ！」

「既に惣れてるくせに！」

「言うな恥ずかしい！」

「あーー！ なんか変なこと口走った気がするなあ！ よかつた都合よく他に人がいるくて！」

「ほ、ほら！ いいから早く行くよ！」

「あまり強く引っ張るな転げるだろ」

慌てた様子で俺の手を引く折本に少し強めの注意を立て続けにしようとしたが、一瞬見えた髪に隠れた折本の耳がとても赤くなっていたため閉口する。

……照れるくらいなら最初から言うんじやねえよ。人のこと言えねえけど。

初デートは買い物で始まる。 ③

「はあー！ 楽しかった！」

ぐいーっと伸びをする折本に対してもーとしている俺。あの、本当に疲れたんで帰りたいんですよ。荷物もあるからなるべくすぐに家でのんびりしたい……。

「どうする？ もう帰る……つて、もう比企谷はボロボロだしもうお開きだね」

「まあそうしてくれると助かる。久しぶりにこんな出歩いてだいぶ体力が無くなつちまつた」

「だよね。もうゾンビみたいになつてウケる！」

「お前自分の彼氏がゾンビ歩きしてるので見てウケれるのか……ここまでくると一種の才能か何かだよなお前のそれって」

「遠回しに褒めて——」

「無い」

何をどう受け取れば今のを褒め言葉に聞こえるんだ。ポジティティブシンキング過ぎない？ 僕がネガティブ過ぎただけ？ あ、そうなの？ そうなんですか……。
「よし、じゃあ行くか」

「そうだねー。比企谷も早く家に帰りたいみたいだし、ここで解散しとく？」

「え、いや、今のはお前ん家まで送るつて意味で……」
と、ここではつと氣づく。もしかして俺つてばでしゃばつたのではないか？ と。家
まで送るなんて鳥滌がましい行為だつたか？ と。

「あ、いや、別に必要じや無かつたらいいんだ」

それに気づいた俺は咄嗟に自分の出した提案を無かつた事にする為にあれこれ言葉
を繋ぐ。ぐああああ！ 調子に乗るな俺！ まだ日が暮れてたらわかるがまだまだ日
は仕事中だろうが。大丈夫、お天道様がしつかり監視してくれる！

「…………ぶつ」

「…………ん？」

「比企谷慌てすぎだつて……！ ヤバい……ウケすぎてお腹よじれる……！」

本当におかしいのか腹を抱えてプルプルと震える折本とその姿を見て早々に家に帰
り自室のベッドの中に踞りたい。^{うずくま}

あー！ もうやだあ！ これが黒歴史つてやつなんだな！ O.K、理解した！ 理解

したからもういいだろ？ この状況から逃れる術を俺にさすってくれ！
「くつふふふ、ごめんごめん。ぶふつ、じゃあお願ひするねー」

「…………へあ？」

「ぶはっ！　あつははははは！　ひ、ひきがつ、こえつ、ひ～！」
ナズエワラットウルンデイス！　もういいもん八幡お家に帰る！

結論から言つて折本を送ることになりました。

決して笑いすぎて涙がちょちよぎれしていくて且つ笑顔だつたのがかわいいかつたらとかそんなチヨロすぎつて言われるような理由ではない。元々送る予定だつたからなんの問題もない。無問題というやつだ。ちなみに無問題の読み方は「もうまんたい」だ。ここ、テストに出るぞ。いや、ホントに出たもん。俺が普通じやなかつたら解けなかつたぜ。普通じやないつて自分で言つちやうんですね……。

それにもしても静かだ。あの折本が隣にいるにも関わらず、とても静かな帰り道だ。歸路についてから二人して口を閉ざしている。気まずいとかそういうのは感じはしないが、不思議な感覚が俺を襲う。

なぜそれを感じるかはわからない。ただ、いいものじゃないのはなんとなくわかる。どうにかこの空気を発散させたいんだが、どうにも俺にはそういうスキルが身についていない、いや、身につける必要性が無かつたから持ち合わせていない。

それになんでこんな空気になつてるのかわかんないし。わからないものはどうにも出来ん。

ちなみに言つておくが、この状況は決して折本は悪くない。
かと言つて俺が悪い訳でも無い。

悪いのは空気だけで十分だ。いや、本当は空気も悪くないが空気さんには大きな器を持つていると信じて八つ当たり氣味にやらせてもらおう。後で空気さんの代わりに小町に土下座する勢いで謝るから許せ。空気より小町の方が重要度が高い。誰にも否定させない。

「あ、着いたね」

どうやら俺はだいぶ考え込んでいたらしい。気が付けばいつの間にか折本の家にたどり着いていたようだ。ふむ、前来た時と変わらずの姿をしていて何よりだ。

「なんか変な事考えてない？ 頬がキモくなつててウケるんだけど」

おつと、折本の家が意外と普通で驚いたとか、ネタにあふれた家だと思つてて肩透かしくらつたとかそんな事を考えてたらバレたようだ。

「いや別に。てかキモいって」

「ポーカーフエイス、ちゃんと鍛えないと。今日の比企谷見ててわかつたけど結構わかりやすいよ？」

「そうだな。余計な傷を増やさないためにも今後治す方向に努力をする事を前向きに検討しておこう」

「何それ！ ウケる！」

「んじゃ、帰るわ」

「スルーとか酷つ！ まあ少し待つてつて」

「んだよ——」

キュッと折本の左手で軽く俺の右手を握られる。ほんのりと折本の温もりが手から伝わつて来る。柔らかい。そして俺よりも小さい手だつた。更に折本はもう片方の手で俺の右手を包み込む様に握る。

……は？ いや待て何故今折本は俺の手を握る？ why? いやそれよりも近い

近い！ なんだなんだ何が起きている。

折本が暴走した、いやいつも暴走気味だつたわ。だがしかし今の折本はいつもとは違う感じがする。暴走してるのは確かだが、こんなに静かな暴走は初めてじやないか？

ちゃんと話をするようになつてから一週間経つか経たないかぐらいだから何知つたような口ぶりしてんだよ、と自分に言い聞かせるが、あのいつもそれある！ だのウケる！ だと騒いでいる折本しか見たことのない俺にとつては本当に驚天動地とまではいかないが驚きを隠せない。まあそれ以前に折本の急接近で顔が真つ赤になつてているんだろうが。

「……ん、やつぱりポーカーフエイスはいらぬかもね」

「は？」

「ひひつ！ じやあまたね比企谷！ また学校で！」

「お、おう？ またな」

いきなり折本のテンションが元に戻った事に驚いて声が裏返ったがなんとか最後だけでもなんとか持ち直して挨拶を済ませる。

今日は色んな折本が見れた気がして、なんと言うか、悪くない1一日を過ごせた。そんな気がした。

「ほほお、やるねえかおりも」

「それにしても今日のかおりいつもよりイキイキしてたねえ。比企谷とのデートそんなに楽しかったのかの?」

『ま、いい暇潰しにもなつたし打ち上げで何か食べに行かない?』

『あ、それいーねー!』

『ホントウケるよねー。私も混ぜてほしいなー』

『「「あつ」」』

「.....」

『「「.....キ、キグウダネー」」』

「今更とぼけられると思つてる? ウケるなー」

「は、ははっ。かおりつてばいつもの発音じやないよ? なんでそんなに平坦なの?」

「ま、まあ落ち着くんだ。お話だけでも聞くべきだと私は思うんだよ」

『あ、あーそういうえば私用事があるんだつたー』

『あ、アタシもー』

「まあまあ。そんな固い事言わないで、皆で一緒にご飯でも食べに行こうよ、ね？」

『「「は……はい……」」』

最初の月曜日

折本とのデートが終わつた次の登校する日、つまりは月曜になつていたためしぶしぶ俺は歩いて向かつていた。

土曜は大変だつた。

何が大変だつたかというと、小町がその日にどんな事をしてきたのか根掘り葉掘り聞いてきたからそれに全て答えてたらあつという間に日が暮れるどころか夜の八時近くにまでなつてしまい、そこから夜ご飯を作る事になつた。

まさか小町があんなに食いついてくるとは思わなかつたわ……。小町も最近の女の子、恋バナが好きな——いや待て違う別に俺は恋バナをしたわけじやない。違うつたら違う。

「おっす比企谷」

そもそも恋バナというのは互いに好きな人を暴露してどこが好きなのかを語り合うものであり、俺がしたのは折本との買い物の時の様子を話す事だ。別に暴露したわけでも語り合つたわけじやない。だから恋バナじやない。

ちなみに小町と恋バナすることになつたら俺は迷わず親父と共にそいつの所にOH

ANASHIに行くだけだ。……いや、小町が好きになつたやつならそれはとても良いやつなのだろう。その時は親父も俺も認めざるを得ない。

「あれ？ 比企谷一？」

しかし親父は俺に目もくれずに小町にべつたべただ。親バカをこじらせ過ぎてると言つても過言ではないほどに小町のことを愛している。母ちゃんもだけど、小町をこれでもかと可愛がつている。

ちなみに俺は自他共にが認める『시스コン』というやつだ。

千葉に妹を大切にしない兄はいらないと言わしめるほど妹を大切にする県だと言われている。他のやつが言つてるところを聞いたことはないが間違いないだろう。かの高坂家の兄妹もいざこざがあつたものの、最終的にスーパー・ハッピーエンド出しな。もう泣きそうになつたわ。おそらく俺のsisコンはあの兄妹によつて更に拗らせられたと言つても過言じやない。いやまあ、その前から拗らせてた気がするけど気にしない方向で。

「おーい？」

とはいえ俺を含め家族全員が小町に愛情を捧げていることは間違いない。逆に聞くぞ？ あんなにプリティーでキュートな存在を愛でない愚かな兄や親がいると思うか？ 答えは敢えて言わない。反語だ。知らんやつは調べろ。

それにしても目の前でひらひらと手のひらが揺れている気がするな。なんだこれ？幻覚か？ それを掴むと「ひやつ」という声が横から聞こえて――

「……あ」

「……」

「す、スマン」

「……それよりさつきから呼んでもるのに無視する方を謝つて欲しいんだけど」

「へ？ あ、お、おお？ スマン。考え方してて気がつかなかつたわ」

話しかけられても反応しないほど小町のことを考えていたのか……。俺つてシステムを拗らせすぎてるんじゃないのか？ さすがに控えるようにするか。これ以上になると私生活にも影響しそうだ。ついでに小町にも手を出しそうになるのもダメだしな。いやついでは私生活の方だな。小町は超最優先事項だ。これを間違えてしまつては比企谷家長男として失格と言つても過言ではない。

「へー、まあ比企谷の考え方つてくだらなそだからどうでもいいけど」

「ばつかお前、くだらなくなんかない。小町の事とか……。あとはそう、世界平和の事とかな」

「シスコン過ぎてちょっと引くわー」

棒読みのように言いながらもその言葉にはかなり冷やかなものが含まれている。

うつ、少しゾクゾクした。別にマゾ的な意味合いじゃないぞ。ホントだぞ？ ハチマン
ウソツカナイ。

「ま、比企谷のシスコンはさて置いて。おはよ、比企谷」

「ん？ おう」

「返事短つ！ ウケる！」

「そうか？ だいたい挨拶なんてこんなもんだろ」

「比企谷は授業の前と後の挨拶もまともにしてなさそうだねー」

「いや、さすがにそれはしてる。数学以外は」

「なんで？」

「まともに授業を受けもしないのに挨拶なんてしてたら失礼だろ」

「そもそも授業に参加してない方が失礼だと思うけど」

違う。やつたところで理解できないのだから寧ろ真面目に受けているにも関わらず
テストの点数が低いのであればそれは失礼に値するものだと考えている。周囲から教
師の教えが悪いのではないかと勘ぐられてもすれば教師としての点数が下げてしまう
事になる。

そうなつてしまつたら俺の責任になつてしまつたため俺は最初から授業に参加しなけ
れば数学教師への周りからのマイナスイメージが無くなり、俺は貴重な睡眠時間を得ら

れる。

あ、なるほどこれをwin—winの関係って言うのか。また一つ知識が身に付いた。

「ちよつと比企谷？どこまで行くつもりなの？」

どうでもいい知識を身につけていたらいつの間にか学校に着いていたようだ。

「ん？あ、もう着いてたのな。うつかりこのまま遅刻確定まで歩き続けて学校行くの諦めて帰宅してたわ」

「なにそれ意味わかんなすぎて逆にウケるんだけど」

「今のはウケを狙いに行つたからな」

俺の八万の奥義の一つ、『遠回し過ぎてよくわからないけど面白いネタ』だ。ちなみにこれは俺もよくわからずに言っている事がほとんどなので多用したら滑る。あ、そういうえばこれを使う相手いなかつたから今日初めて使つたんだつけ？まあ気に入ったら負けの方向で。

折本と話しをしながら歩くことほんの数分、上履きに履き替え自分のクラスにたどり

着く。戸に手を掛け開こうとすると何やら嫌な感じがして開けるのを躊躇われたが、いつまでも廊下に、しかも教室の戸の前に立つて居るわけにはいかず、ええい、ままよ！ の勢いで開け放つ。とはいえばーんという音ではなくとんと優しい音を鳴らしたが。

そしてどうだろ？ 僕の予感は正しかつたらしく、戸を開けて一呼吸置いた後に周りから、主に男から嫉妬の籠つた視線が俺に……いや、俺だけでなく折本にも刺さつていた。

おかしい。俺にそれが来るのはまあわかる。だが折本にも行くのはなんでだ？ おいそこの、そうお前だ。名前は知らんがいつぞやか体育館裏で俺に告白しようとしてきたやつ。ハンカチを噛み締めるな。そんでもつて嫉妬の籠つた視線を折本に向けるな。俺の背筋が凍るだろうが。あとその取り巻き十 α で三木。そいつを励ますな。「いつかお前の好意を受け入れてくる日が来るさ！」とか意味のわからん事を吐かすな。ねえよ。永遠に永劫に永久にねえよ。

「何この雰囲気ウケるんだけど……！」

ついでに俺の後方で腹を抱えてる折本とかいうやつ。いつまでも俺を盾に笑つているのを隠していんじやありません。お前の分のダメージが俺に貫通するんだよ。

『あの二人つてそんなに仲良かつたの？』

『男子から聞いた話だとかおりもあの人のこと私のだつて叫んでたから相思相愛なのは間違いないと思う……』

『うつそマジ？　じやああの……、ヒキタニ？　ヒキガヤ？　君が告白したらしいから間違いないじゃん』

折本が耳まで真っ赤にして顔を隠し始めた。さっきまで腹を抱えてたのに忙しいやつだな。

『くつ、比企谷め……！　うちのアイドルとあんなにくつつくなんて……！』

『羨ましい！　妬ましいぞ！』

『比企谷は俺と結ばれるはずだったのに……！』

俺は右手で顔を覆つた。見たくない現実が目の前にあつたのでせめてもの逃避行為だ。

この後俺と折本はそそくさと自分の席に座りチャイムが鳴るまで机に突つ伏し、一限が数学なのでついでに俺は夢の中へ逃避した。

感想会

休日が終わった翌日の授業を全て乗り越えて放課後。俺はいつものように体育館裏に招待されている。こんな恒例行事とか嫌だ。ていうかなんでこんな短期間に三回も呼び出されるんだよコイツらは体育館裏に愛着かなんか持つてるのか？うーん、もしかして俺の人生ってどこかで間違えた？　あ、余裕で間違えまくってましたねサーเซン。

「比企谷、どうだったのかおりとのデートは？」

「ぐつ、で、デートじゃないし買い物に行つただけだし」

「ふんふん、それで？　かおりとのデートはどうだったの？」

ダメだこれ。俺の否定を肯定してくれるやついない感じだわ。いや、確かに世間一般で言つたらデートなるものにカテゴライズされるが少し待つてもらおう。ただ九割方恥ずかしいから否定しているんだが、残りの一割だけでも口にする気は無いが聞いてくれ。

デートの時、居たろお前。俺と折本の後を付けていましたよね三木さんや？　それともう三人と一緒にいたよね？　知つてゐるからね？　気付いた上で無視してただけだから

らね？まあそういう理由で、なんというかデートでは無い気がするんだよね。二人とも

αだつたんだよね。

だからデートというより『比企谷改造計画』なる不思議な計画の際に一緒に買い物した時と同じような感覚があつたからなんだかなあ……？

『だんまりか！だんまりなのか比企谷!!』

『答えてくれひー君！感想的なものはないのか！』

『くう、羨ましいぞかおり！』

男性陣からの声が俺に突き刺さる。いやまあ感想なら楽しかったと思つたぞ？絶対口にしないけど。

てか誰だよひー君つて呼んでるやつ。そんな仲のいい関係かなんかだつた？ そん

なわけないよね？……無いよね？ そうだつたらゴメンね？

『ねえどうだつたの!? 最近そういう話が足りないの！』

『私達と恋バナしよう？ 大丈夫、悪いようにしないから！』

『そうそう！ おねーさん達が可愛がつてあげるから！』

「ちよい最後の出てこいそんな事させないかんね？」

「その前にこの騒ぎを止めてくれません折本さん？ いつまでこの状況に晒されないと
いけないんですか？」

恋バナは折本としててください。そして何故その他女子の中に折本が含まれている？この場を収めてくれる人が居ないから下校時刻になるまでこのままになるんじやないのか？冗談じやない。家で小町が俺を待つているかもしれないんだ俺は帰らせてもらう！あ、なんか俺に死亡フラグが建つてそう。

ていうかこの状況俺の存在必要なのか？よくよく考えてみると折本一人いれば十分対応出来るんじやないのか？それなら俺は帰つていいよね？じやあお疲れ様でしたさようならまた明日く。

「させるかつ！」

「つ!?」

な、仲町さん……だと!? 何故仲町さんが俺の行く手を阻むんだ!?

「よくもかおりにストーキング行為してた事チクつてくれたね……！ 比企谷君が帰つた後大変だつたんだからね！」

「八つ当たりじやねーか!？」

いや、確かに途中チラチラ三木たちの見てたのが折本にバレたからゲロつたけど俺悪くないよね!? 完全にストーキング行為してたそつちの逆恨みじやないですかヤダー！

『比企谷を囮め！ 逃がすな！』

『任せて！　徹底抗戦するわ！』

『でも優しくね！　怖がつちやうから！』

くつ、仲町さんのせいでバレちやつたじやん……！　やめてよねホント……。ていうか最後の人、そんなに優しくするくらいなら最初からやらないで欲しいんだが。もう既に怖いんだけど。脚とかもうガツタガタに震えまくってるから。今更そんな優しくしても手遅れだから！

「さあ比企谷。観念して全てを吐露しちやおうぜ？　おじさん、誰にも言つたりしないよ？」

「今そのノリは止めてくれ三木爺さん。この状況でそれやられるとかなり腹立つ」

「あ、はい」

「おや？　どうして三木とその他大勢は二歩程後退しているのかな？　そんなに俺の表情不細工に引きつってる？　あ、自分で言つてて悲しくなつてきた……。」

「はあ……。わかつた。話せばいいんだろう」

『よし、じゃあ全体の感想を一つ頂戴』

「ああ、それは——」

この後俺は十数分かけて折本との買い物をした時の感想を話し続けた。

最後にクラスメイトが総じて「よくもやらかしてくれたな四人とも」という感想で締めくくられた。

時は過ぎ去り、比企谷八幡は切に願う。

クラスの奴らに囲まれた日から時が経ち、朝のS H Rで担任から回された紙切れをぼんやりと自分の席で眺める。

この紙切れ一枚の為に頭を悩ませなくてはならない生徒は数多くいるだろう。俺もそのうちの一人だ。何故にこんなものを作らなきやならんのだ。学校側からやらせるようにならないと進学先を決めないのかうちの生徒は。まあ俺もやらされない限りたいした準備とかしないけどな。

とりあえず行こうとしてるところは決まつてはいるから別にどうでもいいが。併願？ 理数科目が息をしてないからそこまでいい所には行けないから関係ないな。一応とつてはおくけど。

『「「「うーん……」」』

いつもの女子メンバーは俺の周りで頭を抱えたまま唸りをあげている。やはり二年の冬間近でもあまり進学先を決められていないようだ。そこまで悩むようなことあるのか？ いや確かに俺も悩みはあるがここまでではないぞ？ いやいや、本当だよ？ ハチマン、ウソツカナイ。

「んで、なんでお前ら俺を囮うようにしてるわけ？ 新手のイジメでも始めるつもりか？」

「そんなことするわけない無いでしょ。なんで未だに自虐ネタが健在してるんだし。さすが比企谷ウケる」

「じゃあ早く自分の席に戻れ。授業始まるぞ」

「うーわ、自分の彼女をそんな無下に扱うなんて酷ーい」

「本当にそう思つてるならもう少し感情を入れてくんない？ 棒読みが過ぎると愛犬A I B Oより酷いからな？」

アイツの方が感情読み取りやすいんじゃないかつてくらい感情が無かつた。もう少し良い反応とか出来ませんかね俺の彼女様は。

「比企谷君、高校はどこ行くつもりなの？」

「総武」

「……Pardon？」

「何故に英語……。総武だつて」

「なんでそんな頭のいい所に？」

「なんであつて……。いや、とりあえず家から通えてこの学校から誰も行けなさそなとこに行こうかなつてだけだが」

仲町さんの疑問もわからなくもない。今の俺なら同中が沢山いそうな所に行つても問題は無いかもしねないが俺に対するヘイトが消え去つたわけじゃない。あとアイツ。あの男子なんて言つたか忘れたが俺に好意向けてくるアイツ。そいつから離れる為でもある。むしろそれが大部分と言つても過言ではない。

それに総武だぞ？ 進学校だから雪の影響で学校が無くなることもあるんだから見返りは大きい。うつかり自称進学校に行つてしまえば雪の中でも始業時間ずらしてまで登校させにくる。頭おかしいんとちやいます？ まあ関東に雪が降ることなんて滅多にあるものでは無いけど。

「じゃああたしも総武にしーよつと」「は？」

「私も」「ひ？」

「私はたぶん無理だから海浜総合かな」「ふ？」

『私も無理』

「へ？」

『私も』

「「ほ?」」

「誰だ被らせてきたの」

「あたし以外に誰がいると思う?」

「それもそだつたわウケる」

「……ひひつ」

最近折本は俺がウケるという度に不思議な声を漏らしながら手で顔を隠して身体を背けるようになった。ホントに何があつたんだこいつの中です。

「どりあえず仲町さんとかは一緒に来て欲しい気もするけどな。折本の面倒を見る係として」

「ちよつと比企谷、それは彼氏たるあなたの仕事じやないの?」

「あー、ゴメン比企谷君。将来的に他の事で手が離せない状況になると思うから遠慮しておくね」

「最近周りの人たちが保護者目線になつてきててウケる!」

まあ実際俺たちの周りで何かしらの問題やらなんやらが出てきたら九十九割方折本が発生源だからしつかり見てないと厄介事が増えそうでたまらない。いや、そこまで大きいものじやないからいいんだけどね?

「そういうやつって成績どれくらいなんだ? 一度も聞いたことないけど」

「…………」

「おい？」

「……海浜総合に行けるかなーくらいです」

「絶望的じやねえか」

海浜総合と総武だとかなり偏差値に差があるから運が良ければ入れるレベルじやないぞ？ え、もう無理じやね？ まあ別の学校に通うことになつたらそれはもうしうがないと思うけども。諦めは肝心だぞ。

「うわーん助けてミサえもーん！」

「全くしようがないなあかおり君は。 てれれつてれー、万能弟！」

なんだこの茶番。 つーか万能弟？ 三木つて弟なんていたのか？ いやそもそも弟に勉強教わるつてどういう事ですかねえ。 僕たちより頭脳明晰なんですかわかりたくないです。

「放課後にでも頼みに行こう。 善は急げとかいう四字熟語を知らんか

「ことわざだろ。 4文字だからつて理由で四字熟語にカテゴライズするな」

まあこんな間違いをテストでやるようなやつはいるとは思わないけどな。 三木さんもお巫山戯が過ぎますことよ？ 一瞬騙されそうになつた方が若干名いますがねえ。

「かくかくしかじか」

「ふむふむ、まあだいたい理解したよ」

「今ので何がわかつたのか教えて欲しいんだが」

前。どうやら双子の弟だつたらしい。よかつたー、歳下に勉強教わらなくて。もう中学

レベルで歳下に教わってたら歳上の面目丸潰れじや済まないわ。いや、塾とか通つててもう俺達の所までやつてるつて言うなら話は別だけどね？」

「勉強くらい自分でやつた方が優しい&塾とかに行かなくて済むからね」
〔きさみ〕
「刻に教わった方が効率的なのになんて俺に頼むの？」

「その分報酬としてコンビニデザート一品要求したい」

「前払いで買つてきてあげるから」

「交渉成立」

双子つてスゴい。「かくかくしかじか」しか言つてないのに相手にちゃんと内容が伝わるんだもん。俺も小町とそれ位仲が良くなることつてあるかな。無いよね。わかつてたよ畜生め。

「比企谷八幡、だつたつけ？　俺は弟の刻だ。よろしく」

「あー、まあよろしく頼む」

「とりあえず勉強出来るとこに行こうか。図書室でいいか？」

「ああ、まあ基本折本に教えて貰えると助かる」

「いつもごめんねー刻」

「今度のは受験勉強、それも総武高校なら更にビシバシやらないとな」

「……お手柔らかにお願い」

なんで既に行こうとしてる高校までわかってるのん？怖つ、三木姉弟怖つ。

これ以降、俺たちは刻（姉と混ざるから下の名前で呼べと脅された）を講師として付いてもらい勉学に励んだ。もちろん学校行事が来たらそれを全力で楽しむ事を忘れず、ひたすら志望校を目指して勉強を続けた。

ちなみに俺も何故か特に理数系の科目を死ぬほどやらされた。特に数学と物理。計算問題を無理矢理詰め込まれて夢でも計算している夢を見ちゃう所にまで達していた。小町にも心配されたよ。目が虚ろになりながらも問題を解いてる兄を見て心配をしない肉親はいないとは思うけど。

そして時が経ち、総武高校の合格発表日になつた。

「一年と二ヶ月……、長かつた。本当に長かつた……！」

「落ち着け折本。ずっと勉強で辛かつたのはわかるがせめて合否を見てからそうなれ」「いいじやん、どうせ受かつてるんだし」

事実、俺と折本、それから三木姉弟は受験後自己採点をしてみたらかなりの点数が採れていた。おそらくこれなら受かつているんじやないかという進路相談を担当する先生からの御墨付きなので多少は気分が楽なのである。だからと言つて絶対受かつているわけでは無いから心臓の鼓動がうるさいけどな。

そう、ただ受かつているかどうかで緊張しているだけなのだ。決して折本が俺の左腕

にしがみついているから緊張しているのでは無い。あー、顔があつついなあ！

「ヒューーヒュー、お暑いねえ二人とも」

「全く、俺のスマホの容量がお前達の写真で一杯になつてしまふ」

からかう三木と俺達の写真を撮りまくる刻。何時もの光景になつたこのやり取りも合否次第で無くなつてしまふかもしない。そう思うと何故だろうか、俺だけ落ちてるんじやないかという気持ちが湧き出てくる。大丈夫だ、落ち着けと頭の中で言い聞かせていると左腕の締め付けがキツくなつた。おそらく俺の不安が伝わつてしまつたのだろう。

これ以上心配かけまいと笑つてやると何故かツボに入ったのか口に手を当てて笑い始めた。解せぬ。

そんな事をしていると目の前に見知った、というか見知りすぎている人を見つけた。

「あ、比企谷君とかおり。それと美咲と刻じやん」

「あれ千佳？ なんで総武に？」

「私もダメ元で受けてみた」

「へっ？ ダメ元？」

ダメ元なわけが無い。何故なら仲町さんは得意科目が五科目の中に無く、平均的な点数を勉強会を始める前から探つていたから、この長い月日をかけて勉強を続けた仲町さ

んの学力が上がっていないわけが無い。証明終了。

「そーそー、千佳でダメ元だつたらあたしは絶望的になるかんね?」

「さり気なく俺の思考を汲み取った上で会話を続けるな。お前一体何者だよ、いやマジで」

「比企谷八幡の彼女者だけど?」

「…………」

「…………」

「照れるなら言わなきやいいのに」

「行こうか仲町。こ奴等はいつまで経ってもウブすぎる」

「ホント、いい加減慣れたらいいのに」

俺もいい加減慣れたいと常々思つてますとも、ええ。

「それよりそろそろじやねえか? 合否発表の」

「うつ、緊張が……」

「かおりがキャラ崩壊してる」

「それどういう意味!?」

「あ、來たみたい」

「無視された! ウケたい!」

緊張し過ぎだろ。大丈夫か？ いつもならウケるとか言つてゐるのになんで願望になつちやつてるの？ 故障しちやつたのん？

『えー、ただいまより合格発表をしたいと思います。受験者は自分の受験番号をこちらに用意してある紙から探してください。それでは貼ります』

筒状に丸められていた紙をホワイトボードに広げて磁石で固定させていく。さて、自分が番号を探すかねつと。

「…………あつ」

あつた。

「…………やつた」

左隣からボツリとそんな声が聞こえた。折本の方を向くと折本もまた俺の方を向いていた。

アイコンタクトで確認し合う。どうやらお互い合格出来ていたらしい。

「…………よつしやあああ！」

少しづつ現状を飲み込めるようになつてじわじわと腹の底から歓喜やら何かがこみ上げてきた。達成感が半端じやない。頑張つてよかつたあ！

「八幡達も受かつたみたいだねえ」

「姉貴と仲町も受かつてよかつたじやん」

「よ、よかつたよおおお……」

ふう、少しずつ落ち着いてきた。そろそろ提出物を貰いに行かないと……。
「ん？」

「あり？」

何故に俺は俺は折本を抱き締めていて、折本は俺に抱きついているんだ？　え？　この状況何？

「…………す、スマン折本！」

「…………ご、ゴメン比企谷！」

俺のバカ！　何普通に折本のこと抱きしめちゃってるの！　バーカバーカ！　アホ

！　八幡！

「あの初ツプルは置いておいて先に行っちゃおう」

「待て姉貴、せめてあと十枚くらい写真を撮らせろ！」

「二人とも先に行つてるからねー」

かくして俺達の中学生生活は終わりを迎へ、春休みが明ければ晴れて総武の生徒となるのだった。

出来ることなら、高校生の間に折本との進展がありますように。

改編された世界は徐々に元の世界との違いを現していく。

中学の卒業式と春休みが終わり、ついにやつてきた高校入学の日。いつものメンバーと集まつて一緒に登校する事になつていて。全員自転車で登校出来る範囲なので高校に行く途中にある俺たちが通つていた中学の近くに集合することになった。

そんな事はさておき春休みつてだいぶ短くない？　あと一ヶ月くらい欲しいんだけど。そう思わない？　ちょっと夜更かしした上に早起きしたから少し眠くなつたんですけど。

「おーっす比企谷ー！」　あれ、比企谷が一番乗り？』

「おう、みたいだ、な……」

「ん？　どしたの比企谷？」

「……あ、いやなんでもないぞ。うん」

「あー、なるほどねえ！」

「……んだよ」

「いや、ウケるなーってね」

やめろその全て理解したつて言いたげな顔は。口にしなくとも伝わるほど今の折本の顔はとてもかわい——コホン、ムカつくと思つても仕方ないだろう。しかしまあ似合うな。折本の制服姿。総武は制服の着こなしについてはかなり自由性が高いようでその人にあつたアクセサリーも付けられるのでいかにも折本らしさが全面に出ている。恥ずかしくて口には出せないが、

「かわいいな」

「ん？ なんか言つた比企谷？」

「……なんでもねえよ。それより遅いなアイツら」

危ねえ。一番口に出したらダメな所が出てしまつた。スマホを弄つてた折本には聞こえてなかつたのが唯一の救いだな。

「あー、それなんだけどさ、なんか美咲たち少し遅れるから先に行つててつて L○N E が来てたんだけど」

「え、何それ俺に来てない……」

ハブられたかと考えたが、さすがにアイツらがすることは考えられない。という事は……氣を使つてくれた？ とかか。まあ折本と二人だけの時間つて実はあまり無いからむず痒いものがある。二人の時間よりいつものメンバーと一緒にいる時間の方が多いからな。

……あれ？ 普通のカツプルってこんな感じだっけ？ 別にいいけど。

高校の入学式当日、あたしこと折本かおりは比企谷たちと一緒に登校するために趣味のサイクリングをする時に使う相棒とはまた違う別の自転車を乗つて走らせている。浮気じやないよ？ ただ荷物を置く籠が欲しかつただけなの。だから拗ねないで！

なんて一人芝居をしていると集合場所の中学校の近くまでたどり着いた。そして目に入ってきた、あたしの彼氏である比企谷八幡。とても眠たそうに舟を漕いでいる。最近は目の腐りも無くなり始めて眼鏡を着けなくともだいぶ他の人から奇異な目で見られなくなつた、というか好意的な目で見られるようになつてきた。なので比企谷には眼鏡を外さないよう強めに言つておいてある。そして絶対好意的な目で見られていることを言わない。つてこれじや縛りの強い彼女みたい！ ウケる！

「おーっす比企谷ー！ あれ、比企谷が一番乗り？」

「おう、みたいだ、な……」

「ん？ どしたの比企谷？」

「……あ、いやなんでもないぞ。うん」

「あー、なるほどねえ！」

「……んだよ」

「いや、ウケるなーってね」

んー、比企谷がちゃんとあたしに見とってくれるのはいいものだわ。嬉しい気もするけどなんか恥しい感じがしちゃうけど。

このまま比企谷を弄っちゃおうかなつて思つた所であたしのスマホに通知が来た。

……美咲からか。いい所になりそうだつたのにウケないわー。えつとなになに？『今日は私たちはわざと遅れるから比企谷と二人でゆつくり登校すればいいさちくしよう！』か。

ん？ 比企谷と二人つきり？ そういえば最近二人でいることつてなかつた気がする。まあ今更2人だけの空間つてだけで緊張なんてしたりはしないけどね！ そもそも緊張したことなかつた気がするし！ ウケ——

「かわいいいな」

……………

「ん？ なんか言つた比企谷？」

「……なんでもねえよ。それより遅いなアイツら」

今確かに比企谷の声が聞こえたような？ まあ？ 比企谷が直球でかわいいなんて言うはずもないし違うか！ とりあえず美咲たちは後から来る事を比企谷に伝え……あれ？ おかしいな比企谷の方を向けないぞ？ なんで？ なんだこのこみ上げてるの……？あと少し顔が熱くなってきた気がするし。

「あー、それなんだけどさ、なんか美咲たち少し遅れるから先に行つててつて L○N E が来てたんだけど」

「え、何それ俺に来てない……」

158 改編された世界は徐々に元の世界との違いを現してくる。

視線をスマホにしか向ける事が出来ない。んー?
しょ!
ま、いつか。どうせすぐ治るで

「あれ?
事故か?
」
どうしたんだろう?」

前方に黒塗りのいかにも高価そうな車とパトカーが止まっている。そこに野次馬もいるため道が塞がつていて、何が起きたのかよくわからんがあまり足止めされると余裕もつて登校しているのに遅れてしまう。仕方ないので車道を走る事にした。

事故現場を通り過ぎる一瞬、俺は何故かそちらを見てしまった。へたりと座り込み、何かを見下ろしている人を。

「入学式サボりたかった」

「やめてよ唐突にそういう事言うの。同感なんだから」

学校に着いてから折本と二人でぶらりと探索して残りのメンバーを待つていたらいつの間にか入学式の時間になっていた。ちなみにこの間で合流は出来なかつた。一応連絡も入れたのだがなぜか返事が誰からも来なかつた。まあ無事に式の会場だつた体育馆で無事鉢合わせ出来たのでよかつたのだが。

「眠い……」

「俺も……」

「ほれツインズ起きなつて」

「なんで立つたまま寝てるのこの二人は……」

三木と刻は入学式中ずっと眠つていたらしく、今も若干寝ている。何その技術俺も欲しい。どつかに修練場とか無いかな？ 無いですよねはいわかつてますよちくしよう。「どころで見た？ 一年代表の国際科の女の子、かわいくなかつた？」

国際科、正しく言えば国際教養科の事だ。俺も見たが、とても、かなりレベルが高い女子生徒だつた。実際何人か見とれていた。俺も一瞬目を奪われたしな。「そーそー！ すつごかつたよねー！ あんな美人いるんだつて思つたもん！」

「寝てたため見てません」

「確かにあれは見とれても仕方ないレベルだつたね」

「女の私でもあれは惚れるものがあつたの間違いない」

満場一致、全員が全員あの女子生徒を褒めていた。しかし何故だろうか。何かが引っかかる……。何処かで見た事がある顔だった気がするし無かつたかも知れない。まあ思い出せないならそんだけの思い出か、という結論に至り思考を放棄した。

「…………隼人くん、見た？」
「…………うん。間違いないね」
「「ようやく見つけた」」

物事を一度後回しにするとやりたくなり更に先送りしてしまうものである。

「比企谷、こいつを見てくれ。これを見てどう思う?」「すごく……、俺の文字です……」

時が移り変わり高校生活二度目の春を迎えて一週間程経過した頃。俺は国語担当の教師、平塚静先生に職員室に呼び出されていた。

何故だろう。時の流れが早すぎる気がする。去年の記憶が殆ど消えてんだけど。確かに覚えているのは折本と出かけたり一緒にバイトしたり仲町さんに連れられて美味しいラーメン店発掘しに行ったり三木ブラザーズと小町で兄妹と姉弟による談議。妹至上主義同盟を組んでいるいつものメンバーに含まれている日月と氏神の三人で妹談議に花を咲かせたりしてた気がする……。

あれ? やつてる事ほぼ中学の時と変わらなくね?

「そうだが私が聞きたいのはそこじゃない。君が書いたこの『高校生活を振り返って』の内容だ。どうしたらこんな文章が出来るんだ」

「そんなにおかしな事は書いてないはずなんんですけど……」

「妹の事について表面を通り越して裏にまで書いてる時点でおかしいだろう……いや待て、それ以前に何故高校生活を振り返つていないんだ！」

「ちょっと待つてください平塚先生。さすがの俺でもそんなもの書いているわけないじゃないですか」

「この氏名欄に目に入らんか？」

ピラつと俺の前に紙を出される。言われたところに目をやると紛うことなく俺の名前が書かれていた。

おかしい。いくら俺がシステムを拗らせていてもここまで書くか？　ていうかそもそもこれを書いた覚えがないんだけど！

「しかし国語を学年四位にキープしているだけあるな。内容はアレだが文章はなかなかなものだ」

「まあそれ以上には行けていないのは事実ですけどね」

マジでおかしいだろ。毎回九十点近くは叩き出しているはずなのにそれでも四位とか……。上位三人のうち一人は刻のヤツなんだけど。しかも二位。おかしくない？　おかしくなくない？

「まあいい。とりあえず君にはこの課題の再提出をするように」「はあ、まあそうですよね」

これはさすがに書き直すしかないよな。しかし我ながら凄いな。こんな紙つきれに小町への愛を書き取めることが出来てるんだから。書いた記憶が無いからホントに俺がやつたのか疑わしいところはあるけど。

「ああ、それと君には少し頼みたいことがあるんだ。この後は何か用事でもあつたりするかな?」

「えつ、はあ。まあ暇ですけど……。結構時間を取りられたりしますか?」

「そうだな。おそらく下校時刻くらいになるだろう。今日も折本達と帰るのか?」

「なんで先生、俺が一緒に帰るメンバー知ってるんですか……。まあそうなんですがね」

「それならまた後日でもいいんだ。いい加減私も厄介、ではなく面倒になつてきてな」

「はあ」

言い直してたけど今厄介って言つたよねこの人。どんだけ面倒な事やらされるんだよ俺は。

しかし俺には断る権利はほぼ無いと言えよう。何故かは察しの悪い人でもわかるだろ。

「遅くなるなら折本に連絡しておくんで大丈夫ですよ」

「ん、そうか。すまんな。なら頼むとしよう。付いてきたまえ。案内しよう」

そこからしばらく目的地まで平塚先生に連れられて廊下を歩き続けることほんの数分。何をさせられるかわからぬがまあ大変だつて事は確かだらうからある程度覚悟はしておこう。何せ厄介で面倒な事が待つてゐるらしいしな。

「着いたぞ。ここだ」

親指で指し示された場所を見やるとそこはたしか何にも使われていらないはずのただの空き教室だつた。もしかしてこの教室の掃除とかか？ え、それつて教師のお仕事に含まれてたつけ？ いや、教師の仕事の内容を全部知つてゐわけじやないからなんとも言えないけど。

『…………ちゃん、いつまで――』

『…………わかつて…………でも――』

あれ？ なんか誰かいるっぽくない？ 先に先生が依頼してたのか？ あつるえー？ どーしてだろー。なんだか面倒な事になりそうな気がしてきたなー？ 逃げちゃダメ？ あ、ダメ。デスヨネー。

「すまないが比企谷。ここで少し待つていてくれないか？ 合図を出したら入つてきてくれ」

それだけ俺に伝えるとガラガラと扉を開けズカズカと入つていく。うーん？ そもそも俺外にいる必要あるのか？ 掃除じゃないの？ あ、別に掃除するとか言つてな

かつた気がしなくもなってきた。えー、何やらされるの俺ー？　帰りたーい♪　帰りたーい♪　あつたかハ○○が待つているー♪

『おーい、入ってきたまえ』

おつと、バカな事考えてたら呼ばれたか。

「平塚先生、なんで俺は外に待機させられてたんですか？」

空き教室に入ると同時に質問を投げかける。一先ず中にいた2人は放つておいて平塚先生への疑問を投げかける。

「あつ」

「ああ、君に頼みというのは彼女達と顔を合わせ話をさせる事だ」

「はあ。俺とですか」

「去年あたりから君に話があると言つていたんだが……。なんだかんだ言つてこの時期にまでなつてしまつたんだ。ほら雪ノ下と葉山。挨拶くらいしたらどうだ？」

「…………」

「あー、えっと、雪乃ちゃん？」

「…………」

ん？　雪ノ下？　葉山？　なんで成績トップの二人がいるんだ？　ていうか俺に話

？　あれ？　そういうえばこの二人どつかで見覚えが……。それに名前とか聞き覚えが

あるんだけど。

「…………ふ、ふふふ」

「雪乃ちやん？」

「勘違いしないでくれるかしらっ！ 比企谷君！」

「うおつ!? 急に大声出すなよビックリしちゃうだろうが！」

「別に私は貴方に顔を合わせられないから今の今まで会いに行かなかつたわけじゃないのよそもそも貴方に会いたすぎて仕方なかつた程なのよでもいざ行くとなるとなんて声をかければいいのかわからなくなつてしまつたのよそれに本来なら小学校で言わなくちゃいけないことだつてたくさんあつたはずなのにいつの間にか卒業の日にまでなつてしまつたし中学の時に再チャレンジしようとしたのに貴方つてば学区が違うからか同じ中学になれなかつたしそもそもどこの中学にいたの貴方はそうよ貴方が同じ中学にいれば私もこんなに気を揉まなくてよかつたのよいえ違うわどんなに取り繕つても私が悪いわよねそれはそうよもう何年も前の事を言おうとしているのよ私つてばソウネマズソコカラアヤマラナイトイケナイカモシレナナイワイエソレイゼンニヒキガヤクニハワルイケレドワタシニモココロノジユンビガタイヘンカカツテシマウカラキヨウノトコロハカンベンシテアゲルワツテソウジヤナクテアアアアダメダワチガウノソウジヤナイノワタシガツタエタイコトハソンナコトジヤナクテ——」

スパンン！

甲高い破裂音が雪ノ下の頭と葉山が持っていたハリセンによつて鳴り響く。えつ、何これどゆこと？

「すまない比企谷。もう少しだけ外で待機していくくれないか？」

「あつ、はい」

先生に半ば追い出される形で廊下に立たされる。

……。なんだつたんだあれは。唐突に話し始めたと思つたらマシンガンの如く息継ぎなしで顔を真っ赤にさせた上に目とかグルグルさせてたし……。あれ？ 雪ノ下つてあんな感じだつたつけ？ もうちよいクール系のヤツだと思つてたんだけど……？

『おい雪ノ下、少し落ち着きたまえ』

『なんですか平塚先生。私はとても冷静ですよ。ええ、問題なんてありはしません』

『そんなに顔を真っ赤にさせて何を言つてるんだよ。ほら深呼吸して』

『ひつひつふー……』

『うん、そうかもだけどそうじやない。なんでそのやり方を採用したんだ』

そんな中でのやり取りをぼんやりと聞き流しているといつの間にか時間が流れいたらしく、次に教室に入れた時には三十分はかかっていた、と後に気づいた。

雪ノ下雪乃と葉山隼人と比企谷八幡。

「あー、こほん。改めて紹介するぞ比企谷。こつちにいる2人は雪ノ下と葉山だ」

「「ど、どうもお騒がせしました……」」

「お、おう。まあ気にすんなよ」

やつとこさ教室に入れた俺は中でてんやわんやしていた二人とようやくこの対面の形をとることが出来た。いや長えよ三十分も外で待たせるなよ普通に帰ろうかと思つたわ。いや、マジで。外で待つてる途中とか折本に連絡取つて合流しようとしたくらいだわ。あー、アソツ等今頃は家かなう。俺も早く家に帰つてダラダラしてえ……。
「それで先生。なんで俺をここに呼んだんですか？」

「ああ、それはだな」

「——せんしぇつ、んんつ、先生。ここからは私達から説明します」

平塚先生の言葉を遮るように雪ノ下が後を引き継ぐようだが大丈夫かこいつ。若干不安が残るんだが……。

「まずは比企谷君。先程は取り乱してごめんなさい。隼人君も頭を下げなさい」「え、いや俺は関係ないというか寧ろ止める立場にいたから——」

「隼人君」

「はい、めんなさい」

「おお、完全に尻に敷かれてるな葉山のやつ……。一体この数年でどんな変化があつたんだ。

「……んで、要件はなんだ。まさか今更昔話しようつて訳じやねえよな？」

「そのまさかよ。比企谷君、貴方には謝らなくてはいけない事が三つ程あるわ。そして謝つて欲しい事が一つ」

「…………は？　いや待て何の事だ？　俺謝られる事とか謝らないといけない事したつけか？」

「まず私達が謝らなくてはいけない事の一つ目よ」

「無視ですかそうですか分かりましたよ全部聴くから後で俺の話もちゃんと聴いてね。良い子のみんな、八幡お兄さんとのお約束だよ。

「一つ目、あの日、貴方に助けて貰ったのに礼を言えなかつたこと」

「その件に関しては全くのお門違いだから気にすんな。お前はなんにも悪くない」

「二つ目、葉山隼人とかいう私の隣に団々しくも立つているこの似非紳士をあの時までに御しきれていたかったこと」

「おい葉山、こいつ今どんでもない事言つたぞ。気のせいいか？」

「三つ目、やつと同じ高校になれたにも関わらず貴方の前に姿を出す勇気を出せなかつた事よ」

「三十分前の出来事が物語つていたな。何？ 倘と会うのそんな緊張するイベントなの？」

「比企谷。今彼女に君が話しかけても無駄だよ。緊張のし過ぎで殆ど聞こえてないみたいだから」

「なんと、さつきから主観的に見ても余計だと思われる茶々を入れてみたが無視されたわけじゃなく本当に聞こえてなかつただけなのか。」

「それにしたつてアガリすぎだろ。今もなんかペラペラ喋り続けるし。よく囁まずにそんなに喋り続けられる——あつ、囁んだ。うわつ、痛そー。」

「んで葉山。これだけの為に俺は平塚先生にドナドナされたのか？」

「そのまさかだよ。本来なら去年の内にこつちから行くつもりだつたんだけど、雪乃ちゃんがあんな感じで引きずるから平塚先生が見かねてね。この事についてもすまなかつた比企谷」

「まあこの件についてもその件についても俺からしたら氣にするなつて感じだし、寧ろアイツは自分で何とかしてただろ？ だから詫びも礼もいらないんだよ」

「それでもだ。ありがとう、比企谷。君がいなければ俺はずつと昔のまま停滞をしてい

たし、雪乃ちゃんと今もこうしていられるることは無かつたかもしかつたから」

「そうがよ」

「頑固すぎるだろ、コイツも、雪ノ下も。何年前の出来事を律儀に礼を言おうとしてたんだよ。俺なら半月で諦めるね。機会があれば言うかもしねんが。

「んんっ、二人だけで話を進めるなんて失礼じやないかしら？」

「もう舌は大丈夫なのか？」

「私からもある時の事の礼を言いたいのよ。それなのに貴方達ときたら私を無視して話を進めるんですもの」

「いやだから舌噛んで話せなかつたらお前」

「知つたことではないわ。次からはハブるの止めなさい。トラウマを掘り返すわよ、私の」

「倒置法で強調するなよ。俺が悪かつたから」

「ごめんね雪乃ちゃん。先に話をしてしまつて」

「本当よ。トラウマを抉り返すわよ、貴方の」

「そこはお前のじやないのか。」

「さあ比企谷君。観念して私に謝られなさい」

「おうはよしてくれ」

若干疲れてしまつたから返事が辛辣氣味になつたが許せ。

「ええ、比企谷君。あの時、助けてくれてありがとう。それとごめんなさい。言うのが遅すぎたわ」

「ああ、まあ、いい」

「さて、これで私の要件は八割を終えることが出来たわ」

「ん？ 残り二割つて何？ ……ああ、そういえば謝つて欲しい事があるとか言つてたな。はて、なんだつたか。俺特に悪い事してないよな？ ……ないよね？」

「貴方に一つ、聞いておきたい事があるのよ。その返答如何で長くなるわ」

「雪乃ちゃん。もうそろそろ下校時間になるから手短にね」

時計を見てみるともう下校時間の十分前だつた。そりや疲れるわ。こんなに学校に残つたの中間と期末テスト期間の勉強会くらいじやないか？

「……仕方ないわね。それでは比企谷君、質問するわ。何故、あの日貴方は何故あんなマネをしたのかしら？」

「……それを聞くか」

「当然よ。私には貴方の行動を理解する事が出来なかつたから」

「そうか。じやあ端的に言うと雪ノ下が泣いてる所を見て我慢ならなかつたから、そんだけだ」

「……泣いてた？ 私が？」

あれ、雪ノ下さんの後ろから黒いモヤみたいのが出てきたよ？ 疲れてるのかな。
 「……とりあえずそれは置いておくわ。それで、貴方はそれだけの理由で自分にも被害
 が出るような事をしたのかしら？」

「そうだな。まあ他にもつといいやり方があつたかもしけんが、俺にはそれしか思いつ
 かなかつたんだ」

「そう。わかつたわ。だけどね比企谷君。これだけは言つておくわ」

「…………」

「貴方が傷つく事で傷つく人がいるのだから、二度とあんなマネはしないで」

「…………ああ、スマン」

あの頃は小町にもかなり心配させちまつたからな。こればっかりは反省をしなく
 ちゃいけない。それに今はアイツ等だつているんだ。やらかそうものなら二、三時間程
 こつてりと絞られてからのラーメンを奢らにやなんらん事態になりそうだ。
 「ええ、許すわ。それじゃあ今日はこの辺で解散しましよう

「終わつたか。戸締りはしておくから早く帰りなさい」

あ、そういえば平塚先生もいたんだっけか。すっかり忘れてた。

「ありがとうございます。帰りましようか、比企谷君」

「あ、俺も同行していいかな?」

「あら、まだ居たのね。とつくに帰つたものだと思つていたわ」

「今日はいつもより切れ味が増してゐるな雪乃ちゃん……」

……。

「なあ最後にこれだけ聞いてもいいか?」

「何?」

「お前等つて付き合つて——」

その後の記憶は何故か無くなつていて、いつの間にか自室で次の日の朝を迎えていた。

改めまして、入部する事になります。

「比企谷、改めて言うが奉仕部に入つてくれないか?」

奉仕部に訪れた翌日、平塚先生が放課後のいつも俺達が屯たむろしている俺の所属している教室にわざわざ来た。というか奉仕部に入つてくれ? それに改めて? おかしい、そんな事言われるのは初めてのはずなのに言われたような気がしてならない。正気を失っている間に言われてたのかな?

しかし奉仕部にか。バイトもあるから出来ればノーと言いたいが、その前に一つ疑問をぶつけてみるか。

「雪ノ下と葉山の2人だけじゃダメなんですか?」

片や学年一の才女、片や校内の人気や人望の厚いイケメン。学園生活を送る上での大抵の事柄ならほぼ問題無い、というか過剰戦力じゃないか? 解決出来ないことなんてそう起きまい。

「ダメじやない。だが、あの二人だけでは足りないんだ」

「足りないことは無いと思いますし、そもそもなんで俺なんですか? 他にいるでしよう

に適任者なんて」

「もちろんいるにはいる。だが、君じやなれば駄目なのだよ」

他に当てがあるのに俺じゃないとダメとかそれなんて日本語だよ。あれ、おかしいな
平塚先生つて国語の担当教師の筈なのになあ……。

ていうか放課後にバイトあるから入ったとしてもあまり顔出せないし、折本達とも遊
んだりするからあまり入る気分には――

「無論、無償でやつてくれとは言わない。入ってくれるなら私が受け持つ教科だけでな
く理系科目にも成績を少し上乗せして貰えるよう担当の先生方に話を付けておこう」
「――よろしくお願ひ致します」

「交渉成立だな」

ニヤツといい笑顔を浮かべる教師とそんな教師に對して土下座でもするのかという
勢いで頭を下げてゐる生徒の図。これだけ見たら脅迫現場に見えなくもない。いやあ
の先生？ 何でそんなに悪い顔をしてるんですか？ 何でそんな「計画通り」とか言わ
んばかりの顔をしていらっしゃるんですか？ 何やらされるの俺？ 使い潰されたら
用済みだと言わんばかりに殺されちゃうんじゃねえのか？

「「「[...]」」」

「うわ怖っ！ なんだよ」

「比企谷が奉仕部に……」

「響きが卑猥な部活に……」

「薄い本が描けそうな展開が出来そうな部活に……」

「なんとなく凝視してみた」

刻、もつとマシな理由で見て欲しいんだが。あ、やっぱ見なくていいぞ。野郎に見つめられても得が無い。

それとなんだそこの女子三人。徐々に危険な匂いが漂う言い方をしていくんじやないよ。そういう所じやないから。……じやなかつたよね？ 昨日の記憶^{おぼろげ}臚氣になつてから確信して言えんのだが。

「てか比企谷一、バイトどーすんの？ 掛け持ちで出来んの？」

「それについては問題無い。バイトや交友を優先して貰つて構わない。ただ暇な時に部室へ顔を出してちよつと力を貸してくれるならそれでいいんだ。どうだ？ かなり良い条件だと思うんだが」

「へー」

暇な時に部室に顔を出して何かあればそれを解決のお手伝いをすれば成績を良くしてくれる……。エサにしては随分特大な気がする。そもそも部活として成り立つているのかわからぬいような部活だよな。二人しかいなかつたように見えたし。百歩譲つて正式な部活だったとしても平塚先生が他の先生に一個人の成績を割増してくれるよ

うに頼んだところで実際に増えるとは限らないし、そもそもこの先生にそこまでの権力とかそういうの持つてるようと思えないんだよなあ。

思わぬエサにうつかり飛びついてしまったがよくよく考えたらおかしな事だらけの提案だ。やはり先生には悪いが断らせてもらおう。何かあつてからじゃ怖いし。

「あの先生、やつぱりこの話無かつたことに」

「じゃああたしも入ろうかなー」「は？」

あの折本さんや？ なんで入部しようとしてんの？ 僕が入るかもしねいから一緒にに入るつもりなのか？ 何それかわいい、じゃなくてだな。そうか、そりゃあ僕が部活始めるつてなつたら折本といる時間が少なからず削られるんだからそういう行動に出るのも仕方ない、のか？ いやいや、疑問形にしたらダメだろ。一応彼氏彼女だしな。うん、まあ、それっぽい事ほとんどした事ないけど。

「なんだ、折本も入部するのか？」

「だつて成績も良くしてくれるんでしょ？ 普通に考えたらメリット大きいし！」

「そうか。なら一度試しに行つてみるといい。歓迎しよう」

「あの先生、やつぱりこの話無かつたことにするの出来ませんか？」

「えっ？」

さつき言いかけたことをそのまま復唱すると二人してぎよつとした顔で見てくる。
いやまあ、ピツクリしてる所悪いんだけど、どうにもエサが口に入りきらないから……。

「理由を聞いてもいいか?」

「とりあえず理由としては三つですね。一つ目は他にあてがあるのに俺じゃないとダメとか意味がわからないです。二つ目に正直俺がいようがいまいがなんでも解決出来そうな一人がいる時点で存在価値皆無になりますし。んで三つ目はいくらなんでも好条件過ぎるところですね」

「へーい比企谷ー。私達とつるむ時間が減るっていう理由が入つてないぞー。なんで入つてないんだーコノヤロー泣くぞー」

三木にそんな事を言つているが、んな棒読みで言われても説得力無いぞ。つーかお前だつてたまにふらつと消えてるだろうよ。探しても見つかんねえし。

「まあとりあえずそんなとこですね。ぶつちやけこんな好条件だと見返りとして何を持つてかかるかわかつたもんじやないですからこの話は無かつたことにしたいわけなんですよ」

「そうか、つまりとにかく馬車馬の如く扱つてくれた方がまだ入部する意欲があつたと」

「それはそれで無いですよ! 嫌ですよ俺、社畜みたいな事するのは」

一時期現在進行形で社畜になっている母ちゃんと親父を反面教師にして専業主夫と

して家庭を守つていこうと考えていた俺からしたら絶対に避けたい事案だ。

「そうか、なら一つ課題、というよりあの二人に君がしなくてはいけない事を教えてあげよう」

そう言うと先生は俺の耳に顔を近づけてくる。いやいやいやいや待て待て待て待て近い近い近い近い！ ビックリしちやうでしょ！ 僕の心の一番目と二番目が埋まつてなかつたらかなり危ないところだつたわ！

そんな風に少し慌てていると先生が小さい声で、

「君がやつたことのツケを返さないといけないんだよ」と、囁いてきた。

由比ヶ浜、クツキー作るつてさ ～①～

「そういう訳で、新しく奉仕部に入ることになった比企谷だ。仲良くしてくれたまえ」
何がそういう訳なのかは本当にわからないが、要はあれだ。平塚先生に半脅迫地味た
ことをされて入部をすることになってしまったのだ。残りの半分は自分の過ちを正す
ために、自らの意思で入部を決意した……のだが、

——あのすみません。俺何かしましたつけ？

いや、俺にはまつたく身に覚えが無さすぎて困惑を禁じ得ないんだけど。平塚先生に
聞いても「それは自分で気づいて自分でなんとかしないといけない」とか言つて何も教
えてくれないし。

いやまあ、たぶんだけど、俺がやらかした？ 事に雪ノ下と葉山が関わつてんのか
なーとか予想はしてるんだけど、特に何もなさそうじやない？ 寧ろ昨日感謝されてた
じやん。何かあるはずが無い。……と思いたい。そんな人生だつた。

少し判断を早まつたか？ でも平塚先生が思わせぶりな事言うしなー。はつきり

言つて凄く気になる。あれ？ そもそも本当に俺が原因でこの2人に何かあるのか？

小学校時代にですらちゃんと話したことないぞ？

あれれ？ もしかして俺、先生にハメられた？

「…………」

「先生、そういう事は事前に言つておいてください。雪乃ちゃんが死んじやいます」

ええ、俺が入るのそんなに嫌なの？ うつかり俺も後を追いたくなっちゃうからそうであつて欲しくはないんだけど。

「いやすまない。決まったのがほんの数分前だつたから、連絡するのも億劫、ではなく面倒でな」

「取り繕う気無いですね……」

「そんで葉山。俺は入部していいのか？ ダメなら帰るけど」

「え、ああ。もちろん歓迎するよ。でもいいのかい？」

「何がだよ？」

「ほら、いつも一緒にいる人達がいるじゃないか」

「あー、何となく言わんとしてることはわかるが、

「さすがにアイツらと年がら年中ずっといるわけじやねえよ。それに俺が来れる日だけ出ればいいって条件付きだしな」

「そうか。ならいいんだ」

言葉では納得の意を出したが、表情からは疑念のようなものが滲み出ていた。

ふつ、甘いぞ葉山。色々な意味で視線や男子からの嫉妬を集めに集めまくつてしまつた中学時代。あれのせいで他人からの視線や顔の表情である程度の情報を手に入れる技術を身につけた俺に隠し事は中々出来ないぞ？

……ちなみにその男子からの嫉妬にはあのB.L君も入つていて。名前は結局最後まで折本のガードによつて知ることはついぞ無かつたが、懐かしいなアイツも。俺の事はもう忘れてくれていてるかな？　いや忘れていてくださいお願ひします。ていうか俺も忘れないで忘れさせてください。

とはまあそんな独り寸劇をしていたら葉山が雪ノ下を「雪乃ちやーん。そろそろ起きてー」とか言いつつどこから取り出したのかわからんがそこそこ音の大きいクラッカーを鳴らして正気に戻そうとしていた。良い子のみんなはクラッカーを鳴らす時は絶対に人に向けたり耳元で鳴らしたりしないようにしよう！　八幡お兄さんとの約束だぞ

☆

「つは!?　ここは……」

「起きたか雪ノ下」

「はい。それで何があつたんですか？」

比企谷君が入部するという夢のまた夢のそのま

た夢のような出来事があつたような気がしなくもないのですが……
「俺がここに入ることがそんなに不思議か?」

「きやつ」

あら可愛らしい悲鳴。本当に悲鳴だつたら泣きたくなるけど。そして流れるように部室に置いてあつた椅子に隠れるようにしてひよっこり顔を出し、

「ゆ、夢ではなかつたようね。まさかこれが現実で起きた現象だなんて……。もしかして今見ているこの光景ももしかして夢なのではないかしら? そんな事が起きるはずがないというのに。いいえ、ダメよ。雪ノ下雪乃ともあろうものがこの程度で動搖してはいけないわ。少しは姉さんのあれを見習わないといけないわね。癪ではあるけれども、あれはあれで使いようによつては充分強力ですもの。そうと決まればすぐに連絡を

「おい葉山。大丈夫か、コイツ?」

「……大丈夫だよ」

「目をそらしてんじやねえよ」

心配になつてきた。主に雪ノ下とちゃんと話せるようになる日が来るのかとか。

その後、しばらく雪ノ下がぶつ壊れてたが治すの面倒だからそれまで葉山と雑談をして暇を潰してたら雪ノ下がどこかに電話をしようとしたがすんでのところで葉山が止

めに入るまでの流れは端折らせてもらおう。これから先もどうせあるだろうしな。

コンコン。

「ん？ 誰か来たのか？」
「そのようね。どうぞ」

「し、失礼しまーす……」

入ってきたのはピンクでお団子ヘアの女の子だつた。身体的特徴を述べるとそうだな、雪ノ下と真逆のわがままボディな感じ。おつと、この事は絶対に誰にも言わないでおこう。折本に聞かれたりしたら「へえ……」の一言と光のこもつてない目で見られそうだ。いや、そうだけじゃなくて見られてるな。一回だけそれらしき事してこんな事がありました。いーじやん！ 僕も健全な男なんだから！ いやダメですよねあの時に学びました。その後なんか俺が言つたらすぐに元に戻つたけども。いや、あの時の折本怖かつたなあ。

「平塚先生に言われて来たんですけど……。つて比企谷君と隼人君だ。おいつす！」
「やあ結衣。どうしたんだい？」

「あ？ 誰？」

「二年F組の由比ヶ浜結衣さんね。比企谷君、貴方と同じクラスのはずよ？」

「いや、俺はE組だ」

「なんで微妙な嘘をつくんだ。俺も一緒のクラスなんだから騙されるわけないだろう？」

あ、コイツ俺と同じクラスなんだ。まだ全員の名前とか確認してないからわからんかったわ。俺が知つてるのは折本達のクラスくらいだし。

ちなみに俺と折本は同じクラスで刻達はお隣のE組だ。まあ別のクラスになつたと言つても休み時間とか普通に集まつてゐるから自分のクラスとかどうでもよくね？ つてなつてる。

「てか俺のクラスのやつまで覚えてんのな。もしかして全校生徒覚えてんじやねーの？」

「あら、それだけでは無いわ。ちゃんと教師陣まで網羅しているわ。何かあつた時のためにな」

「何があつたら必要になるんだよその情報……。葉山、三行くらいで例を挙げてみてくれ」

「夏草や

つわものどもが

夢の跡

そして輝く

ウルトラソウル」

「誰が短歌を歌え——いや待てそもそも俳句じやねえかそれに何だよ唐突にB, z
もぶつ込んでくるなそれと三行でまとめろつて言つたろそもそもそのネタニヤル子さんだろお前も読んでんのか読んでないのにやつたのかそうだつたらフォークで刺すぞ」

「それで、由比ヶ浜さんはなぜここに来たのかしら？」

無視しないでください雪ノ下さん。今俺すつごく頑張つて息継ぎ無しで囁まずに言
い切つたんだからそこだけでも褒めてくれてもいいのよ？

「あ、うん……。えつとね……。クッキーを作りたいから手伝つて欲しいんだ……」

「クッキー？」

「それなら調べればいくらでもレシピが見れると思うのだけれど？」

「うう、実は何度か作つてみたんだけど全部失敗しちやつてさ～」

「ほーん。それなら雪ノ下か葉山が教える事は確定したから安心しろ。この二人なら確
実に教えられるだろ」

「待ちなさい比企谷君。さり気なく自分の事を省かないで頂戴」

いやだつてクッキーとか作つたことないんだもん。そんなやつが人に教えられるわ
けないでしょ？ それにクッキーつて分量ミスつたら焦げたりなんだりするんだろ？

なら下手に俺が手を出すより傍観していた方がいいだろ。適材適所にやつていこう
ぜ。

「じゃあ比企谷には味見役を頼もうかな。甘いものが苦手じやなければだけど」

「ああ、それなら任せてくれ。不味いか不味くないかで完璧に判断してやるよ」

「なんで不味いか不味くないかで？ 普通そこは美味しいか美味しくないかでしょ！」

「ここに来る前に失敗し続けたやつが最初から美味しいクッキーを作れるわけないだろ」

「うつ

「もういいかしら？ 早くしないと時間が無くなってしまうわ」

おつと、それはいけないな。仕事なんてものはさつさと終わらせてしまってべきだ。さすが雪ノ下、俺のポリシーを抑えた上での発言ならスタンディングオベーションものだ。決してそういうものでは無いとは分かっているが。

「そしたら俺達は飲み物買つてくるよ。雪乃ちゃんはロイヤルミルクティーで結衣はレモンティーでいいか？」

「ええ、お願ひするわ

「あ、ごめんね。ありがとう！」

「じゃあ俺はテキトーなコーヒーでいいぞ」

「比企谷も来るんだぞ？」

何故だ、と言うよりも早く葉山に手を掴まれて教室から引きずり出される。おい待てどこまで手を握ってるつもりだ離せこの野郎。廊下に出たんだからもういいだろ。逃げないから、この手を離そう、な？ お願い離して十円あげるから！

由比ヶ浜、クツキー作るつてさ

～②～

部室から葉山にドナドナされて現在学校の敷地内にある自販機の前で俺は絶望をしていた。

理由は至極当然の事で葉山がここに来るまでの間、一向に手を離さないまま連れてこられたため女子からの叫ぶ声が止まなかつたからだ。なんなら「はやはち!?」はやはちなんだね！ くうくう！ たまんねえぜ！」という三木の声が聞こえてきたからな。アイツ絶対許さない。そんな誰得なワード作りやがつて。そもそもはやはちでもなんでもねえよ。

「さつきすごい騒ぎだつたね。なんだつたんだろう？」

「お前マジか！ マジで言つてんのか!?」

「？」

いやそんなミミツ○キユみたいな感じで首をコテンつてさせてもダメだからな？ やるなら化けの皮も剥いでやれ。ありのままのお前を見せる！ いややつぱりいいです要らないです。俺得じやないので。

しかし葉山のやつあの騒ぎで何も気づかないつてどんだけ鈍いんだよ……。周りの

目とか気にし無さすぎじゃない？ もつと視野を広くしてくれてもいいと八幡は思うよ？

「それはそうとして」

「いや流そうとしないでくれ。結構重要な事柄だから」

「君から見て雪乃ちゃんはどう思う？」

「スルーですか……。雪ノ下をどう思う？ そんなの、

「壊れた美少女」

「…………すまない、この質問は早すぎだみたいだ」

当たり前だ。今のところ壊れてるところしか見てないからな。もしこれ以外の感想を持つている人はぜひ俺に教えてくれ。参考にしながら雪ノ下を見てみよう。

「なら俺の事はどう思う？」

「ホモ疑惑」

「…………」

「安心しろ、三割は冗談だ」

「残りの七割の所在を聞きたい所だよ……」

やめておけ。一方的に傷つくだけだぞ。一方的に痛めつける側のやつに言われたくないとは思うけど。

「そもそもなんで今そんな質問をしてきたんだ？　するなら昔話とかじやねーのか？」

「……昔の事より今の俺達を見て欲しいから、かな？」

「疑問形で返すなよ。俺にわかるわけないだろ」

「そうだね。でも、多分これが今俺が思っていることなんだと思うんだ」

「曖昧だな」

「これでも良くなつた方だよ」

「これでもうつて、小学生の頃色んなやつと話してただろ。子供なんだから自分の感じた事とかそのまま口に出してたような時期だろ？　もしかして俺の知らないところでボツチにでもなつて話し方を忘れたとか……無いな。こんな無駄にイケメンのコミュ力があるやつをハブにしたりするわけが無いし、そうなるような立ち回りをすることは思えない。

「何故そんな事言えるかつて？」

「そりやあもちろん、人は一度でも良い環境を手に入れたら手離したくないものだからな。俺だつて今の環境を捨ててボツチに戻れって言われても多分出来ない。ていうかしたくないからな。まるで俺の意志が大衆の意志のような言い方をしてしまつていてが実際そんなもんじやないか？」

ん？　あまり人の事言えないんじやないかって？　いやいや、俺と葉山じや全然違うだろ？

実際にその立場に立つてゐる場合じやなく、人柄や周りからの評価が、だ。

今でこそ俺はこんな感じではあるが雪ノ下の一件があつた時の俺は所謂、皆の一部のような人間で、一方で葉山はこの頃から皆の人気者みたいな人間だつたはずだ。

ほら見ろ、全然違うだろ？　要は今まで生きてきた環境とそいつの人柄次第で周りからの評価だのなんだのは決まつてくるんだよ。

「んで、なんで俺がお前ら二人を見なきやならんのだ。俺はお前らのお父さんになるつもりは無いぞ」

「俺も同じ歳の父親は嫌かな」

「だろうな。俺もこんなでけえやつの面倒を見るのはごめんだ。この歳なら少し自立て動いた方が歳相応だろ。俺はまだ親の脛かじつて生きるがな」

「そんな事堂々と言われても困るんだけどな」

「しうが無いだろ。俺まだ十六だぞ？　こんな歳で親の助けも無しに一人でやつていける訳ねえだろ。なあどこぞかの大学のパンフで一人立ちしたかつたとか言って一人暮らしをしてるのに親から仕送りで十万近く貰つてるどこの誰かさん？　いや俺もどこのだつたか忘れたから指名しないけど。でも大層な事言つてしてくるくらいなら普

通に実家にいた方が良くね？俺みたいに親の脛かじつてた方が賢明じゃね？
「とにかく、俺と雪乃ちゃんは昔とは違うから、その姿を見てほしいんだよ」

「ええ？ やだよ面倒臭い」

「どうしてもか？」

「……はあく。わーつたよ見てやるからそんな目でこっち見んな捨て犬かお前は」
だからお前はホモ疑惑の人だつて言われるんだよ。あれ？ そう言つてるの俺だけ
かな？ あ、いや三木も言つててたな。なら問題ないな。……何が問題ないのか知らん
けど。

それにして葉山といい雪ノ下といい、昔とだいぶ変わってるな。雪ノ下なんてクー
ルさが壊滅してるじやねえか。いや、普段はそうなのかもしねないけども。そういう所
じやなくともつと違う部分を見ろつてことなのか。

別に見なくても大丈夫じやね？ 俺が別にあれこれしなくても二人なら問題無く
やつていけるだろ。そもそも俺が手を加えてやる必要無し。超イージーな頼み事だ。
「そうか、ありがとう。……そろそろ行こうか。二人を待たせちゃつてる」

その後、遅くなつた理由を雪ノ下に根掘り葉掘り聞かれたり、由比ヶ浜から「ホモつ
て何？」という質問に閉口したりと大変な時間を過ごしました。いや、クッキーまだ作
らないの？

由比ヶ浜、クツキー作るつてさ ～③～

「…………なぜ、ここまでミスをしてしまうのかしら」

机に頃垂れている雪ノ下を尻目に、俺と葉山は由比ヶ浜が作ったクツキー？ を見下ろす。

何故こうなった？ は俺達が聞きたいくらいだよ。恐らく雪ノ下が試しに作ったであろうクツキーの隣にお妙○んの料理の完成系？ が置かれている。

何コレ？ 殺害目的で作っちゃったの？ その人にどれだけ殺意抱いてるの？ いいえ、善意デス。彼女は勤勉なる心を持つて取り組んでいたのデス！ そう、それは愛！ 愛が籠っているこのクツキーが不味いわけが――

「うがががががががががが」

「比企谷!! なぜ唐突にそれを食べたんだ！」

「今すぐ吐き出しなさい！ それとすぐに口直しの紅茶を！」

――愛があつても私に向けられた愛で無くては無意味だつたみたいデスね。

数分後、無事正気を取り戻した俺は今後、由比ヶ浜からの依頼をどう解決するかに頭を悩ませていた。

雪ノ下曰く、丁寧に教えているつもりなのにも関わらず、指示した通りに作業が出来無かつたことに加え、アレンジと称して桃缶や甘過ぎないようになるとコーヒーの粉を投入していたらしい。また、卵の殻は取り除かずにそのまま、と。
それに比べるのは悪いが雪ノ下のクッキーホントに美味えな。お店に出せるレベル

じゃねえの？ えつ、レシピの手順通りやつてるだけ？ 由比ヶ浜もそれさえすれば
ちゃんと出来る？ ホントかなあ？

「さて、由比ヶ浜さんの依頼なのだけれど」

「由比ヶ浜（結衣）が二度と料理をしない事で解決」

「即答！？ しかも私が料理しない事が解決策になつちやうの!?」

今しがた一人川を渡りかけたようなものを作るやつにこれ以上料理させてたまるか。
寧ろ渡された人を守る為の処置なんだから諦めてくれ。

そういうえばコイツは誰に渡すつもりなんだ？ そこん所聞いてない気がする。

「待ちなさい二人共。それは最終手段よ」

他に手の打ちようが無いから最終手段を決行しちゃ駄目ですか？ 無理だろ、ここか
ら食えるまでに料理スキルを上昇させるなんて。やれたとしても雪ノ下が付きつきり
で教え続けなくちゃならない。

しかしそれだと雪ノ下の負担と俺と葉山の胃袋へのダメージが深刻なものになつて
しまう。

依頼はきちんどこなす、それがプロです。え、そうなの？

「つーか、誰に渡すつもりなんだ？ 依頼内容俺と葉山は聞いてないんだけど
あつ、という葉山の声が上がり全員がそちらに目がむく。

おい？　まさかお前、知つてたわけじやないだろうな？　その上での雑談をしてたんだな？　目をそらすな吹けもしない口笛をするな汗を拭けそして雪ノ下から漏れ出てるこの威圧をどうにかしろ頼むお願ひなんか室内の温度下がつてゐる気がするの。由比ヶ浜なんて見てみろ。何が何だかわからなくてあわあわしてゐるぞ。

「隼人君」

「はい」

「土下座なさい」

「え、そこは正座じやなくて——」

「顔を上げてたら頭を踏み抜けないじやない」

「まずは説明をさせて貰えると助かるかな」

あ、また長くなりそうだなこのくだり。

「雪ノ下、葉山への折檻はまた後でにしてくれ。依頼が長引いちまう

「……それもそうね。葉山君、寛大な比企谷君に感謝しなさい」

「結局この後で何かされることは確定じやないか」

「何か？」

「アリガトウヒキガヤタスカツタヨ」

「おう札はいらんからはよ誰にどういうつもりで渡すのか説明しろ。三行でな」

「優美子に

クツキーを渡して

伝えたい感謝の気持ち」

「真面目に答えるなよふざけやがつて」「

「俺にどうしろって言うんだ」

さて、優美子つて誰だ?

あつ、嘘ですごめんなさい一度話した事あります。あれは確か三木がアイツのグループに引き抜かれそうになつた時だつたか。ま、その話はまた別の機会について事で。

しかしアイツか。確か苗字が三浦とか言つたか? 人に感謝の気持ちを伝えたいからわざわざここまで事するなんて何したらそんな事が起きたんだ?

「まあ何となくわかつたわ。んじやまあさつさとやるか。雪ノ下。もう一回しつかり教えてあげてくれ」

「言われなくともそのつもりよ。あと、一応私が部長なの。貴方が指示したら私の立つ瀬所か何もかもなくなつてしまふわ」

「あ、スマン」

「なんとか形にはなったわね」
「うん、でも味は雪ノ下さんとの比べると……」

あれからしつかりと雪ノ下に作り方を叩き込まれた由比ヶ浜は、とうとうまともなクッキーを作り出すことに成功した。その間に由比ヶ浜が諦めかけたり雪ノ下の叱責があつたり由比ヶ浜がMじやないかと思わせるような紛らわしい事を言つたりちよつトイケナイ感じになりかけたりしたが無事に人が食べても問題無いレベルになつた。

いやはや、雪ノ下には恐れ入つた。まさかあの状態からここまで人を成長させるとはな。

「いや、これで十分だと思うよ。重要なのは気持ちだし、あまり上手に作るよりこれくらいの方が手作り感があつていいんじゃないかな?」

由比ヶ浜はそういうもののかなと少し不安げに首を傾げる。

しかし由比ヶ浜よ。一番最初のクツキーと見比べてみろ。天と地の差はあるから。そんな奴が雪ノ下が作ったクツキーくらい美味しいもの出してきたら疑われるぞ。

ならばどう納得させるか、もしくはどこまで上達の手伝いをするのか観察でもしておくか。楽な方に楽な方に行こう。

「仕方ないな。雪乃ちゃん、結衣を連れてちょっと席を外してもらつてもいいかな?」

「いいけれど、何をするつもりなのかしら?」

「少しね」

「……わかつたわ。いいわね由比ヶ浜さん?」

「えつ、あ、うん。いいけど……」

「ありがとう二人共。準備が出来たら連絡するよ」

さて、ここから葉山は何をするつもりだろうか。二人を追い出してまでする準備とか……、いややらんとしてる事はホントはわかつてるよ? でも何を目的にするのかまで

は……。

「さて比企谷。君にも手伝つてもらうよ」「……へ？」

十数分後、雪ノ下達を呼び戻し机の上に置いてある二つの皿に盛られた手作りのクッキーを見て食べてもらうことになった。

一つは葉山の綺麗な手作りクツキー。もう一つは俺が用意した不細工な手作りのクツキーだ。

一目瞭然で葉山の方が圧倒的に良いものであるのは揺るぎない事実だ。それは雪ノ下も由比ヶ浜も承知している。なんなら由比ヶ浜は「隼人君の凄いね！ 比企谷君のは……」つて反応しちやつてるし。正しい反応かもしだれないのでそんなに露骨に出さないでほちい。雪ノ下を見てみろ。「これが比企谷君の作ったクツキー……」つて目を輝かせて……。あの、雪ノ下さん？ それはそれで違うとワイトは思います。

「ふう、ま、葉山のと比べるとこんなクツキーとか見向きもしねえよな。わり、捨てとくわ」

「あ、ちよつ、待つてよ比企谷君！ 別に大丈夫だよ！ ほら、不味いわけでも無いし！」

「そうだね。まあ、このクツキーは比企谷じやなくて結衣が作ったものなんだけどね」

「えつ？」

そう、これは俺が用意した由比ヶ浜が作ったクツキーだ。決して俺が手を加えたりした訳でもない。百パーセント純正、由比ヶ浜お手製のクツキーである。

出来たて特有の温度とかでバレると思ったんだが……、葉山の言う通り由比ヶ浜にはわからなかつたようだ。さすが葉山、自分の所のアホの子の扱いには慣れている。雪ノ下？ そもそもアイツ葉山のには一切触れなかつたぞ。

「……隼人君？」

「待つてくれ雪乃ちゃん。その高らかに振り上げた拳と結衣の作った木炭を下ろして！さすがの俺でも無理だ！ 死ぬ！」

「大丈夫よ。私の腕力じや貴方にダメージを負わせる」とは至難の業だから」「それって私のクツキーなら容易いってこと!?」

「結衣！ よく容易いなんて難しい言葉を使えたね！ 偉いぞ！」

「そんな事で褒められても嬉しくなーい！」

「また俺が空気になつたんだけど。えー、もう俺いらぬ子じやない？ 流れに乗れないんだけど。助けて折本ー。お前のウケるが聞きたーい。」

「——なんか比企谷に助けを求められる気がする」

「ヒキガヤニウムが枯渇してきてるだけでしょ」

「何それ！ ウケる！」

——あれ、なんか回復した気がする。やはり持つべき者は折本だな。アイツの事を思
い出すだけで元気が出でてくる。あ、惚氣とかじやないよ？

「ど、とにかく！ 結衣は比企谷がクツキーを捨てようとしたら止めたろ？ それはど

うしてだ？」

「え、だつてせつかく作つてくれたのに捨てるのはなんか違うなつて」「そうだな。じやあ更に付け加えてこれは感謝の気持ちを込めて作つたクツキーだとしよう。結衣が渡したい人はそれを無下にしてこのクツキーを捨てるような酷い人なのかい？」

「そ、そんな事ない！ 優美子はそんな事しない……しないかなあ？」

「いやそこは断定してやれよ」

可哀想だろ三浦が。いつもどんな仕打ち喰らつてるの？ ホントに友達ですか君等。

「い、いや優美子なら大丈夫だから。安心して渡してみろつて」

「……そうだね！ ありがと隼人君！ 雪ノ下さん。後は一人で頑張つてみるよ！」

「そう？ なら成功を祈つているわ」

「うん！ ありがとね！ それじゃ！」

そう言つて由比ヶ浜は元気よく家庭科室から出ていった。いいね、俺にも分けてくれ「その元気。折本達どつるむのは体力が必要だから半分くらい分けてくれないかしら。

その後、雪ノ下達と片付けをしていたらもの凄い勢いで扉を開き「片付けするの忘れてたー!?」とやかましく再登場した由比ヶ浜を向かい入れどうにか俺が入部してから初

の仕事は無事終わりを迎えた。

由比ヶ浜、クツキー作るつてさ ～終～

由比ヶ浜が依頼に来てからの後日談。依頼が来た次の日は俺がバイトだつたので居なかつたからまたその次の日の朝のホームルーム前に葉山から教えてくれた事なのだが、部室に由比ヶ浜が来たらしい。どうにもお礼をしたいからクツキーを渡しに来たらしい……んだが、まあ昨日今日で唐突に上達するはずもなく、最後に作ったクツキーと同じのようなものを貰つたようだ。しかし俺はその場に居なかつたので貰わなかつた。だがバットしかし俺が胸を撫で下ろす暇もなく今朝方折本と登校しているところにクツキーを渡してきた。……うん、でも俺とか特に何もしてなくない？だからお礼とか必要ないと思うんだ！ 大丈夫、気持ちだけ受け取つておくから！ ていうか折本から謎の波動が溢れ出てくるんだけど！ 最近怖いのよどういう場面で来るのかわからぬいんだからあまり刺激を与えないで！

「——そんなこんながあつてやつとこさ無事終わつたんだよ」「つまり浮気をしていたと……」

「違うそうじやない」

葉山からの死刑宣告を受けたその日の昼休み。俺達はFクラスに集まつて昼食を

とつていた。そこで一昨日の出来事を説明して いたら総括として三木がまとめたがなぜか処刑執行一步手前に追い込まれた。執行人はもちろん折本です。マジでやめてください死んでしまいます！

「それでー？ 結局どんなクッキーだったの？」

「……あ。これだ

「「「「…………」」」

机の上に出された丁寧にラッピングされた袋を凝視する。……うん、まあ、そうだね、クッキーには見えるよね。

「……ちよいと比企谷さんや」

「なんだい折本さんや」

「これはクッキー、なんですよね？」

「ええ、そうですよ」

「そこそこ大きいですね」

「ああ……。てかなんで地味に丁寧な言葉で話してんだよ。ウケるわ」

「それあるー！」

何があるんだよ。最近のトレンドなの？

「星型なのはわかるけど、かなり黒いな」

「これでマシになつたつて……」

そうは言うが最初は桃缶とかコーヒーの粉とか卵の殻とか入つてたからな？ そこから考えると進歩しただろ。

それと今回の出来事で俺が学んだ事はオリジナリティーを出さない、だな。ヘタに調理手順に自分なりのやり方を加えたら失敗する。由比ヶ浜が凄くいい例になつた。まさか某バカテスにある殺人料理の劣化版を食うはめになるとは思いもしなかつたし食いたくもなかつたが。

「まあとりあえず何があつたのかはわかつたけど、それで八幡」

「なんだ」

「それがどうしてあの状況ができるんだ？」

アレだよアレと指で示す刻。そしてその先にいるのは葉山と由比ヶ浜が所属するグループ。そこで起きてているのは由比ヶ浜と三浦のお話し合い、いや一方的な虐殺パーティーが開催されている。

曰く、由比ヶ浜が昼休みずっと他の所に行くらしいんだが、それを濁しきつた言葉でどもらせながら話すのが気に食わなかつた三浦が激昂した、という感じだ。簡潔に正しく何をしに行くのか言いなさいというのを三浦は由比ヶ浜に強めに言つてゐるが借りてきた猫の如く、由比ヶ浜は小さくなつてしまつっていた。

助け舟を出すつもりのない葉山は三浦を困ったように見ながら笑っている。……お
いこつちに気づくな手を振るな事件が現場で起きてんだろこつちは茶でもしばいて眺
めてるからお前は収束に向けて身を粉にして頑張れよ！ それと手を振り返すな三
木い！ 三浦にバレたら死ぞ！

「まつたく、何をしているのかしら。私との約束破るつもりかしら」

「「「うわっ!?」」」

「？ どうしたのかしら。そんなに驚いたりして」

「いつからいらつしやつたのですかユキノシタ＝サン!? 貴女どうやつて私の隣に!?
ていうか近い近い近い近い！」

「…………」

「…………めんなさい。彼に近づきすぎたわね」
ぎやー！ 折本がすつごい顔でこつち見てるううう！ コレってつまりあれだよな
？ 返答と行動を1ミリでもミスつたらデッドエンド確定ルートましぐらじやない
ですかあああ！

「…………めんなさい。彼に近づきすぎたわね」
場の空気を読んでくれたのか少し離れてくれる。それが功を奏したのか折本からの
プレッシャーが和らいだ（当社比）。ナイスだ雪ノ下！ 原因お前だけど許すぞ！ あ
とで俺にしわ寄せが多少来るだけだから無問題！

「比企谷君、この人雪ノ下さんだよね？ なんでここにいるの？」

「俺が知るかよ。由比ヶ浜と約束があるとか言つてたけど」

「そこ、仲町さんとヒソヒソ話をするのを止めて私もいれなさい」

いや、あなたの事ですしお寿司？ ひつそりとこつそりと話さないといけない事なのですよ？ 試しに表立つてやつてみようか？ 見ようによつては物凄いいじめの現場に見えるからね。

ところで雪ノ下よ。由比ヶ浜を放置したままでいいのか？ 今は頑張つてるけどあと少しで崩れるぞ。それで葉山がいい具合に場を取めるのかなるほど察した。ん？ 何故それがわかるつて？ 見てみろ。葉山グループのメンバー、当事者の3人を抜いて男子が3人、女子が1人いるが誰も止めようとしない。ていうか女子にいたつてはニッコニコしてる。こつわ！ なんで笑つてられるんですかね。あれ？ ここもしかして笑いどころなのか。よしじやあ一発笑つてみるか！ ふははははははは！

「[.....]」

あ、でも他のヤツら苦笑すらしてないや。なら俺の勘違いだな。やれやれ反省しなくちゃ――

「おい」

「なんだよ今脳内ラブコメならぬ脳内コントして現実逃避をしてんだから話は後でな」

「そうか。なら選択肢をミスつたな。見てみろよ。三浦が殺意の波動と共にこちらを熱の籠つた目で見てるぞ、お前を」

「倒置法で強調しないといけないほどか？ んなわけ…………あるな、あつたわ。二重の意味であつちやつたわ」

ちなみに今のは「そういう事態があつた」と「目と目があつた」というダブルミーニングなのだよ。なかなか上手いだろ？ たぶんどつかしら言葉の使い方間違つてるだろ？ けどそこはツツコまない方向で。だつてもう脳みそ使えないんだもん。三浦の視線がガンガン突き刺さつてそれどころじやないもん。もんもんうるせえな発情期かよ。違うそうじやないそんな事考へてる場合じやないんだつて。とりあえず喉が渴いたしマツ缶買つてくるか。脳みそ働かせるための糖分摂取も必要だしな。

「ちよつと待ちな」

「ひやい」

「あんさ、なんで笑つた？」
「あー、まさか本当に声に出して笑つてたのか？」
「はあ？ あんな高らかに笑つておいて言い逃れできるかつての」

「あんさ、今まで笑つた？」

これには流石の三浦さんもご立腹のご様子。いや、苛立たせてるの俺なんだけども。しかし、なんだろうな。さつきまでの三浦の怒り方と俺に向けている怒りは何かが違う。こう、俺のは純粋な殺意なんだけど、由比ヶ浜に向けてたのはまた違う……？ あれ、俺今純粋にぶつ転がされそうな感じ？ 逃げたいなあ……。

「待て違うんだ。そうじやない。お前らとは関係ない事だ。昔の出来事なんだが、俺以外笑っているような場面が発生して俺だけ笑つてないのもおかしいだろ？ だから作り笑いで笑つてたのがそのまんまで出てきただけだ。俺は悪くない。悪いのはそんな状況を作つたやつだ」

「…………きつも」

おい待て、その言葉は俺には効くぞ。……俺には、効くぞ。

「ところで由比ヶ浜さん。まだ話終わらないのかしら？ お昼が終わつてしまふわ」
おつと、ここで雪ノ下の援護射撃だ。よかつた、これで俺へのヘイトも少しは——
「結衣、雪ノ下さんとお昼食べる約束してたの？」

「え、う、うん……そうだよ？」

「はあく……。そなうならそなう言えつての。ほら、早く行きな」

——ん？

「…………怒つてる？」

「ちやんとはつきり言わなかつたことに関してはね。ほら昼休み終わつちやうから早く行きな。雪ノ下さんもゴメン」

「いえ、話し合いが終わつたのならそれでいいわ。行きましょう、由比ヶ浜さん」「あ、あともう少しだけ待つてて。……優美子」

「どしたん？ 早く行かないと——」

「これ！ いつもありがと、ね？ これまでのお礼と、これからもよろしくねつて……」

「…………」

「じゃ、じゃあまた後でね！」

「…………」

んんんんんんんんんん???

え、何？ 何が起きたの？ 一分そちらで情報がいっぱい流れ込んできて意味わかんね——んだけど。ほら、クラスがさつきとはまた違う感じで固まつてゐるんだが！ よかつた！ 僕だけじやなくて！

「…………」

それと三浦がずっと固まつてゐるんだけど。どうしたんだアレ？

「あー、皆……。すこーしの間教室から出ててくれるかな？」

「え、あ、はい」

よくわからないけど終始につこにつこにーしてた子が外に出るようお願いされたからとりあえず外に出よう。へー、人つてほんやりしてると判断能力とかその他もろもろが低下するんだー。初めて知つたー。とりあえずマツ缶買ってこよー。

その後、うちの教室から謎の声とそれをなだめる声が聞こえたという噂が流れだが、俺の知つたことではない。

剣豪将軍・材木座義輝がマジで剣豪過ぎるのは間違つて
いる。

由比ヶ浜のグループのいざこぎから数日後の放課後、バイトが休みなので俺と見学と
いう名目で遊びに来るいつものメンバーと部室へと赴いていた、のだが。

「なんでいるんだお前帰れ」

「あれ、我、もしかして歓迎されてない?」

部室に着くと何故か木刀を腰にかけ茶色のロングコートを着た謎の男、ではなく材木
座義輝とか言うやつが居た。去年体育の時お互いパートナーが居なかつたのでちよく
ちよく組んでいたから一応知つてはいる。

「またよくわからんものを書いて見てくれとかだろ。もう腹一杯だから退室していい
ぞ。ああ、出口はあそこな」

「ふつ、舐めるなよ八幡。あれからネットや書き仲間に心が治らないレベルにまで碎か
れ続けてようやつと出来た作品なのだ。せめてこれを受け取つてからにしてください
お願ひします」

「必死がよ……」

まあコイツがそんだけ言うんだつたらいいだろ。去年から何故か三木に色々仕込ま
れてたし。

「それで比企谷君、これは貴方宛ての依頼で片付けていいのね？ そしたらざい、ざいも
く……材津君には一度退席していただきてまた後日来てもらうとしましよう」

「やつぱり我歓迎されてないよね？ 寧ろ帰れっていうオーラがヒシヒシ伝わるのだ
が」

ぶつちやけ間違つていない。お前がいるとホントに暑いし。筋肉成分が多過ぎるん
だよ。一年の時のあの脂肪はどこに置いてつた。そして三木、何をさせたらこんなに変
えさせられるんだよ。

俺もいづれ教えて貰おう。折本の趣味のサイクリングに付き合うとやつぱり体力と
筋肉必要だし。

それにしても、本当に変わったなあ。あのでっぷりとしてたあの材木座が、厨二病を
こじらせまくつてたあの材木座がここまで来ると普通にイケメンなんだよなあ。若干
厨二病ご残つてるけどイケメンだから普通に個性になるし。なにそれすぐえなイケメ
ン補正。ズルいぞ！ 俺にも寄越せ！

「それに今回はそこまで時間は取りはしない。導入、漫画で言うところの連載開始の一
話目までしか用意しておらん」

「そりやまた。いつもみたいにログ・ホライズンみたいなものは持つてこなかつたんだな」

「反省させられた……」

あ、うん全て理解したわ。

ここでさすがに折本が話についてこれ無さすぎて説明をする事に。

搔い摘んで説明すると、去年まで厨二病デブの材木座。ある時からノベル作家になりたいと言い始め、それを個人的に見ていたのだが、どこから知ったのか三木が嗅ぎつけてきた。そこから三木による特訓が始まつたのだが。結果は一覧の通りになつてしまつた。俺と折本がバイトの日に行つていたらしいから知らないのも無理は無い。

「まあいいわ、とりあえず読むぞ」

「うむ、よろしく頼む」

さてさて内容は……、まーた異世界転生物……？　ふむふむ……、ほーん。なるほどなあ……。

読み始めてから五分。とりあえず読み終えた。

「ど、どうだつた八幡。面白かったか？」

「いや、まだ面白いかはわからん。次の話持つてきてくれ」

……いつもの如く俺TRUEEEEEEと現代知識無双、とか思つたけど普通の異世界もの

だつたわ。最初の頃と比べてから面白く見えるだけかもしれんし……。

「……文構成がまだ甘い。もつと短く簡潔に出来る」

「む、どこであるか!?」

すぐに三木との話し合いが始まつたがとりあえず依頼は解決としておこう。あれはもう奉仕部とは関係無い話だしな。

「ところでざ、ざー? 在庫切れ?」

「材木座な? 何をしてたらそれが人の名前になるんだよ」

「そーそれ! なんであんな格好してんの?」

「……いいか由比ヶ浜。お前が知らなくてもいい世界があるんだ。それがあれだ」

由比ヶ浜は純粹過ぎるのであまり変なものを見せたらいけない……らしい。

クラスの女子達によつてああいう変な物を由比ヶ浜に見せない、教えない、植え付けないの三原則を徹底しているので俺もそれに乗つかつておく。てかその制度作ったのは絶対三浦だろ。過保護過ぎやしません? 過保護のユミコなの?

「あいや承知致した! では改めて書いて持つて参るのでその時にまた頼む!」

「……それは別に奉仕部ではなく、比企谷君に直接頼んでもいいんじやないかしら?」

そう言うな雪ノ下。折角あまり依頼者の来ない部活なんだから。

ていうか依頼者がまだ二人しかいないからな? 困つてる人とかがいらないならいな

いでそれはいい事なんだけど。

「義輝。なんでまず八幡に直接行かなかつたの？」

「む、それなんだが……八幡の周り女子おなごが多いだろう？ 惧い……」

「まだかおり達のことビビつてたのか……。しつかりしろよ」

「ぐつ、弟おとうとぎみ君も手厳しい……」

「その呼び方止めろよ恥ずかしい。姉ちゃんのこと普通に呼べてるのに」

「……矯正が、な？」

「……なんかうちの姉がスマン」

材木座と刻の仲が深まつたのを確認したところで、今後の予定を決めていこう。とりあえず材木座の依頼は俺預かりとなり、作品が出来次第持つてくる流れとなつた。依頼が完遂されたら雪ノ下に報告し大まかな事務報告さえすれば後はなんでもいい、との事。よし決まつたな。じやあ解散だ帰れ材木——

「——ふつ！」

ビシツと弾く音が材木座の方から鳴る。

……コイツなんで木刀振り抜いてんだよ危ねえな。一瞬俺の心を読んで攻撃仕掛け

てきたのかと思つちやつたじゃんか。

「うわっ、ハエ!？」

由比ヶ浜が騒ぐので目線の先を追うと一応の原型が保たれている蠅の姿があつた。

まさか木刀で打つたの？ えつ、怖つ。

「す、すまぬ！ 既すでにで止めようと思つたのだが無理であつた……。うつかり普通に斬るところだつた」

「義輝、後で校舎裏集合」

「八幡助けて美咲殿に殺される」

蠅ぶつ叩いた木刀持つたまま近寄んな。てかうつかり斬るところだつたつて木刀で斬れるもんなの？ もし止めようとしなかつたら普通に蠅のこと真つ二つか爆散させられたつてこと？ こつわ。ミキーズブートキャンプの成果ならやつぱり俺受けなくていいわ。そこまで極めたいわけじやないし。

その後、解散の流れになつたが三木と材木座の姿は帰り際に無くなつていたことは言うまでもない。

デートがデートぽくないっていうのは言わないお約束。

休日。

それは学生だけではなく社会人でも持てる権利の一つである。国民の義務の一つ、労働から解放される唯一無二の日でもあり、言つてしまえば砂漠の中のオアシスのような存在なのだ。誰にも邪魔されず、自由で、なんというか救われてなきやあダメなんだ。独りで静かで豊かで……。なんのネタだつたか。このセリフの共感性が強すぎてタイトルとそここのシーンだけだけが抜け落ちてる。

それはともかく、俺が言いたいのは休日とは家でゴロゴロして、飯食つて、趣味だのなんだのをして、夜には寝る。これこそが休日の模範であるはずだ。決して、働く日などではないんだぞ母ちゃんと親父よ。ホントに最後顔合わせたのいつだよ。俺が遅くに起きるのがいけないのかもしけんがもつと休んでくれ。ん？ そしたらその分給料減るから小町の小遣い無くなる？ いや、それでもいいよ俺が減った小町の小遣い分出するから。

「比企谷一。そこの漫画とつてー」

「ほいよ」

俺のベッドの上を占拠している彼女、折本かおりに言われた通りのものを手渡す。
「おや？ 少し待てよ。先程の高説とは違うことをしているじゃないかと感じるがそれは違うぞ。コイツは邪魔じやないし寧ろ必要だ。
……うるせえいいんだよ。これ以上の議論はいらねえよ。

「さんきゅー」

「ていうかお前最近ウチに来すぎじゃねえの？」

「ダメ？」

「そんなわけ無い。いつでも来いな状態だけど」

「ひひつ、ならいいじゃーん」

やだ可愛いこの子。食べちゃいたいくらい。まあ手を出した事一回もないけどね。
なんならまだキスとかした覚えがない。
はいそこ、ヘタレだのなんだの言うんじやありません。確かに付き合ってから三年は経っている。

よく考えてみろ。俺と折本が他のカップルのようにめちゃくちゃイチャイチャ チュツチュしてゐる所を想像出来るか？ 俺には無理だ。そもそもそういうのが目的で付き合つてるわけじやないし、折本もそれ目的で付き合おうとしてくる男が嫌いだしな。

だから俺は折本が望まない事やして欲しくないことはしない。いや、してつて言われても出来る自信ないけど……。だからヘタレとか言うなよ。自覚してるからそれくらい！

「んー、つはあ。でもやつぱりずっと家の中にいるのもアタシらしくないし、ちょっと外行かない？」

「別に構わんが、サイクリングでもするのか？」

「それもいいけど、今日はまた違うことしよーよ」

「違うこと？ サイクリング以外で身体動かすのってバイトか体育くらいだろ」

「ウケる！ もつとあるつしょ色々」

そう言われても特に何も無い気が――。

と、言うわけで来ましたららぽ。

違うんだ。あまりにも他に行く場所がなくて結局ららぽになつたとかそんな理由じやないんだ。僕はそんな理由でここに来たんじゃない信じてくれよ！

「いつやー、やつぱり大きいよね～」

「だな。どうする？ 帰るか？」

「来てすぐ帰るとかまじウケないわ比企谷」

「冗談だから。冗談だからその眼差しを俺に向けるな」

中学時代の俺より酷いぞその目付き。軽く人を数人殺つてる目だよ。俺はそんな子に育てた覚えはありませんよ！ いやまあ俺のせいなのは認めるけど。だからと言つてこうなるとは思わないじゃん？ つていう認識がダメなのか。

するつもりはなかつたはあらゆる面で言えるけど、こつちはそのつもりがなくとも相手からしたら十分に影響があるんだから。雪ノ下と葉山、そして折本が俺にとつてはいい例になる。俺は将来に渡りこれが教訓になるだろう。

よし決めた。もう二度とそんな目をさせない、というかやり方を忘れるレベルにまで落とし込めるよう努力しよう。その力が俺に備わっているはずだ！ 頑張れ俺！

「——いいかしら折本さん。比企谷君は捻くれているからこそ輝いているのよ。そこを間違えてはいけないわ。個性として認めて、受け入れるのが大事なの」

「えー、でもアタシにはそーゆーの見せてくれないんだもん。中学の時に物事は素直に言うように頼んじやつてるし」

「あら、貴女はまだ気づいていないようだけれど彼は貴女といいる時でもたまに捻くれているわ。それに気づいたら貴女、更に比企谷くんにのめり込めるわ」

「雪ノ下さん彼女のアタシより比企谷のこと理解してゐるのウケるんだけど！」

どうしてこうなった。

おかしい、俺と折本でデートをしていたはずだ。それなのに何故カフェに入つて雪ノ下が折本と俺の話をし始めているんだ。止めろお前ら。無駄に俺の事で盛り上がるな。

「相変わらず人気だな比企谷」

「一部にはな。てか葉山、お前も止めろよ」

雪ノ下はお前の連れだろうが。何こつちの連れと会話に花を咲かせてるんだ。はよ連れてけ。

「いいじやないか。二人ともなんだかんだ楽しんでるみたいだしね」

そういう問題か？ まあそういう事にしどこう。

「ところで比企谷。かなり踏み入つた事を聞いてもいいかな？」

「……なんだよ」

砂糖マシマシにしたコーヒーを軽く飲みながら答える。うん、美味しい。たまに飲むマツ缶以外のコーヒーも悪くないな。一番はMAXコーヒーの一択だけども。「折本さんはどこまで進んでるんだい？」

「んごひゆつ」

「うわっ！ どうしたんだ比企谷」

どうしたもこうしたもあるかよこの野郎……。踏み入りすぎだわもうちょい引いた

話かと思つたのにそこ突いてくるか。

「……なんでもない。んで、どこまでつて何の話だよ」

「わかつてゐるくせにとぼけるのは良くなと思うぞ比企谷」
はいそうですよね。わかつてました。

「私も気になるわ折本さん。比企谷君とはどこまで進んでいるのかしら？」

「あ、あー。その話題はちょーっと待つて欲しいっていうかなんというか……」

「？ 齒切れが悪いわね。……まさか行けるところまで!?」

「ツ!? ゴホツ、ケホツ!」

「飲み物だ、飲め」

雪ノ下め……。まさかそこまで聞いてくるとは予想外だ。

そもそもこの二人結構グイグイ来るな。何？ 意外とこういう話お好きなの？

「……ふう、あのさあ雪ノ下さん。アタシと比企谷がそこまで行くと思う？」

「ごめんなさい。私が悪かつたわ」

謝罪が早すぎやしませんか雪ノ下さん。そして謝罪には何が含まれてる。違うぞ、俺

がヘタレだからとかそういうんじやないぞ！ 断じて！

嘘です結構そんな所ありますでもしようがないじやん！ なんなの、いつもイチャつ
いてるところ見せてるリア充！ 出来る気しないんだけど！

「そうか……。君はまだ経験が無いんだね……」

「何安心した顔してんだお前。マウント取れるポジションが見つけてよかつたってか？」

「そんなわけないだろ。俺だつて経験ないんだから。」「さいですか？」

「そういうえばコイツらなんで二人でここにいたんだ？　もしかしてデー、あれ、なんだろ？　身体が震えてきたよ？　これは……恐怖？」

得体の知れない感情から逃げるようにな葉山達と他愛もない話を少ししてから二人と別れる。

俺と折本はデートを再開させるが、その間俺と折本の間にすつゞーく気まずーい空気が漂う。

やつぱりさつきの話を思い出してるからだな。今までそういう事を考えてなかつた、いや考えようともしてなかつた。それで余計な思考がそつちに向きまくつて意識がいつてしまふ。

「…………」

帰り道も言葉が少なくなつております。あかん、このままだとこの空気に押されて天

照大神みたいに家に引きこもつちやう！

冗談はさておき、ホントにどうしてくれんのこの空氣。原因葉山だろ何とかしてくれよ葉山あ！

「…………」

「……折本」

「……何？」

「葉山の言つてた事、気にしてるか？」

馬鹿じやないの！ 沈黙が嫌だからつてその話題をここで振るのか俺え！
で、でも今出せる話題がこれしかないんだからしようがないじやん。うん、俺は悪く
ない。

「あー、うん、まー、ね？ そりやあ気にするところもあるよ。比企谷のこと下の名前で
すら呼べれるようになつてないし」

「それは俺もだ。なんやかんやでズルズル来ちまつたし」
「だよねウケる」

ウケるポイントがあつたようでよかつたよ。

「でもさ、やっぱりこんな感じでもアタシ達付き合つてるわけじやん？ 良く言えば健
全なお付き合いつてやつだし、悪く言うと」

「——別にいいだろ。悪く言わなくとも」

折本のネガティブな発言を遮るように言う。

何でもかんでも悪い方に考えを持つていくのは良くない。いや、少し言い過ぎた。正しくは全てを悪いように言い換えるのは良くない。

折本は、いや俺もか。俺達は今の状態が良いものか悪いものかわからなくなっているだけだ。

それでも、

「それでも、今の状態が良くないって言うなら待つててくれ。急に変わると俺も怖い」

これが俺の答えだ。もちろん折本が拒否するなら俺も覚悟を決めよう。

「……ん、そつか。だよねー！　いやー、やっぱそう言うと思つたし！　ウケる！」

「そりやよかつたよ」

折本かおりにあんな顔は似合わない。もしもそんな折本をそのままにしているようなら俺はめちゃくちゃにされるだろう。主に三木とかに。

……違う。そんなことは関係無い。俺は折本の彼氏なんだ。それで、折本のいつもの姿が好きなんだ。

だから、俺に出来る事ならそれを守りたい。それだけなんだ。

こんな事ですら誤魔化す程に捻くれていたのか俺は。ちょっと、いやかなり酷い。気

をつけておかないといけないな……。多分無理だらうけどな。

「それじゃ比企谷。また学校でね」

「おう、またな」

いつの間にか折本の家の前に着いてしまった。気まず過ぎて道とかその他もろもろが気にならなすぎてしまっていたらしい。家に着く前に解決できてよかつた、と思おう。

さて、俺も帰るとすつか。

「あ、ちょっと待つて」

「ん？ なん——」

ちゅっ、と可愛らし音がした。俺の頬から……ツ!?

「おっ、おま！」

「ひひっ、じゃーねー！」

折本を呼び止める前にさつさと家の中にはいられる。

……えつ、今俺キスされた？ 折本に？

自覺すると徐々に顔に熱が溜まっていくのがわかる。うわっ、ここまでなるの初めてか？

……帰ろ。もうこれ以上考えてたら遅くなる。

「.....」

「ふふふと自室のベッドに着替えもせずにダイブ。
そして枕を抱き寄せ蹲る。

.....。

「う、ううああああああああああああああ.....」

ヤバイヤバイヤバイ！ 何やつてんのアタシ！ あんな事やるつもり無かつたのに

！

じたばたとのたうち回る。疲れては休憩し、思い出して脚をばたつかせる。
くう、恥ずかしい。なんであんなことをしちやつたのさ.....。
もういいや。これに関してはまた別の日のアタシがどうにかしてる！

たまにラブコメの神様は余計な事をする（①）

「——貴女、うちの部員じゃないわよ？」

折本とのデートを終えた数日後、奉仕部部長こと雪ノ下雪乃是依頼者を連れてきた由比ヶ浜結衣にそう告げた。

えつ？ コイツ部員じやなかつたの？ てつきりもう入部してゐるもんだと思ってた。

雪ノ下に確認するようアイコンタクトをすると呆れるように首を縦に振る。うつそだろお前。テンプレ的にもう部員として認められてるものだと思ってたわ。

「私部員じやないの!?」

「ええ、だつて入部届け貰つてないもの」

「ああ、そういうえば貰つてないな」

なんということでしよう。由比ヶ浜は由比ヶ浜で入部の手続きすらせすこの部室にいたらしい。いや出せよ。部活したことないのかお前。

これに由比ヶ浜はノートを破つて可愛らしく「にゅうぶとどけ」と名前を書いて雪ノ下に渡し、晴れて奉仕部の部員となつた。

頼む由比ヶ浜、せめて入部届けくらい漢字で書いてくれ。うち一応学力的にはかなり

高い方なんだから。どれ位かつて言うと俺が数学と文系からみたら複雑な計算をする物理の問題を諦めて他の科目で点数取らないといけないレベル。なんか余裕そうに聞こえるつて？ ははっ、ミキーズブートキャンプの弟版を舐めるなよ？ 数学とかを諦めるかわりに他の教科を強化しまくつてたからな。どれくらいやるかつていうとあらゆる教材を初見で満点レベルにまで押し上げられるくらいにはやらされるぞ。

それでも取れない点数があるのは教師の好みがテストに反映されているからであつて、もし俺達生徒が点数を取れないのだとしたらそれは教師の問題の出し方が悪い。ただし、由比ヶ浜を除く。

「……確かに受け取つたわ。由比ヶ浜さん、貴女を奉仕部に歓迎するわ」
「結衣、とりあえず小学生の勉強から頑張ろう、な？」

「隼人くん酷いしー！」

葉山が正しい。少なくとも「入部届」は小学生でも習う漢字だ。

思つたのだが、由比ヶ浜はもしかして九九の七の段も言えない可能性が……。無いよね？ いやでも最近だとたまに言えてない人とかいるし。

近いうちに刻に頼んで勉強会開いてもらおう。

「あの、比企谷くん、だよね？」

由比ヶ浜に軽くひいていると、由比ヶ浜が連れてきた依頼者で俺と同じクラスの男子

生徒、戸塚彩加が話しかけてきた。

今知ったが、戸塚はこんなにも可愛らしい見た目と仕草をしているが、男だ。同じクラスでもいつも折本達とずっといたし、体育も基本材木座としか組んでなかつたから知らないなかつた。こらそこ、クラスメイトの事くらい覚えておけとか言わない。あまり話さないやつの名前とかだいたい覚えてないだろ？ つまりそういうことだ。

……いや、まあ性別間違えてたは流石に悪いと一瞬思つたけど、この容姿を見たら誰もが間違えるに決まつていて。新しい性別として認められてもいいくらい。

「ああ、すまん。折角来たのに放置は良くないな。とりあえずここに座つてくれ」

戸塚用に椅子を用意してのんびりしてもらう。まつたく、由比ヶ浜には困つたものだなあ。自分で連れてきておいてほつたらかすなんてな。まあそれ以前の問題ではあつたが。

「ごめんなさい戸塚君。それで依頼とは何かしら？」

「あ、うん。実は——」

次の日の昼休み、葉山を除く俺達奉仕部と折本達がテニスコートに集まつていた。

というのも、戸塚からの依頼はテニス部を強くして欲しい、との事だつた。

しかしそれは奉仕部の領分では無いし、そもそもそんな事同じ学生の俺達に頼むよう

なことでは無い。

なので妥協案として戸塚のみを強化し、他の部員達のカンフル剤になる事で戸塚も納得した。

ちなみにその妥協案を導き出したきっかけを作ったのは由比ヶ浜だ。あれは怖かつた。本当なら受けようともしなかつた雪ノ下に対して挑発とも取れる発言をしてこの状況に仕立てあげたのだ。結果オーライもいいところだけどな。怪我の功名ともいう。ついでに奉仕部メンバーと三木ブラザーズを抜いたいつのメンツが戸塚と一緒にトレーニングする事になった。一人でやるよりかはモチベーションが上がつていいらしい。

「それでは戸塚君の強化訓練を始めるわ。安心なさい、死ぬ一歩手前を常に攻めるだけよ。死にはしないわ」

「死にはしないけど死ぬほど苦しいってなんだよ。新手の拷問だろ」「平気よ。皆でやれば怖くないわ」

「ふつふつふ！ その程度の拷問で我がどうこうなると思うなよ！ 一時期三木殿に死

ぬまでしばかれたのだ……うつ、頭が……」「おい姉貴。材木座に何を施した」

「つーん」

本当に材木座の身に何があつたのか凄い気になる。

「えつと、雪ノ下さん？ それって私達もやらないといけないかな？」

おずおずと仲町さんが聞く。いや、さすがに女子もそんなキツいメニューこなせとか鬼畜じやないか。

雪ノ下もそう思つたのか、筋肉痛にならないギリギリのメニューを作り提示していった。そして上手いこと口車に乗せ、一緒にトレーニングする事になつた。由比ヶ浜がめちゃくちややる気に満ちていたが、何言われたんだ？

ちなみに折本だけは戸塚と同じトレーニングをするようだ。日頃趣味のサイクリングで体力があるので出来なくは無さそうだが……。

「ペースが遅れてるわ。常に一定のペースを意識して走りなさい。全てのスポーツに言えるけれど、序盤に飛ばしすぎて終盤バテて動けなくなるなんていうのは愚かしいわ」

「う、うん！」

「比企谷君もよ。もつと姿勢を起こしなさい。肺が潰れて息がしにくくなるし、足を地面につく時に余計な体力を使うわ。短距離走やシャトルランでやるならいいけれど、今は長距離走をしているの。まだメニューが残つてゐるのだからもつと効率良く動きなさい。すぐにバテても知らないわよ」

「お、おう」

「ざい、さいつ……？ 財津君は流石ね。死ぬまで扱かれてただけあるわ」

「そろそろ我の名前覚えぬか！ 我の名は材木座義輝である！」

男子勢と折本は雪ノ下に後ろから追いかけられながら走り続けている。つくづく思うが、折本の趣味に付き合つてよかつた。あれが無かつたら最初から運動部のメニューに付いていくとか無理に決まつてゐるからな。

「ねー比企谷。これいつまでやるの？」

「確か、コート外を十周、だつたか。まあ、昼休みだから、そこまで長くやれんだろ」
息たえだえで話すのがキツいのに対して折本はピンピンしている。俺より体力のある彼女。とんでもねえな。

俺ももつと鍛えた方がいいのかしら？ いやでも最近男より男らしい女とか、そんな感じの漫画も需要あるしそれもいいかも知れないわけないわけない。俺の場合は誰得な状態になつてしまふ。しばらくしつかり鍛えておくか。

「……しかし刻と三木はどこ行つた。さすがに顔くらい出すと思つたけど姿が見えねえな」

「雪ノ下さんに見つかつたらやらされる決まつてるつて言つてしまふららしいよ。どんだけやりたくないんだしウケる！」

「こんな時でもウケるお前すげえよ……」

若干疲れててもう話したくねえぞ。十周だからって甘くみてたら痛い目見るぞ。死ぬギリギリを攻められてるんだから余裕綽々としてられるわけが無い。しかもこれ終わつたら筋トレとかあるんだぞ。明日動けれたらいいな……。

「さあ、覚悟なさい。トレーニングは始まつたばかりよ。一日二日だけで終わらせたりなんかせず、長期間で行うものだと思っておきなさい」

……誰か助けてー！

たまにラブコメの神様は余計な事をする～②～

戸塚からテニスを上達させて欲しいという依頼が来てからだいたい一週間が経過した。

俺達は平日の昼休みは学校にあるテニスコートを借り、戸塚の練習に付き合っている。

ちなみに、俺と材木座は、戸塚と同じ基礎体力作りのトレーニングメニューをこなしている。

俺としても体力作りに丁度良かつたし、材木座も最近執筆に夢中で身体を動かして無くて腹に肉が付いていて危ないところだつた、と言っていたので互いに戸塚に合わせつつトレーニングの日々を送ることにした。

ところで危ないところだつたってどういう事だ、と聞いたら「思い出したくない」とガチの涙目になつて震えていたのでこれ以上の追求は止めた。……材木座にはもう少し優しく接しようかな。

「わっ」

「彩ちゃん！ 大丈夫？」

基礎体力作りのトレーニングを終わらせ、次はギリギリのコースを相手コートに打ち返す練習をしていた。

すると疲労からか戸塚が脚をもつれさせて転んでしまう。

おのれ雪ノ下、戸塚の膝小僧に擦り傷が出来たじゃねーか！ どうしてくれるんだ！ と心の中で言っておく。この一週間で物凄く戸塚に対して甘くなつて自覚を感じており、折本にもそれは無いわーと言われたのだ。口に出したら何が起きるかわからん。中学時代も男に告られた時もかなり怒つてたしな。告白してきた相手に。

だから今度は戸塚に行くかもしれないのに抑えておこう。

「へ、平気だよ。まだやれる」

「……まだ続けるのね？」

「うん、せっかく練習に付き合ってくれてるんだから、頑張らないと」

そう言つて戸塚は立ち上がるが膝を痛めているため立つのに苦労している。

頑張ることはいい事だが、さすがに怪我した上で更にやろうとするのはいかんだろ。せめて傷口の手当が優先だ。

それは雪ノ下も同意見らしく、一先ず休憩という名目で戸塚を休める。その間に雪ノ下は一人、スタコラと保健室に向かう。若干素直になれず素直に治療箱を持つてくるとは言えないまま向かっていったから戸塚が自分に何か非があつたのかと落ち込んでし

まつた。

しかしそこはさすが由比ヶ浜。すぐさま戸塚に対してフォローしたのでこの場はそれで収まつた。

つくづくこの二人はいいコンビだと思う。互いが互いに出来ない部分を補つていてし。

あれ？ 僕必要なくね？

「あー、テニスじゃーん。うちちらも遊んでいい？」

雪ノ下が戻つてくる間に練習であちこちに散つたテニスボールを拾つていると、葉山率いる陽キヤ集団が現れた。

おいこら葉山。部活動をサボりやがつて。俺にもやらせろ。

そんな視線をぶつけると肩を竦めて苦笑いをする。ちつ、イケメンはなんでも映えるなあ！ 僕もそれくらい出来るようになつて……いや違うな。俺はそういうのは向いてない。

「三浦さん。僕たちは別に遊んでるわけじや無いんだけど」

「えー？ ……つて結衣？ なんであんた最近昼休み居ないつて思つたらこんなとこにいたん？」

「あつ、えつと……ごめんね？ 先週から奉仕部の依頼で彩ちゃんの練習にずっと付

き合つてたんだ」

「へー。つてそれなら隼人も手伝わないとじやない？ 奉仕部と掛け持ちしてるつて聞いたけど？」

ここで三浦の標的が変更。葉山よ、サボつてたツケだ。物凄い勢いで責められてしまえ。

「そういえば言つてなかつたな。今回の件は俺にやれる事はほとんど無いから雪ノ下さんにおまかせしておいたんだ。比企谷は聞いてたよな？」

「いや知らん。今初めて聞いた」

葉山のやつ、クラスメイトの前だと雪ノ下のこと苗字で呼ぶんだな。なんか使い分けないといけない時もあるか？ やっぱり付き合つてるのを隠して……おっと、また悪寒が……。

「……ま、いーし。で、テニスやつちやダメなん？」

「う、うん。遊びじゃなくて部活動の一環として先生に許可もらつてやつてるから……」

葉山のせいで滲み出る威圧のせいで戸塚が押され気味になつたが、しつかり断る。あーもうよく出来たな戸塚あ！ 今すぐ褒めてあげたい！ やつたら白い目で見られること必至だからやらなければ！ やつた後折本がさらに怖いからやらないけど！ 「ふーん、ならあーしも手伝う？」

「えつ？」

「あーしなら色々教えられるし？ ねえいいっしょ？」

結論から言つてそれは出来ない。三浦は部外者で申請を通していないため使つてて見つかつた瞬間アウトだ。

しかし経験者の話も欲しい。でも三浦つてそんな凄いのか？ 縦ロール的にテニスが上手くともなんも違和感が無いので無下に……普通に出来るわ。別に雪ノ下一人で十分だし。というわけでお帰りください。いや、それ言わなくても葉山が連れて帰つてくれ。

「ごめん優美子。彩ちゃんが怪我しちやつてこれ以上練習は出来そうにないんだ」「そーなん？ ……ちよい比企谷借りていい？」

えつ？ 何故に俺？

「うん！ いいよー！」

おい由比ヶ浜。勝手に俺をやり取りに使うな。

「ありがと。ほら、行くよ比企谷」

あつ、ちよつ、引っ張らないでくださいミウラ＝サン！ 助けろ葉山！

「すまない、今回は優美子たつての願いだからね」

ブルータス、お前もか！

「——勝負つしょ雪ノ下さん」

「……はい？」

次の日の昼休み、三浦と雪ノ下のテニス対決が勃発することになった。
……何故こうなつた。

たまにラブコメの神様は余計な事をする～終～

昼休みのテニスコート。そこで二人の女学生のよる長いラリーが続く。

現在、戸塚の練習を俺がメインでしつつ隣のコートで審判を葉山、雪ノ下と三浦の二人がテニスで試合をしている。

何故こうなったか？ 昨日拉致られた時にこの状況を作ってくれって三浦と葉山に依頼されたからだ。理由は知らん。教えて貰えなかつた。

しかしその代わり面倒臭い先生からの許可は自分達で無理矢理勝ち取つたから何も言わない聞かないの方向でいこう。奉仕部として依頼を受ける、そんだけだ。

「凄いねー二人とも。最初は雪ノ下さんが勝つてたと思ったのに」

「そうだな。縦口ールなだけあるわ」

「縦口ールって！ ウケる！」

ボール出しをしながら折本は気持ち良く笑う。最近昼休みは俺もトレーニングしてから折本と話すのは久しぶりな気がするな。

「あれ、ゆるふわウエーブだけどね。それに優美子だつて中学の時女テニで県選抜だし」「ほー……それを相手にする雪ノ下も雪ノ下でやべえな。もう雪ノ下雪乃つて書いて完

璧超人にしようぜ」

「確かにあつてそうだけど、ゆきのんつて実は方向音痴だからそうでも無いよ?」

雪ノ下雪乃が、方向音痴。

なんだそのワードは。

方向音痴つてアレだろ? 地図とか見ても違う道に行つちやうアレだろ?

そうか、流石に神様も一人の人間にあれよこれよと才を入れ過ぎないようになしたか。

「つて、いやいやいやいや。えつ、は? マジ?」

「うん、前にお出かけした時もヤバかつたんだから。ケータイ持つててよかつたつてあの時ほど思つたことないよ」

「なんか意外だね。てか比企谷。これつてもしかしてギャップ萌えの一つだつたりする?」

「そうだと言いたいところだが果たしてどうだらうか。萌えるのは人によつて違つてくるし、少なくとも俺はそれで萌えを感じたりはしないのだが。

「それにしてもなんでいきなりこんな事になつてるんだろうね、比企谷?」

「あたかも俺が全てを知り尽くしているのを理解しながらそういう聞き方をするのはズルいぞ。まあ知つてるから何も言えないけど」

「昨日拉致られておいて何言つてんの? 全員知つてるつての」

昨日のあれが拉致だつてわかつてたんなら助けてくれてもよかつたのよ？ 折本さん？

そんなこんなでしばらくすると試合が終わつたのか三人がこちらにやつてきた。
その中でも雪ノ下は息を乱している。それに対して三浦はまだまだ余裕がありそうだ。

「あ……、まつたく、なぜ私は三浦さんと試合を……」

「しょ、しょーがないっしょ！ あーしも不本意などこがあるんだから！」

なーにがしようがないのか小一時間程晒しあげたい。昨日の出来事そのままここで
大暴露パーティーをしてやろうか？ 由比ヶ浜はちょっと席を外してもらつて。

「まあいいわ。それで、結局貴方は私に何をしたかったのかしら？ 突然勝負仕掛け
くるなんて。それに比企谷くんにも協力を仰いでいるわね？ 狡いわね、貴方達。許さ
ないわ、隼人くん」

「もしかして全ての罪を俺に擦り付けられたのか？ 酷いな、ただこの状態を作つただ
けなのに」

「元凶以外の何物でもないじやない。それで、目的は何？」

「う、えつと……」

「三浦は由比ヶ浜と戸塚の練習を付き合いたいんだよ。ず一つとこつちの手伝いで由

比ヶ浜をぼはあつ!?

「だ、黙つてろし！ 勝手に言うなし！」

み、みぞおちがつ！ 三浦の肘鉄が綺麗に決まつた！

「三浦さん？」

ぞわつと辺り一帯に冷たい空気が流れる。

あ、あの雪ノ下さん？ 如何なされたのですかそのように殺意の波動を顕あらわにして。

「ひつ」

ちよつとご覧なさいよ。あの三浦が捕食者に狙われる小動物のように怯えて震えておるわ。

そんなこと知つたことではないと言わんばかりに雪ノ下はくいと「体育館裏に来いや」と言わんばかりのジエスチャーを交えながらこう告げた。

「ちよつとお話、しましよう？」

葉山に助けを求める三浦の声が遠ざかっていく。が、当の本人は薄い笑みを浮かべながら手を振っていた。

……雪ノ下、怒りすぎだろ。本気でやられたわけじやなくて入つたところが悪すぎて痛がつてただけなのに。

「まあいいか。練習するか戸塚」

「う、うん。なんかすごかつたね。でも雪ノ下ってすごいね。誰かのためにあんなに怒れるなんて」

「戸塚、雪乃ちゃんの場合は少し強すぎる質があるからあまり参考にしない方がいいよ」「さすがにあそこまでは無理だけど、僕もあれくらい」

「安心しろ戸塚。その前に俺がどうにかしてやるからな。お前はお前のままでいてくれ」

「比企谷くん……」

「比企谷……」

「おい、二人してなんでそんな目で俺を見るんだ。まるで『そこ』は折本に言えよ」と言わんばかりではないか。いや、実際そんな視線なんだろうけど、多分俺より折本の方が強いからなあ。言うに言えない。

もちろん、アイツに何かあれば俺はあらゆる手段を用いて折本に危害を加えた奴を処断するつもりではある。

「さて、比企谷の残念さの弄りはこれくらいにして練習しようか。それとも俺と比企谷で試合してみるか?」

「やめとく。それより雪ノ下はなんであんなテニス出来るんだ? 由比ヶ浜も言つてただろ。県選抜だったんだろ、三浦」

「ん？　ああ、彼女は負けず嫌いだからね。負けは認めるけど負けることを許さないって感じかな」

「あ、わかる！　ゆきのんとジャン負けで飲み物買いに行くのやろうとしたら一回拒絶されたけど、『自信ないんだ？』って言つたら乗つてくれて！」

「結衣……お前……」

「それでゆきのんが勝つたら無言でガツツポーズしてて！　あれ可愛かつたなー！」

めっちゃいい顔で言つてるけど、雪ノ下に聞かれたら怖いな。

「ま、まあそんな事でだいたいの事なら雪乃ちゃんに出来ないことはないよ」

「ほーん、それで県選抜の三浦とテニスでギリギリで勝つのか？」

「雪乃ちゃんは三日でなんでも出来るからね。でもその分長続きしないからスタミナが無くてね。勝ったのも負けず嫌いが出てきて無理矢理身体を動かしてたものさ。それでも今の体型を維持するためのランニングだけはしてるからそのお陰である程度粘れたかな？」

「負けず嫌いが無かつたら負けてたつてわけか」

「そうなるね」

そんな会話をしながら戸塚の練習をしばらくした後、スッキリした顔の雪ノ下が暗

い顔をした三浦が連れてこられ、しばらくしてその日の練習は終わつた。

……のだが、着替えから中々戻つてこない折本に痺れを切らして折本がいるであろう奉仕部に向かつた。

「おい折本。そろそろ行かないと授業に遅れる——」

「——へつ？」

そこで見たのは折本のお着替え姿。

出るところはしつかりあるのにウエストは締まつていて。いいプロポーションをしていると誰に対しても言えるだろう。

しばらく時間を忘れその姿に目を奪われているといち早く正気に戻つた折本が言った。

「ひ、比企谷の変態！ まだそういうの早いでしょ！」

なぜ持つているのかわからぬがテニスのラケットがガスつと頭にクリーンヒットした。

その衝撃に耐えきれず俺はぐふつと声を漏らし肢体を廊下に付ける。

それと同時に急いで扉を閉めに来た折本を最後に、俺は気を失つた。

……なんだよラブコメの神様。たまにはやる時はやるじゃないか。

EXステージ・GWの一時（ひととき）

ゴールデンウイーク。

新生活等の新しいことが起き続ける四月の疲れをとるために与えられる素晴らしい日々……と、言いたいところだ。

実際はその長い休みのせいで生活バランスを崩してしまい、心を病ませてしまう。例えば、学校や会社に行きたくない、集中が出来ない、眠れない等々あるがもつと知りたい人はググツてくれ。

「ひい～まあ～だあ～」

「突然来てベッドを占拠して何を言つてんだ。三木」

「すまない八幡。うちのバカ姉貴の思いつきで突貫しに来てしまい」

「刻、頼むから連れて帰ってくれ。折本がそろそろ来るんだよ」

朝早くに我が家に来た三木ブラザーズに睨みを効かせる。朝九時に友達の家に遊びに来るとか小学生くらいじやねえのか……。俺その頃友達一人もいなかつたからどうかどうか知らんけど。

「いーじやないか～。別に今日かおりと大人の階段登るわけでも無し」

「……そういえばお前達はどこまで進んでいるんだ？　俺の知る限りだと手を繋ぐままでなのだが……。付き合つてから何年経つた」

「……そろそろ三年、だな。さすがにそれだけ時間あれば手を繋ぐ以上は——と、そのタイミングで言葉が詰まってしまう。

ぐつ、おお……！　なんだこれ！　顔が熱いし動悸がする……。

そして俺の反応から察知したのか三木がベッドから床に座る俺たちの近くに迫る。

「さて、八幡とかおりの進捗について聞くために絶対帰れなくなりました。刻もそれでいいよね？　ねつ？」

「……スマン比企谷」

「ノーコメントだ。いいから帰れよ！　なんも話さねえからな！」

「話すつて、何が？」

ばつ、と全員で声が聞こえた扉の方に体を向けるとそこには件の人物、折本かおりが立っていた。

「折本、どうやつて入つて……？」

「えつ、こまつちゃんに入れてもらつたけど。それでー？　何の話〜？」

「ちょうどよかつた。かおりつて八幡とどこまで進んだかって話してたんだよ」

「……」

「それでどこまで進んだんだい？ ほれほれ、お姉さんに教えてみなさいな！」
「…………」

「あれ、かおり？ ……返事がないただのしかばねのようだ」
「いや、本当に固まってるぞ。瞬きすらしてねえ。

三木が折本の顔にひらひらと手を振つても全然反応が無い。

「…………まさか八幡、お前たちまさか最後まで、その、したのか？」

「「ぶふつ！」」

「うわ汚つ！ エフ、本当かかお前たち!?」

「ちちち違うつてば！ 頬にキスしただけだつてば！」

「そそそそうだぞ！ 決して最後までとか、してないからな！」

恐らくこの時、俺は盛大に顔を真っ赤にさせていたんだろう。

そしてさらに折本が口を滑らせていることに気付かずそのままわちやわちやとどう

でもいい説明をし続けていると、何故か呆れたように二人してため息をつかれる。

「かおり、まさか本当にほっぺにちゅーしだけなの？」

「八幡、まさか本当に頬にキスされただけなのか？」

「そ、そうだけど」

「まあ、そうだな」

その返しが決定打になつたのか今度は更に深く、それも長くタメを作つた上でのため息を二人してつく。

二人のその仕草は完全にシンクロしており、さすが双子だなという感想が出ました。でも酷くないか？ そんなに呆れられるような事でもないだろうに。頬にとはいえキスだぞ？ かなり進歩してると思うのだが……。

「いいかかおり、八幡。お前たちのそれはもはや小学生レベル、もしくはちょっと進んでる幼稚園生だ」

「なつ」

「刻の言う通り。二人はマウストウーマウスすら済ませられてないお子ちやま」「マツ……！」

マウストウーマウス……だと!? それってあれだろ？ 口と口をくつつけたり粘液交換したりするあれの事だろ？

……無理っ！ たぶんした瞬間心臓止まる！ いや、でもしたい気もしなくもない。でもあんまりガツツリ行くと引かれるだろうし……。なんかで読んだぞ。そういうことすると異性にキモがられるつて。それは嫌だしなあ。

「ささつ、ちょっと一回ちゅつといつちやいなよYOHたち！ 大丈夫、先つちよだけでいいから！」

「姉さん、あまり煽るな。元から出来ないものが更に出来なくなる」

フォローするならちゃんとしてくれ、刻。その通りだから何も言い返せないけど……。

ようやく少し余裕が出来始めたので俺の左隣りに来た折本の方をちらつと見る。そこにはこちらをじっと見つめる折本の姿。

バチツ、と目線があう。次に視線が下に行つて唇へ。

「つ！」

いかんいかん。また意識がそつちに向いてる。落ち着け俺。平常心だ。

「さて、そろそろ帰るぞ姉貴。聞くもの聞いたしな」

「そうだね。おじやま虫は早々に帰ろつか。ほんじやまたバイビー」

マジで何しに来たんだあの二人は。まあどうせ三木の思い付きの行動だろうとは思うけども。

でも、でもさ？ どうしてくれんのこの状態。お互い気まず過ぎて顔見れないんだが

！

「あ、あのさ比企谷」

「お、おう？ なんでしゅか」

ダメだ。どもる、声が裏返る、噛むの三連続コンボ決めたわ。もうどう足搔いても動

揺してるのが折本に伝わってますね。タスケテダレカー！

折本も動搖しまくってるのかいつものタイミングならウケてくれるはずなのだがそれが来ない。

「比企谷もあれだよね。キスとか、したいって思つたりする？」

「……したくない、と言つたら嘘になる。正直、したいと思つてはいる」

「！ そ、そつか。ひひつ、ウケる」

「……折本」

そつと折本の右肩に手を乗せる。

その際ピクつと折本の身体が震える。

折本の身体が強ばつているのがわかる。

顔どころか耳まで赤く染めている。

「……いや、ダメだな」

「へ？」

折本から半歩離れ、そう告げる。

いやだつて、今やつたら三木たちの思う壺だし。それにそんながつちがちに緊張しい状態になつてるやつに無理矢理奪うつてのも……。

「…………ちょい待ち」

「へ、ああ!?」

強引に襟を引っ張られバランスを崩す。そしてすぐその後に感じる左頬への柔らかい感触。

……まつ、またコイツは！

「おつ、おま！　にやにお……つ」

折本に視線を捉えると、それはもうジョヨヨの如く背面にゴゴゴと効果音が流れそうな程にオーラを出して いる姿にたじろぐ。

あ、これオラオラされるやつですねわかります。えつ、でもなんで？　俺なんかした
？　何もしてなくない？

……もしかして、何もしなかつたからこうなった？

「比企谷さあ、ヘタレにも程があるでしょ」

「えつ、いやだつてお前、あまり好ましく思つてなかつたろそういう事」「いつまでの話してんの。ウケないよ、それは」

いつまでの、ということは今は全く違うという風にも取れる。
実際いつまでがNGでいつからOKになつたのかはわからない。
しかし、だ。

ここまで言われ、やられて何も出来ませんじや折本に呆れられる。それに恥をかかせ

てしまう。

「折本」

「……ん」

覚悟は決めた。あとはやるだけだ。大丈夫、俺ならやれる。出来る。
あと数センチ、あとそれだけ近づけるだけ。そんな時だつた。

——きい。

と、扉の方から音が響く。

ほぼ条件反射で折本と共にそちらを見るとそこには妹と、帰ったはずの三木姉弟が部屋を、というより俺たちをの行為を覗き込んでいた。

「「あっ、気にせずどうぞ」「」

「「出来るかアアア!!!」

折本と付き合つてから史上とも言えるほどに良い雰囲気は、第三者の介入により終わつた。

この後三人を追いやつたものの、互いに意識しすぎて部屋でソワソワしてたらその日が終わつてしまつた、というのはまた別の話である。

やはり俺の職場見学の希望調査票はまちがつている。

ゴールデンウイークも過ぎて、じわじわと暑くなつてくる今日この頃。

周りの喧騒も相まってさらに暑さを感じる。もつとサボれよ。俺みたいに。暑いだけじや松岡修造みたいになるぞ。

そんな事はさておき、現在俺の席を中心にして昼メシ早々に終わらせた俺達の目の前に同じ用紙が一枚ずつある。

俺と刻以外は頭を抱えてそのプリント、職場見学の希望調査票とにらめっこ中だ。

「う～……めんどくさい……」

「適当にぱぱっと書けばいいものを……」

「うちの弟がそんな事を許すはずもなく……」

「将来役に立つ事だからな。出来れば今後の参考にしておきたいだろう？」

「まあそうだな。だから俺はしつかり自宅一筋に——」

「——八幡？」

「じゃなくて、色んなどこを見て考えてやつてるぞ、うん。八幡、ちゃんとしてる」
怖いよ。めっちゃ怖い。何が怖いって刻の目がもう闇に染つてるもん。出来れば目

を合わせないで起きたいレベル。

てか俺ホントに自宅つて書いてるから後で直しどう。見つかったら刻に【自主規制】される。

「比企谷、比企谷の見せて。一緒に場所行こうよ」

「ダメだ。刻に殺されるぞ、俺が」

「そんな倒置法で強調しなくてもいいだろう。というか比企谷はかおりにだけだったら見せてもいいんじやないかとは少し思ってはいる」

「ん？ そうなのか？」

「正直、全員同じ場所でもいいと思つてはいる。しかし、今の時期に視野を広く持つのも大事だと思つてはいる。せつかくの機会だから自分の興味がある所に行つた方が自分の為になるから、出来れば今は色々見て欲しいんだよ」

「刻……私はいい弟を——」

「——つてこんな事言つておけば姉貴とその他も多少やつてくれるだろうつて平塚先生が言つてた」

「おのれおのれおのれえ！ 雜種風情オレが我の弟に余計な事を！」

「ヘタに英雄王するな姉貴」

「今のはかなり似てた……いやちよつと待て。いつから三木の喉に男が住んでたんだ。

もしかしてスネ夫も出来るんじゃないか？
とまあ、そんな感じで折本が抱腹絶倒しながら行先を決めかねているとチャイムが鳴
り響いた。

「あとは放課後だな」

そう言つて刻の声で皆一斉に参考資料から目を離す。

「疲れた～」

「午後の授業寝そう……」

「ほら美咲。早く教室に戻るよ」

「うえ～……めんどくさい……。運んで千佳～」

「刻」

「おう」

「おつけーばっかり今すぐ戻ろう」

そそくさと自分のクラスに戻る三木の後を追うように刻と仲町さんが帰っていく。

残された折本は俺の隣の席なのでそのまま折本と話す事にする。

途中調査票を見せろと言われた時はめちゃくちや焦つたが、これをどうにか切り抜け
て午後の授業が始まるチャイムによつて命拾いする事になつた。

その後、調査票の希望欄を書き直すのを忘れたまま提出したせいで平塚先生に呼びつけられた。

ヒールを机の上にガンツて音立てながら乗つけてきた時は「あつ、俺死んだな」って思いました。まる。

葉山隼人は比企谷八幡に頼る。

「おーす……」

平塚先生にこつてりと絞られた後、ボロボロのまま部室へと赴いた。

今日はバイトも無いので家でゴロゴロとのんびりしたいところだが平塚先生との契約でバイトが無い日は参加することになってるから渋々だ。決して平塚先生に二度も学校に提出するものをふざけて書いた事に対する罰則とかそんなんじやないぞ? ホントホント。平塚先生がそんな事をするわけないじゃないですかー。

「あら比企谷君。遅かったわね」

「ヒツキーおそーい！」

「悪い。てかヒツキー言うな」

いつの間にか由比ヶ浜にヒツキーとかいうあだ名を付けられてるけど俺、認めてないからね?

ヒツキーってなんか引きこもりみたいじやん? 引きこもりたい気持ちは凄いあるけど折本達といると家に引きこもつていられないんだよ。名が体を表してないぞ。つけるならもつと相応しいあだ名を付ける。いや、いらんけども。

「そうね、私ももう少しマシなあだ名の方が好ましいと思うわ」

「えー良くない？ ヒツキー。語呂とかかなりいいと思うけど」

「いいえ由比ヶ浜さん。私のもそうだけれど、特に比企谷君のはもう少し良いものがあるはずよ。もつと頑張って」

「えー？ ゆきのんもかわいいじやん。ていうかゆきのん、ヒツキーに対してガチ勢過ぎるでしょ……なんでかおりんよりもそんなにすごいの？」

「今までの積み重ねよ。舐めないでもらえるかしら？」

いや、百歩譲つてその理論を認めて俺が積んだの一つだけだろ。そつからは雪ノ下が一人でありますまいブロックを積み上げてジエンガしてたんだろ。

……あれ？ よくよく考えたら雪ノ下って実はヤバくね？ 何がつてこじらせ具合が。

「まあそこら辺はどうでもいいわ。で？ 依頼は無いよな。無いんだよな？」

「どれだけやりたくないんだ。まあ無いにこした事は無いけどさ」

「おう葉山。そうか、無いか。よかつた。ホントによかつた……」

「……どれだけ絞られてたんだ」

聞くな。俺はもう疲れてるんだ。思い出しだけで更に疲れるんだよ。これ以上疲れさせるな。

「てか折本達はどこ行つた？ 今日はここに来てるはずなんだが」

「折本さんならバイトの助つ人に呼ばれて、他の人達もそれに付いて行つたよ」「はつ？ 助つ人？ ……ホントだ。連絡あつたわ」

えー。マジか。でも俺にはバイト先からの連絡来てないから俺は行かなくていいのか。いや、後で連絡して合流できるならするか。

「まあいいや。っしょつと」

もはやお馴染みとなつた部室での定位置にある席に、ちょうど雪ノ下の向かい側に座る。

妹から借りてきた少女マンガを取り出してのんびり読もうとすると、突如由比ヶ浜と葉山の携帯が鳴り響く。

おいこらお前等。一応学校の中なんだからちゃんとマナーモードにしひけよ。

「あ、私だー……うわー」

「…………」

由比ヶ浜はキラキラゴテゴテした携帯を、葉山は普通の携帯を取りだした。

おかしい。同じ携帯なのに何でこうも違うものに見えるのだろうか。不思議だ。

「どうかしたの？」

由比ヶ浜達の様子に気づいた雪ノ下が本から目を離さずに言葉だけを投げかける。

「いやー、最近変なメールが多くてさー」

「ほーん」

「比企谷には来てないのか?」

「いや、来てないけど」

俺のスマホには基本アマ○ンくらいしかメール来ないからな。

折本達ともL○NEでやり取りするからメールを使う機会がほとんど無い。たまに平塚先生から業務連絡が来たりするがホントにそれくらいだな使ってるの。

「そうか……いや、それならそれでいいんだ」

「あーもう、携帯いじるのも嫌になつた……暇だなあ」

「それなら勉強しましよう由比ヶ浜さん。そろそろ中間試験なのだから少しは勉強した方がいいわ」

由比ヶ浜がめんどくさいと嘆き、雪ノ下が勉強する事の有意義を切に説いていると葉山が俺に近づいて耳打ちをしてきた。

「頼む比企谷。手を貸してくれないか」

「……なんでだよ。お前の頼みとか厄介事の匂いしかしないから嫌なんだけど。あと近

いから離れろイケメン」

「理由は後で話す。頼む」

「…………後でコーヒー奢れ」

そんなに真っ直ぐな目で見られたらこっちが折れるしか無いじゃねえか。これだからリア充の頂点は。

その答えに葉山はいい顔でありがとう、と一言だけ俺に残して黒板側にある自分の定位に戻る。

うちのクラスの頂点、葉山隼人の頼み事とか絶対厄介事なんだろうなあ、と思いつつ少女マンガに目を落とす。

「じゃーゆきのんが勉強教えて！ そしたら私頑張れる気がする！」

「はあ、仕方無いわね。今回だけよ？」

雪ノ下と由比ヶ浜の話し合いも終わり、静寂が訪れる。

しばらくそんな状態が続き、下校を告げるチャイムが鳴り響いたので俺と葉山、雪ノ下と由比ヶ浜のペアで別れる。

葉山が雪ノ下達に挨拶をしてる間に少し先に廊下を歩き始め、後から葉山が追いかけてくる。

「さつきの話の続き、していいかな？」

「ああ、それはまた後でだ。とりあえず行くぞ」「え、行くつてどこに？」

足を止めて後ろにいる葉山に顔を向ける。

「俺のバイト先だ。そこでコーヒー飲みながら聞いてやる」

「バイト先……。ああ、あの喫茶店か」

「おいコラ、なんでお前が知ってるんだよ」

「わかった。じゃあ行こうか」

「無視ですかそうですか」

近いうちに雪ノ下を含めてコイツ等と色々お話しないといけないかもしねいな、と思つたそんな日になつた。

三木刻は葉山隼人の考え方を否定する。

「いらっしゃいませー……って比企谷？ と隼人くんじやんおいつすー」

「おう折本。お疲れさん」

「やあ。お疲れ様」

葉山からの依頼を聞くため、コーヒーをたかる為に俺と折本のバイト先の静かな喫茶店に来た。向かい入れてくれるのはバイト中の折本。学校の制服では無く、バイト先の制服に身を包んでいる。

なんで俺達がここで働いているか。もうわかつてるとと思うが、この静けさと制服の可愛さだ。

俺は騒がしいところが嫌だ。折本は特にこれと言つた要望は無いが、あまり地味な制服で働くのもなあ……。と二人してこの店でボヤいているところにこの店の店長がやつてきて「うちで働くかないか？」と誘つてくれたからだ。

確かに俺の願望は叶つているが、折本は制服がちょっと……って言つてたけど何故か特注で作ってくれると言われ秒速で首を縦に振り抜いた。俺達の欲をこんなに取り入れている好条件のバイトとか無いだろ。

それで折本好みの制服を作つてもらつたわけなんだが、最初の頃は見慣れなさ過ぎて直視する事が出来なかつた。

だつてロングタイプのメイド服を着てるんだぞ？　あの折本が。黒を基調として、白いエプロンをしているんだぞ。お店の雰囲気に合つてゐるし、折本も静かにしていれば完全な美少女だから映えるんだよ。え？　喋つてもかわいいだろつて？　何を言つてるんだか……。

まあそんな折本の姿も今ではバツチリ見れるようになつて、俺もだいぶ成長したなつて感じるわ。今ではフォルダに折本の隠し撮りと一緒に制服で写つてゐる写真でいつぱいになつてるしな。

「それでー？　一人でどしたの？」

「ああ、葉山がコーヒー奢つてくれるつていうし、ついでにお前等と合流出来ると思つてな」

「へー。そしたら美咲達はいつもの席にいるからそこに案内しよつか？」

「どうする葉山。お前が決めていいぞ」

「……まあいいさ。雪乃ちゃんの耳に入らなければいいだけの話だから」

「雪ノ下？　アイツに関係する事か？」

「いや、雪乃ちゃんが関わつたらいけない事だ」

なんかよくわからないな。雪ノ下が関わつたらなんだつて言うんだ。つて聞こうとしたけど葉山が若干にがーい顔をしていたので聞かないでおこう。後で聞かされるかもしれないが。

「まあいいわ。じゃあ勝手に席に行つてるわ。俺はいつものやつで頼む」

「ほーい。隼人くんは?」

「俺はオススメで頼む」

「えつ、あーうんわかつたー」

そう言つてひひひつと笑いながら裏に戻つていく。

葉山お前もしかしてここで薦めてるコーヒーを知らないのか? 大丈夫か?

「んじやまあ行くぞ。こっちだ」

まあ俺には関係ない事だからいいか。それに俺がこの店で働いてるの知つてゐらるこの店のオススメも知つてゐるだろ。

「うん? 八幡と……葉山か。珍しい組み合わせだな」

「おう刻。ちよつと知恵貸してくれ。葉山からの面倒事だ」

「葉山から? まあいいだろう。とりあえず二人とも座れ」

いつも使つてゐるところが複数人がけの席だから男衆と女衆で分かれるように座り直してもらう。とりあえず葉山に軽く仲町さん達と軽く挨拶を交わしながら本題に移

らせる。

「このメールに覚えある人はいるかな？」

そう言つて出されたのは一通のメール。受信履歴を見る限り、部活中に送られてきた
という変なメールなのだろう。

なるほど、今回の依頼はこれか。

「チエーンメールか。俺は見た事がないが……姉貴と千佳はどうだ？」

「メールは見ないからなーい」

「私も多分無いかな」

三人共見た事が無い、という事はうちのクラスでの出来事か？ でも俺にも来てない
から……あつ、俺クラスの奴とメアド交換してなかつたわ。そしたら後で折本に――、

「ほい、コーヒーおまちー」

「ちょうどよかつた。折本、このメールに見覚えあるか？」

葉山の携帯に指差してどうか確認をとる。

折本はんー？ と目を細めてそのメールの内容を見る。

するとすぐにポンつと手を叩く。

「あー、知つてる知つてる！ 先週末くらい？ に来てたよ」

「ナイスだ折本。お前がちゃんとクラスのやつとメアド交換してくれてて助かつた」

「比企谷はクラスメイトと関わってないもんね」

「ばつかお前、ちゃんと関わってるわ。最近だと戸塚とも話すようになつてるからな。メアドとか交換出来てねえけど」

ちなみに他の奴らのも持つてないです。

「今回はこのメールをどうにかして欲しいんだ」

「どうにか？ 送信してやつ特定して吊るしあげればいいのか？」

「いや、穩便に済ませる方法を教えて欲しいんだ」

無理だろ。

無理というのは純粹に送信者を見つけるのと、仮に見つけたとして刻には稳便に済ませる能力が備わってないからな。

「とりあえず先週末から届いてるメール見せてもらつてもいい？ 何かあるかもだから」

「ああ、もちろん。……だいたいこの辺りだな」

今まで送られてきたメールを全てに目を通すと、まず一つの共通点が浮かび上がる。

このメールはとある三人の事についてしか書かれていない。この三人は俺も知らない人物——、

「これ確か隼人君のグループの人達じやない？」

……うん、まあ俺はまだクラスメイトの名前ほとんど覚えてないからわからなくて当然だつたわ。当然じやダメなのはわかってるけど、そこは置いといて貰おう。いいんだよ、多少覚えてなくとも特に問題とか無いからな！

「ああ。それで頼みつていうのはどうしてこんなものが流れたのかを突き止めて欲しい。出来れば、このメール自体を無くして欲しいんだ」

「うん？ ちょっと待つてくれ。一つ確認させてくれないか」

「……なにかな。えっと、刻でいいかな？ お姉さんと呼び分けたいしね」

「ああ、もちろんだ。それで、お前の頼みというのは迷惑メールが流れた原因の追求とそれを止める事の二つでいいんだな？」

「その通りだけど、何かダメかな」

難しそうに顔をしかめて腕を組む刻。ややあつて、目を開いて葉山に言つた。

「そもそもが無理だ。それは諦めろ」

人を貶める行為に、穩便に済ませるという行為は相応しくない。

「葉山、お前の考えは甘すぎる」

それはもうばつさりと、刻は葉山を切り捨てた。いや、実際に葉山の身体じやなくて考え方を切つたんだからね？ バトル漫画とかSchool Daysとかじやないんだから当たり前だけど、一応念の為な。

それはさておき、それも刻の意見には同意だ。

犯人を見つけないまま穩便に事を済ませる、というのは確かに平和的解決にはなるかもしれない。けど、そんなものは一時的なものだ。ちょっと止めて俺達の目に映らないところでまたコソコソとやり始めるもんだ。小学生でもやる手法だぞ。先生が居ない時を見計らって問題起こして、居ると何もしないか仲良さげな雰囲気出しながら話しかけたりするやつ。ソースは雪ノ下と俺。まあ小学五年生になつたあたりの雪ノ下はやつてきたやつ等をお構い無しに叩き潰してたが。

「……どうしてそう思つたのか、聞いてもいいか？」

一息つくために出された俺専用のコーヒーに口を付けてから葉山は刻に質問を投げ

かけた。

えつ、飲めんのそれ。マツ缶並に甘いヤツだぞ……つて中身全然減つてねえ。ホントにカツプの縁に口付けただけか。なんか表現エツチだな。どこかのタイミングでのフレーズ使おう。

「理由は三つ。一つ目は再犯する可能性が高い。罪を罪として認めさせ、ある程度周囲に認知させないと必ずまたやる」

指を一つ立てて言う。

「二つ目。そもそもそんな温いやり方じや現行犯でも無い限り犯人を見つけられやしない」

二本目の指を立てて続けた。

「最後に、だ。誰も止めなかつたら、愉快犯が生まれ、学校全体で同じ事が起き始める。こうなつた場合、被害者は留まるところを知らなくなる」

三つ目の指を上げ「以上だ」と締めくくつて刻はカツプに口をつけて喉を潤す。

それにしても、なるほどな。確かに刻の言う通りだ。何であれ、惡意のあるものは人に強い刺激や樂しませる要素を持つ。新しいチエーンメールが出回り始めるのは時間の問題かもしれない。

だからこそ、刻は葉山の考えを甘いと言つたんだろう。

「…………」

一方葉山は顔を少しだけ下げて暗くなっている。目も前髪で見えなくなり、どんな表情をしているのかわからないが、想像は出来る。大抵こういう時はショックを受けたり悲しんでる時にやるものだしな。

そんな予想とは裏腹に、葉山は腕を机にぐでーっと伸ばしてそのままおでこから頭も乗せ始めた。

しかも「やっぱりそらうだよなあ」と言い始めた。

「なんだ、自分でもわかつてたのか」

「そりやあな。さすがにそこまでわからないほどでも無いさ。ただ、その事実から目を逸らしたかっただけさ」

それに、比企谷なら他に策を思いついてくれそうだしね。

そう言つて今度こそカップに口をつけ——いや、やっぱ飲んでねえわ。さてはコイツ、コーヒー飲めねえな？ パツと見スタバとかでキメてそうな雰囲気なのに飲めませんとか笑うぞ。

いや、それよりも、だ。

「待て。何度も言わせてもらうがあまり俺を買い被りすぎるな。少なくとも今はお前よりも能力値は低いんだぞ」

「ははは。謙遜するなよ比企谷」
「謙遜なんかしてねえよ」

「昔の事を引つ張り過ぎなんだよ。今の俺は昔とは違えしな。あんな事はもう二度としないつもりだ。」

「それで、この件はどうするつもりなんだ？ 正直、俺達にやれる事はないと思うが」「ああ、それに関しては大丈夫だよ。目星は付いてるから」

「なんだよ、それを早く言えよ。てかわかつてるならすぐに解決出来るじやねえか帰るぞ」

「待て比企谷。お前はかおりのバイトが終わるまで待たないとどうう？」

「二人して話を終わらせようとしないでくれ……。その目星が厄介だから穩便に済ませたかつたんだ」

「なんだよ、最初からそう言えよめんどくせえな。」

そもそも過程飛ばして答えがあるのに隠すとか害悪だろ。お父さん、そんな子に育てた覚えはないぞ！ 育てた覚えも父親になつた覚えも無いけどな。

「それで、目星は誰だ？ チェーンメールに書いてあつた被害者、つまりはお前の取り巻きか？」

「……」

「刻、答えを初手から引くな。葉山が恐れなして」

「たぶん刻の事だから最初から予想はしていたんだろうけど、それにしてもおかしいだろ。絶対某ウルクの王並の未来視か某ドクターだった魔術王の千里眼かつてくらいやバい。」

「安心しろ、理由まではわからん」

「わかってたらもう人間卒業してるからお前が安心しろ」

「それでも無いだろう。化物語に出てくる羽川翼だつてこの時点でほぼ事の顛末まで予測して解決の手を思いついている頃合いのはずだ」

「あの人は十分人間卒業してるからいいんだよ」

そもそも化物語の主要人物にまともな人間は一人としていないことに気づけ。ちなみに俺の推しは……いや、今はどうでもいいか。

「それで原因は？　目星ついてるのか」

「いや……。それさえわかれば話が早いんだが」

「ふむ、それなら犯人の動機を考えてみよう。そこからこじつけである程度わかるはずだ」

「そうは言つてもな。そいつ等の事知らねえし」

「同じクラスなのにわからないのか八幡……」

「ばつかお前。よく考えてみろ。ただ同じクラスなだけの奴をよく知ってる奴の方がヤバいだろ。友達でも何でもないのに好きなものとか性格とか、全部知ってる奴が目の前に現れてみろ。ストーカーだと疑われるのがオチだ」

昔、雪ノ下を真似して俺の事をイジメてきた奴等の弱点を全部網羅して目の前で披露したらめっちゃ怯えられた挙句何故か先生にチクられて俺が怒られたからな。俺のイジメは無視していたのにこことばかりに俺にだけ怒るのは本当に解せぬ。

「確かにそうだな。なら葉山。そのいつものメンバーについて教えてくれないか？」

「ああ、わかった」

そう言うと葉山は制服のポケットからスマホを取り出した。少しフリックをしてからスマホに写った写真を俺達に見せながら最初に金髪の男を指さしながら説明を始める。

「戸部からだな。アイツは俺と同じサツカーパー部だ。金髪で見た目悪そうに見えるけど、一番ノリのいいムードメーカーだな。文化祭とか体育祭とかでも積極的に動いてくれる。いい奴だよ」

その後、今度はかなりガタイがいい奴を指さす。

「次に大和だ。大和はラグビー部で、冷静で人の話をよく聞いてくれる。ゆつたりとしたマイペースさとその静かさが人を安心させるっていうのかな。寡黙で慎重な性格な

んだ。いい奴だよ」

最後に猿っぽいやつに指さして苦い顔を作り、少し言いよどみながら続ける。

「大岡は野球部だ。人懐っこくていつも誰かの味方をしてくれる気のいい性格だ。上下関係にも気を配つて礼儀正しいし、いい奴だよ」

.....。

「大岡が怪しいんだな?」

「どうして!？」

いや明らかに大岡だけおかしかつただろ。俺と刻を前にするならそういうのはしつかり隠さないとそこから考えとか読むし。え？ それ人間卒業してるつて？ ばつか何言つてんだ。これくらい出来るに決まつてるだろ。俺の周りだつて顔で情報全部取り出してくるからな。つまり俺は普通だ。

「はあ、わかつた。でもさつきも言つた通りまだ動機がわからないし、証拠も無い。俺も勘でしか判断してないから、大岡を押さえるとか出来ないぞ」

「そうだな。知つてゐならわざわざこんな面倒なやり方しないからな」

「先週末から流れたものか……。なんかあるか？」

男三人してうーん、と頭を悩ましていると、折本がなにか閃いたようでパンつと手を叩いた。

「そういえばアレあるじやん。ほら、職業なんちやら！」

「職業……？ あー、あれか」

「それが何か原因になるのか？」

「なるつて！ アレって確か三人グループで回らないといけないじやん？ でもさ、隼人くんのグループ四人で一人ハブになるからさー、それが嫌だからやつたんじやない？」

なるほど、と少し納得する。

いやでも、そんな女子グループでよくありそうな事がゴリゴリの運動部の奴等がするのか？ でも時系列的にそれくらいしか原因が無いならそれで確定させるしかないな。刻も俺と同じ考え方のようで少し思考した上でコクリと首を縦に振る。そしてそのまままた思考を巡らせるように顎に手を当てて目を瞑っている。たぶん、解決方法にリソースを振り始めたんだろう。

「お手柄だな折本」

「ぶいっ。後でなんか奢つてね〜」

「わかつた。葉山にツケといてくれ」

「オッケー」

「今さりげなく全部俺に擦り付けられた氣がするのは気のせいか？」

そんな風にワイワイしていると、刻がようやく目を開いてふうつ、と息を吐き出す。あるよな、集中を解くと口から息が出ちやうの。俺もよくやつて机の上にあつた消しカス吹き飛ばして集めるの面倒くさくなるの。

「葉山、やはり穩便な解決方法は見つからない。諦めろ」

「そうか……。比企谷はどうかな？ やつぱり——」

「無いな」

キツパリと葉山の言葉を被せるように言う。いや、そもそも嫌がらせを穩便に済ませる方法とかあるわけ無いだろ。そんな方法あるならとうの昔から実施してる。

そんな俺の言葉にガツクリと葉山は項垂れ「そうだよなあ」と一つだけ零してため息をつく。

コイツはコイツで色々考えたんだろう。まあ、コイツ自身根っからの善人っぽいから仕方ない、か。

「だがまあ、解決は出来ないが他の方法があるぞ」

「えつ？」

何故か刻にまで驚かれる。いや、まあ確かにアホみたいな事ばつかしてたから説得力無いかもしけないが、俺だつてそっこ修羅場潜り抜けてきたからな？ やれば出来るからな？

「まあいいや。とりあえず葉山よ。俺の案に乗つてみるか?」

その問い合わせに対し、葉山はゴクリと唾を飲み込んで意を決したかのように口を開く。

「わかった。俺に出来る事ならなんでもやってみせる」

その答えに満足し、俺も真面目な顔をして葉山にこう伝えた。

「そのグループから抜けろ」

つてな。

解消の仕方

カフエらしく、静かな時間が流れる。

誰も言葉を発さず、ただ空気を吸う音だけが……響きはしないが、まあホントにそれだけしか音がないくらい静かだつてことだ。

いや、なんでお前等そんな静かなの？

葉山はポカンと口を開けてアホみたいな顔してるにも関わらずイケメンとかふざけんなよ一発デコピンさせろ。んで刻達は頭にクエスチョンマークを浮かばせてるような顔してるし。

俺はただ、葉山にグループを抜けろって言つただけだぞ？

「ひ、比企谷。それは一体どういう……」

ややあつて葉山が額から汗を流しながら聞いてくる。

いや、どうもこうも無いだろ。

「単純な事だろ。お前がそこから最初から居なければ、この事態も収縮するつて言つてるんだ」

「……どういう事だ？」

「簡単な質問をするぞ。葉山。そもそもこの事態にお前が直接関わっていると思うか？」

やや考えた後、葉山は首を横に振る。

「そうだな。今回の出来事は直接お前が関わってはいない。だが、間接的にならどうだ？」

やはりと言うべきか、俺の言う事が少し理解出来ないらしく、首を傾げる。
わかりやすいように少し噛み砕いて言うか。

「要是この問題はお前を巡つて起きた問題だ」

「そんな！ どうし……いや、確かに比企谷の言う通りかもしねれないな」

「わかつてもらえて何よりだよ」

コイツは小学生の頃からそうだつた。

中心人物で、皆から好かれ、頼られた。だからこそコイツは「皆の葉山隼人」と言う
鎖に縛られていた。

そしてそんな葉山だったから、特定の誰かと仲良くも出来なかつた。

少しずつ変わって今では特定のグループで遊べるようになつたんだろう。

しかし、少し問題があると周りが勝手に荒れ出す。

それが「皆の葉山隼人」の弊害とも言えるな。

「しかし八幡。あのグループから葉山が抜けるのは無理じゃないか？」

「何言つてるんだ？　今回のイベントだけ葉山が抜ければいいだけの話だぞ？」

「……ん？　なんか話が噛み合わんな。あのグループから葉山が抜ける話だろう？」
は？　なんでそんな話になつてる……あー。確かに言い方が悪かつたかもな。道理

で葉山も思考停止状態になつてたわけだ。

「違う違う。とりあえず結論から言うとこれは葉山を中心には勝手に周りが問題起こして
るだけだから、その中心人物を一時的に取り除けばいいだけだ。だから、おそらく問題
になつてているであろうグループ分けをいつものメンバーから一抜けして、他の奴と組め
ばいいって話だ」

「言い方が悪すぎるだろう。たぶんこここの全員誤解——すまん、一人除いて全員だ」
やつぱりか。そりやあそうだ。現国の問題でこんな書かれ方したら総武上位陣でも
間違えるわな。

「ん？　一人？」　一人つて誰……あー、なるほどな」

そう言つてこの場の全員——件の一部の人物以外——がそちらに視線が集まる。
そして当の本人、折本は首を傾げて理由が分かつて無さそうにしている。

「いや、何かわからんどこあつた？」

「分からなかつたから俺たち困惑していたんだが？」

「ははは、さすが比企谷の彼女だ」

「なんかよく分かんないけど褒められててウケる！」

「むしろなんで刻が分かんねえんだって話になるぞ。付き合いなら同じくらいだろ」

「時間は同じかもしないが、かおりと比べると濃さが違うからな」

「そういうもんか？ 特に折本と二人でいる時とかあまり話してないぞ。とりあえず一緒にいてちょっと喋つたり漫画の面白いシーンとか見せあつたり、スマホいじつては折本がウケそうなネタがあればそれを見せて笑わせたり……うん、休日とかそんな感じだな。」

「まあそこら辺は置いておくとして、だ。どうだ葉山。これなら粗方問題は解決出来るぞ」

「ああ、それでなんとかなるなら早速やつてみるよ。ただ、俺が誰と組むかだけど」「俺と組めばいいだろ？ まだ誰ともグループ組んでなかつたしな」

「……あとで雪乃ちゃんが怖いけど腹をくくろう」

「雪ノ下に怯えすぎだしどんだけ俺の事気に入ってるんだ雪ノ下。

「とにかく、だ。これで問題は解消。悩みの種も無くなつたんだ。ここは葉山の奢りだから乾杯しようぜ」

「コーヒーだけな。さり気なく全ての会計を押し付けようとしないでくれ」

「冗談だ」

とりあえずカップを持って形だけ乾杯をして俺好みに固められた特製のコーヒーを喉に流し込む。うん、美味しい。

それを見て葉山もやれやれと言った態度をわざとらしくとつてから俺と同じものを飲み干、し？ あ、大切なこと忘れてた。

「葉山、それ——」

「あつつかま!?」

「——マツ缶並に甘いから気をつけろよ』

俺の言葉を遮るように、葉山は目を見開いて顔を歪ませた。

俺と葉山隼人

葉山の問題を解消する方法を伝えてから次の日のバイトに行く道中。

折本達には適当に理由を付けて先に行つてもらい、今は俺と葉山の二人だけで歩いていた。

葉山曰く、どうやら何度も送られてきていたチエーンメールは今日の昼にはなりを潜めているらしい。

例の三人は同じグループとして行動することが決まり、どこの職場に行くかの話し合いを少しずつ始めているようだ。これでやつと一件落着になりそうで良かつた。もし仮にここからまた一悶着なんてあつたら雪ノ下にバスするつもりだつたから命拾いしたな、葉山。

「本当に助かつたよ。ありがとう」

「別に特別何かした訳じやねえよ」

「俺からしたら、特別に見えるさ」

「そういうもんか?」

「ああ。これでも少しは成長したつもりだつたんだけど、まだまだだなみたいだな」

肩を少し落として苦虫を噛み潰したような笑顔を作る。

これはアレだな。少し前に流行つてた俺TUEE EEE系小説にある俺またなんかやつちやいました？ の流れだな？ いやでも本当に大した事でも無いから気の所為だな。

「少しでも比企谷に近づけたと思つた自分が恥ずかしいよ」

「は？ 俺に？ 何言つてんのお前」

「いや、比企谷にはなんて言うのかな。……憧れ、に近いものがあるからさ」

「憧れ、ねえ」

「だからかな。少しでも君のよう強い男になりたかつたんだよ」

「…………」

コイツ、本氣で言つてるのか。

冗談を言つているような目じやないのは見ればわかる。

葉山だけじやない。雪ノ下もそうだ。

コイツらは俺を高く見すぎている。

——君がやつたことのツケを返さないといけないんだよ。

何故か奉仕部に入る前に平塚先生に言われた言葉が脳裏に過ぎよつた。

ああそりか。薄々勘づいてはいたが、まさかホントにこれの事なのか。

なら話は簡単だ。

「葉山」

「何かな？」

「お前のそれは勘違いだ」

「……？ どういう事かな」

「俺はお前が思つているような人間じやなかつた、つて話だよ。そもそも、高々小学生みたいな子供のやつた事だぞ。後先考えずにやつた愚行に過ぎねえんだよ」

「…………」

「それに、だ。あれをやつた後、俺がどんな風に学校で過ごしてきたのか見てないのか？」

今では笑い話で終わらせられるが、当時は気が滅入つていた。

耐性の無いまま悪意、雪ノ下が負つていた一部だけを受け継ぎはしたが、それだけでキツかつた。あの時、雪ノ下のやり返し方とか学んでなかつたら自殺は覚悟してただろうしな。

だからな、葉山。

「俺は最初からお前等が思つてているような人間じや無かつたし、何度も言つたと思うが、アレは俺が勝手にやつた事なんだよ。いつまでもそんな昔の勘違いを引きずつて生き

てんな。お前が俺に近づくなんて、ハナから無理なんだ」

人は誰かの代わりになれる。しかし、その人自身に近づく事は出来ない。

俺がそれを身をもつて実践した事だ。

雪ノ下のようにやり返そうとしても、同じような結果になつた試しが無かつたしな。だからこそ、俺は何度でも言う。

「俺は俺で、お前はお前だ。それだけは変え難い事実だ。だから、いつまでもお前の中にある無駄に補正がかかってる俺を追いかけるのを辞めろ」

そもそも、理想を追いかけたところで追いつけるわけないんだ。理想だからこそ美化していつまでも自分を下にする。実際はもう既に追い抜いているのに、ずっと足踏みして前にも後ろにも進めないまま、時間を浪費する。

そんな無駄な真似をいつまでも葉山にやらせておくわけにはいかない。

何故なら、そもそも俺のやり方や考え方葉山隼人という人物に根つから合つていなければならぬ。

「……それでも」

「でももクソもねえ。諦めろ。諦めて受け入れて、その上で自分らしいやり方見つける。その方がお前は今回の事だつて、少しあはうにか出来たと思うぞ」

葉山はそこで押し黙つて下を向く。髪で顔が見えなくなり、その奥に隠れている物も

分からなくなつたが、これだけ言えば多少は考え方くらい多少変わるだろう。ていうか、これで変わらなかつたらもうお手上げだ。まあその時は平塚先生に丸投げにしてしまおう。俺は言うべき事は全部言つた。
だから葉山。後は全部、お前次第だからな。

戸塚、接近中。

「比企谷くん、僕は？」

チエーンメールの事件が終わつた二日後の朝のH.R前。戸塚は俺の机に来るなりそう言つた。

かなり前屈みで顔と顔がほんの十数メートル程にまで近づいて来ており、戸塚からふんわりと届いてくる良い匂いが脳を刺激して……いや待て。戸塚は男だろう。いや、そうじやなくとも折本がいる手前でそんな事考えていいはずが無い。その証拠に折本から黒いオーラが滲み出でてきている。あれ？ 折本つてこんなに嫉妬深かつたつけ？ 美咲とか仲町さんとか、中学時代からのシスコン同盟の日月と氏神と話してゐる時はそもそも無いはずなんだけどな。

「あー、僕はつて言うのは何の事だ？ 僕、戸塚に対してもしなきやいけない事でもあつたか？」

「うう……。別にそういう訛じやないんだけど……」

少し離れて指をモジモジと絡ませてしまふとする戸塚。この姿を写真に収めて壁紙にしたい程可愛い。……やめとこう。それやつた瞬間、俺の命が無いかもしけん。

「あの、ね」

「ん？」

「比企谷くん、葉山くんと組むんでしょ？」

「あー、まあそうだな」

「それ、比企谷くんから誘つたって……」

「まあ、間違つては無いな」

「……むく」

「いや、なんだよ。そんなむくれて」

まあだいたい何が言いたいのか分かってはいるが、何故だかすぐイジメたくなる。

俺の性格が悪いわけじゃない。戸塚がそういう感じのがイケないんだ。

まあとは言え、あまりやり過ぎると可哀想だな。

「戸塚」

「……なに？」

「実はまだ班員が一人空きがあるんだが、良かつたら一緒に行かないか？」

「えっ、いいの!?」

「お、おお。問題無いぞ」

またしても身を乗り出して顔が近づく。

いやまずいまずい顔違い顔整いすぎまつ毛なつが良い匂い！ これ男に抱いていいやつじやないだろ！ つまり戸塚は女の子という事になるな！ はいQED！

「——はいストップ」

「わっ」

どうとう隣の席に座っていた折本が戸塚の首根っこを掴んで持ち上げる。完全に猫を持つ時のそれでまた和む。

「戸塚。あまりうちの彼氏誘惑するのはウケないよ」

「うう、折本さん。僕、男の子だから誘惑も何もないんじやないかな……」

「……ふくん？ だつてさ比企谷？」

「こつちに振るな。いやまあ戸塚が男だつてのはちゃんと理解してるから問題ねえよ」「とりあえず、戸塚。お前俺等の班に来るでいいのか？」
嘘である。普通にドギマギしたしなんなら女の子の可能性について証明したくらいだ。

でも俺は悪くないだろ。戸塚に迫られたら誰でもこうなるはずだ。折本やられてみたらわかるぞ。顔の良いヤツが急にアップで来たら心臓が高まるもんだ。

「うん！ よろしくね！」

「わかった。後で葉山には言つておくわ」

「ありがとう！ あつ、もう時間だね。じゃあまた後でね比企谷くん」

そう言つて戸塚は手をフリフリとさせて自分の席に帰つていく。

……なんであんな女の子っぽい仕草が似合うんだ。ホントに男か？ もういつその事新しい性別として登録されるべきだと思うんだが……？

「比企谷、もしかして目覚めた？」

「ばつかお前、違えよ。確かにあんなかわいいのが女の子なわけ無いだろとか思つたり思わなかつたりしたところはあるが、結局は男……なんだよな？」

「結局どつちなのかわかつてないのウケる！ でもダメだかんね。間違つても惚れたりしたら」

「あー、それは無いな」

そこら辺の線引きはとある一件をきつかけに男女関係無くしてあるし、余程のことが無い限りは消すつもりも無い。

なぜなら。

「俺には折本がいるしな。そんな節操無しになるつもりは無い」

「…………」

「ん、どうした？ 耳まで真っ赤にさせて」

「比企谷って、ホントたまに無自覚で照れさせてくるようなことをさらつて言うよね」

「何の話だ？」

「自覚無いのがタチ悪い……。そういう事他の人人に言つたら絶対言わないでよね」

「……？ さつきからなんだ」

俺何か言つたか？ 急に顔が真っ赤になつたと思つたらどーのこーの……まさかこれいつもの思考が口からボロリしたパターンか？ うわー、はつず。大っぴらに自分の彼女だけで幸せですってか？ その通りだから誤魔化し効かないですねお疲れ様でした。

頭を抱えると同時に鳴り響いたチャイムを聞き流し、恥ずかしさを消すように眠りにつく。起きた頃には全部無かつたことになつていて、昼休みになつてているだろう。

一限が平塚先生の担当教科だったからすぐ起こされて職員室に呼び出しきらつた。

そうして、比企谷八幡という存在をまた乖離する。

職場見学。

読んで字の如く、職場を見て学ぶ機会の事をさす。

本来なら三人グループに分かれて行くはずなのにうちのクラスの大半は葉山が行く先を決めた瞬間、ほぼ全員が同じ場所を希望したためもはや団体行動というのが相応しい様相になっている。

それでもちやんと見学先の様子を見ている。時々楽しげにヒソヒソと話す姿もあるから、まあそれで一先ず良いんだろうな。どうせこの後で出すレポートとか変な事書かなさそうだし。あ、そんな事するの俺と三木くらいか。てへペろ。

「比企谷」

「ん、おお刻。お前もここだつたか」

「まあな。しかしあ前のクラス、どうなつてるんだ？　ほぼ全員なんて、いつからこの集まりは団体行動制になつたんだ？」

「さあな。俺に言われてもわからん。原因は全部葉山だ」

「わからんじやないだろうそれは。わかってるのに知らん振りをして秒速で手のひらを返すな」

いやだつて、実際意味わかんねえし。なんなのうちのクラス、葉山がいないと寂しく死んじやううさぎ病なの？　あ、実際は寂しくても別に死はないらしいなうさぎつて。じゃあコイツらなんだ？

「ま、いいか。俺には関係ない事だしな」

「だな。ていうか、お前グループどうした？　ここに居ていいのか？」

「ん、そうだな。少し待つて貰つて。そろそろ戻ろう。また後でな比企谷」
おう、と軽く返事をしてまた前方にいるクラスメイト達を眺める。

以前まであつたギスギスとした空気は無くなつており、皆が楽しそうだ。
まるで、何も無かつたかのように。

「……解消、か」

ポロリ、とその言葉だけが口から零れる。

俺のやつた事はほぼ間違いは無かつた、と思う。

誰も傷を負わずに済ませられたんだ。

そこに間違いは無いはずだ。

それでも、どうしてだろうか。

「こんなんで直るものなんだな、コイツらつて……」

「どした比企谷？」

「うひつ!?」

「ふつ！ ひひひつ、なにその驚き方つ、ウケるんだけどつ！」

声がした方を向くと、いつの間にか折本がそこに立っていた。

ビックリした。何、ステルス機能でも搭載してるの？ やめてね？ ステルス八幡

の異名が奪われちやうから。最初からそんな大層なもの付いてないけども。

「それで比企谷。何かあつた？」

「ああ、いやまあ、別になんでもない。ほれ、遅れるぞ」

「……ふーん？」

「どした」

「いやー？ 別に」

「絶対なんかある様な言い方だろそれ」

「比企谷のマネだし」

「……やつぱり折本に対して隠し事出来なさそうだな」

「比企谷もアタシがなんか隠し事してたら絶対見破つてくるでしょ」

「違いない」

のんびりと、見学しつつ折本の隣を歩く。

「それで、何があつたん?」

「アレだよ」

目の前の集団に指を向ける。

それだけでは理解しきれず、こてんと首を横に傾げる。

「ちよつと前にクラスの中であんな事があつたのに、少し問題解消させただけであれだけ近くで話をし合つている。それが異質過ぎてな」

「あ、なるほどねえ」

「お前はどう思つてる? 僕がおかしいのか?」

うーん、と腕を組んで悩む。

そうして目を合わせてこう言つた。

「おかしくは無いかもね」

「……そうか、そんなもんか」

「ちよい待ち。話がまだ終わつてない」

「ぐえつ」

だから歩いてる時に襟を引っ張るんじゃない。頸動脈が締まつて落ちるぞ。

「とりあえず比企谷、もう一度あれ、見てみ」

「ケホツ……ああ……あ？」

もう一度、前を見る。

最初は折本が何を言つてゐるのかわからなかつた。

でも、

「……あ」

「わかる？」別に全部が全部、元通りつてわけじやないんだよ」

「……マジか。これ、すぐに気付いたのか」

「まあね、伊達に女として生きてないつてもんだし」

「ええ……女怖い……」

どこか、壁のようなものが見える。

それは一部に、もつとと言うと、あの三人組辺りに感じる。

三人がお互にじやなく、三人組とその他。

そうか、俺がやつたのは解消じやなくて、臭いものに蓋をしただけだつたのか。

「……はつ、考えが浅すぎたか」

「んー、でもこれ以上のやり方はアタシには思いつかないし、美咲達もそうじやない？

だから、別にアタシは何か言うつもりは無いよ。何もしなかつたのに後からグチグチ言うのも性格悪いし」

「そうだな。そういう野次馬精神持つたヤツはもれなく同じ目にあつてしまえばいい」

「ひひっ、性格わつるいなあ」

「いいんだよ、別に俺は自分で性格がいい方だなんて思つた事が無いんだから。

「それで、比企谷はアレをどうする?」

「何とかしなきやダメか?」

「アタシは何もしないに一票。葉山くんの依頼と、実行犯への罰として考へるならそれでいいと思う」

「だよな。俺もこれ以上働きたくない」

「出た、比企谷の二ート思考」

「仕方無いだろ。こんなめちやくちな依頼とか何度も受けたいとか思えるわけが無い。まあもし仮に働くことになつたらそれは——

「折本とか養う時くらいだろうなあ」

「ん? なんでアタシ? 養う?」

「…………なんでもないですさあ行きますよ折本さん皆が遠くに行つてしましますよ」

「あ、ちょっと待つてよ比企谷〜!」

川崎沙希

（1）

なにかとモヤモヤした職場見学も終わり、クラスで打ち上げをしに行くことになつたらしいが俺はそれをスルーして帰宅……を決めようとしたんだが、たまには全体の集まりに参加しろという折本の指令が下された数日後。

また一つ、悩みの種が俺、いや俺達に撒かれた。

「規則違反している生徒への説得、ですか」

「そうだ。これは私からの依頼として受け取つてもらつて構わない」

悩みの種を持ってきた平塚先生は面倒臭そうに頭をガシガシと搔きながらそう言つた。

曰く、総武の生徒が深夜に働いているんじやないかという生徒同士の内緒話を平塚先生の耳に入つたそうだ。

もしそれが本当だつたなら、その生徒は即刻バイトを辞めさせられる上にペナルティーが発生する。

「何か必要なものがあるなら私に言うといい。工面しておこう」

「わかりました。では今日から早速始めていきます。みんなもそれでいいわね？」

「ああ、俺はそれで構わないよ」

「右に同じく」

「比企谷に同じく意義なーし」

「下に同じく」

「地べたにいないでちゃんと椅子に座れ姉貴。俺も問題ない」

「ていうか、二人とも部員じやないんだから許可する必要ないでしょ」

「……いつの間にこの部活はこんなに大所帯になつたんだ？」

「うちのメンバーがすみません。今日はなんか面白そうなことが起きそうだから絶対行くと三木が……」

「いやなに、今回に限つては人手があつてもいいからな。ただし、あまりことを大きくするなよ？　学校側はそういった厄介事は好まないからな」

「それもそうだ。本来、深夜のバイトは未成年がやつてはいけないからな。もし仮に問題が大きくなつて一番被害を被るのは雇つた側になる。」

「そして、加害者となつたのがうちの学校の生徒だつた、なんて話が外に漏れた暁には社会からどれだけのバッシングを受けるのかなんて想像もしたくない。」
 「ま、そういうわけだ。なにかあれば私に言つてくれたまえ。今回に関しては君たちの手に負えない事態も想定して私も出来る限り手を貸そう。では雪ノ下、後は頼んだぞ」

「わかりました。首がつながっている未来を祈つていてください」

「そうだな。辞表の文章だけは考えておくとしよう」

そう言つて扉から出でていく先生の背中は何の迷いのない、立派な先生だつた。
「あんなかつけえとこ見せられたら俺たちもやらな」

『——いつつたあ!?』

「……すごく動搖していたみたいだね」

「なんて締まらない……」

外から思い切りどこかしらを打ち付けた音と、先生の悲鳴が轟く。

葉山と雪ノ下の言う通り、何とも締まらない去り際だつた。

「ま、まあそれは置いといてだ。とりあえずさつさとその問題の生徒を捕まえてこよ
……おつ？」

スマホに着信音が鳴り響く。ポケットから取り出して画面を見ると小町の名前が表
示されていた。

「もしもし、小町か。どした。買い物か？」

『あ、お兄ちゃん？ 違くてさー、ちょーっとお願ひがあるつていうのかな』
『ほーん、まあいいぞ。言つてみ』

『えつと、小町の相談じやなくてね……んー、電話じやなんだからどこかで会えない？』

「ええ、やる気ダダ下がりになつたから断りたいんだけど」

『じゃ、お兄ちゃんのバイト先で待つてあるから』

「おいちよつ、切りやがつた……」

どうしてこんなわがまま娘になつちやつたかなあ。まあいいか。妹のわがままを聞くのも兄ちゃんの特権だしな。

「すまん、急用が入つた」

「小町さんね。そういえば小学生の頃少し遠くから見た程度だったわね。比企谷君、そのうち彼女に挨拶をしに行くわ」

「なら一緒に来るか？　どうせこれから小町に会う予定だし」

「そう？　ならそうさせてもらおうかしらああ葉山君今日の部活動は終わりよ戸締りをして平塚先生に鍵を返しておいてもらえるかしらそれと折本さんたちも申し訳なけれど今日のところは——」

「はい落ち着いて雪乃ちゃん。酸欠になるから酸素ちゃんと取り込んで」

「すうー…………はあー…………。大丈夫よ。私がそんなこんなことで小町さんとの邂逅を失う

ような愚かな真似はしないわ」

「どんだけ会いたいんだよ……」

さすがにそこまで会いたいのか俺の妹に。

「ええ、もちろんよ。貴方の妹ですもの。ちゃんと顔を合わせて謝らなくちゃいけないことがあるもの」

「だから心を読むなって。それとそれはもう」

「貴方がよくても私や小町さんは違うわ」

「そーそー、ちゃんと比企谷に関係してゐる人にはちゃんと確認取らないとね」

そういうもんか。まあ、そうだよな。でも小町もそんな昔のこと、しかも俺のしでかしたバカなことで雪ノ下に当たるとは思わねえけどな。

それについても、小町のお願いって何なんだろうな。他の奴からの相談っぽいから行く気がマイナスに吹っ切れそうなんだが……。

川崎沙希 ②

「おーいお兄ちゃん、こつちこつち～」

「おう、待たせた……な？」

バイト先の喫茶店。そこの窓際の日当たりのいいところで小町ともう一人、小町と同じ学校の制服を着た男子学生が対面に座っていた。

「およ？ 皆さんも一緒に来たの？」

「まあな。あとお前に用事があるやつもいるからそのついでが大きいな。……で、そつちは誰だ？ 小町の彼氏か？」

「そんなに殺気振り撒かないでお兄ちゃん。顔面にも狂気がにじみ出ててより一層怖い」

しかしながら小町よ。もし万が一かわいい小町が不埒な輩に騙されてたり小町の面倒見の良さを逆手にとつて仲を深めようとかする輩だつたら危ないじやないか。だつたら先手を取つて何かしたらただじやおかないことを認識させておかないとな。

「それに大丈夫だよ。大志君は友達未満でもし友達になつたとしてもそれ以上になることはないから」

「そうか、それならいいが、友達ですらないやつとなんでいるんだ？　てか、普通下の名前で呼んだりしないだろ。魔性かお前は」

「やだなあ、処世術の一つだよお兄ちゃん？」

「そんな処世術を自分の妹がしてるのは知りたくないなかつた。

「比企谷」。アタシ達はテキトーにくつろいでるから終わつたら呼んでね！」

「わかつた。さつさと終わらせるわ」

「もー、一応真面目な話だからちやんと聞いてあげてよね」

「へいへい。んで、誰お前」

「は、はいっす！　自分は川崎大志つて言います！　よろしくお願ひしますお兄さん！」

「誰がお義兄さんだぶつ殺すぞ」

「はいはい、話しあまないから余計な茶々入れないでね」

ちつ、仕方ない。小町に免じて少し真面目に話を聞いてやるか。

「んで、相談つていうのはなんだ」

「は、はい。実は俺の姉ちやんのことなんですけど、帰りが遅くて……」

「帰りが？　何時くらいだ」

「えつと、朝の四時くらいっす」

「朝かよ。遅いとかそういう話じやないだろ」

「そうなんです。それで、なんでそんな時間に帰つてくるのか問い合わせたことがあるんですけど、あんたには関係ないって言われて取り付く島もない状態になつちやつて……」

「ほーん……。んで、なんでそれが小町に相談することになつてんだ?」

「あ、えつと……。」

「大志君のお姉さん、お兄ちゃん達と同じ学校の人なんだって」

ほーん、そんなヤツがうちの学校にいるもんなんだな。ただでさえ今平塚先生からの依頼で厄介事を……はて、何かに繋がりそうな情報だな。

「なあ、他にお前の姉ちゃんについて何か情報持つてないか? 出来ればもう少し詳しい情報が無いと手が打てないんだが」

「そうつすね……。とりあえず姉ちゃんの名前が沙希で一一Eに所属してるくらいですね。あとは……姉ちゃんあてに店から電話が来たことくらいっす」
「……ちょっと待て。一一Eつったか? んで、店から電話か……」

なんでか都合がよすぎる考えが出てきたな。いや、そうだつたらラツキーすぎる。
ちょっと俺だけだと都合よく曲解しそうだし、他のヤツら呼ぶか。

「折本達、ちょっと」

「あれ、もう終わつたん?」

「あー、いや、そうじゃなくてな」

大志から得た情報を全員に共有をする。

そこでやはりというべきか、全員あー、といった反応を見せる。
え、何。知らないの俺だけ？ そんなに有名人なの？

「川崎沙希さん、ね。確かに比企谷君達と同じクラスね。でも、私はあまり詳しくないの
よね。由比ヶ浜さん達はどうかしら」

「えっと、川崎さん、だよね……。私もそこまで詳しくないんだよねー。ほら、川崎さ
んって近づきにくいオーラっていうのかな、なんかそんなの発してて」「
アタシも喋ったこと無いかも。いつも同じメンバーで話してるし」

「俺も無いな。彼女、寝ているか教室から出てるからね」

「ほーん、よく見てるんだな」

「比企谷が見ていないだけだよ」

ふむ、とりあえず川崎については誰も情報を持つてないってことか。そうなると面倒
だな……。

「でも、これでこちらの依頼は一步進んだわね」

「えつ、どういうことゆきのん？」

「平塚先生からの依頼にあつた生徒がその川崎さんの可能性が高いってことよ」

「やっぱそうだよな。よかつたわ、雪ノ下も同じ考えなら間違えなさそ娘娘だしな」

「……雪ノ下？」

ぴくっと小町が反応する。

ううんとうなつたり、首をかしげながら腕を組んだりしているところ悪いが、今はそれは置いていてもらおう。

「とりあえずその川崎に接触してみるか。唯一の手掛かりだし」

「そうね……その前に川崎君、家にかかってきた電話の主は店名か何か言っていると思うのだけれど、覚えているかしら」

「えつと、たしかエンジエル……とかそんな名前だつた気がします」

「わかつたわ。ならそこから川崎さんが働いていそうな場所を探しましょう」

そう結論付けて次の作業に移ろうとしたその矢先、ここまで珍しく、本当に珍しく静かにしていた三木が左手にスマホを持ったまま静かに——これにも驚いたが——右手を挙げた。

「ごめん、それっぽいお店、もう見つけちゃったかも」

「なん……だと……!?」

右手を差し出され、皆してそれを覗くとそこにはかわいらしいフォントやあらゆるかわいらしさをあしらったサイトが映し出されていた。

端的に言えば、メイド喫茶のホームページだつた。

「三木に期待した俺が馬鹿だつた」

「ひつどーいなあ。私マジメなのに〜」

「比企谷。言葉を間違えるな。俺達が馬鹿だつた、だ」

「刻？ お姉ちゃん泣くよ？ 容赦なく泣くよ？」

「そもそもなんでこれだと思つたんだよ。もつと他になかつたのか？」

「そんなエツチそうな入りの店名なんて他にあるわけ……あつたつび

「あんのかよ」

こんどのサイトはさつきのメイド喫茶とは違い、落ち着いたなんとも敷居が高そうな印象を与えるバーだつた。

「うん、こつちの方がありえそうだね」

「こんなカツチリしたところで未成年が働くと思うか？」

「年齢をごまかしねば問題はなさそうかも。川崎さんつて大人びてる雰囲気あるし

ほーん、川崎つてそんな感じなのか。

しかし仮にホントに年齢を偽つて働いてたりしたらかなりまずいだろう。ヘタしなくてもお店にも迷惑がかかるだろうし、早く手を打たないといけないかもな。

「ねえお兄ちゃん。さつきからそつちで何の話をしてるの?
「へいへい、実はな——」

小町も混ぜてよ」

川崎沙希 ③

エンジエル・ラダー天使の階きざはし

ホテル・ロイヤルオーラークラの中にあるそのバーに川崎が働いているだろうと最後の望みに賭け、集合場所であるホテルの前で俺は立っていた。慣れない親父のジャケットを身にまとい、袖に隠れた腕時計を覗かせ時刻の確認をする。

現在、午後八時二十分を刺す頃。

普段なら家でゴロゴロしている時間だが、今日ばかりはそういうわけにはいかなかつた。

今回の依頼と小町の同級生の大志からのお悩み相談を一気に解決するためにはあまりにも少なすぎる情報を基に奉仕部プラスαで探し、糺余曲折の末にようやく見つけたのがこの店だ。

途中でどこからか現れた材木座が参戦してきてあれこれ言いくるめられメイド喫茶に行くことになるという余計な道草食わされたが、メイド体験でメイド姿の折本が見れたからオールオッケーになるな。

ついでに、由比ヶ浜がシフト表に川崎の名前が無いことを確認してある。つまりたゞメイド喫茶に行つただけという遠回りをしたのだった。
もちろん、材木座はあとで三木に絞られてた。

「ゴメン、待つた?」

「戸塚か。いや、今来たところだ」

一番最初に集合場所に来たのは戸塚だつた。
スポーティーな印象を与える装いに、ニット帽を浅く被り首にはヘッドホンといった感じだ。

……うん、似合つてるな。

「あ、あまりじろじろ見ないでよ。恥ずかしいから」

「お、おう、悪い」

ギュッとニット帽をつかんで顔を隠すようにする。その姿にもグツとくるものが……いや違うんです戸塚は男だから。そこを間違えたらいけません。いやそれ以前に折本にしばかれるから。

「むつ? そこに居るのは八幡と戸塚殿ではないか

「おお、来たか材木、座?」

「材木座くん……その恰好……」

「ん？ 何かおかしなところでもるか？」

おかしくはない。ただ、見慣れてないだけだ。

「お前、なんで和服なんだ？」

「む、そこに気づくとはさすがだな八幡」

「いや、だれでも気づくだろ。どしたその恰好」

「いやなに、雪ノ下嬢が大人しめの服を着てまいれと言つておつたであろう？ だから我なりの身なりをしてきたのだが……どうだろうか」

「おや、別に普通に似合つてるとしか言えねえけど……バーで和服つていいのか？」

「俺のイメージだと、新成人が調子に乗つて来ちゃいましたくつてくらいのものだと思うんだが。

「ふむ、そうか？ しかし我はもうこれくらいしか持つていないからな……また美咲殿に絞られる……」

「まあもう諦めろ。もしくはその恰好では入れることを期待しつけ」

「しかし、初めてきたがこんなにも立派なところであるなら、それなりに厳しいであろうな」

「……それは確かに言えてるな」

おおよそ一高校生が入らないような雰囲気醸し出してるもんな。正直ちゃんと身な

りを整えてきた——正確には小町に見てもらつたんだが——けど、それでも門前払いをされそうな感じがある。

正直もう帰りたい。もう依頼とか置いといて帰ろうぜ？　あ、ダメ？　そうですか……。

「……あ、ヒツキーたちだ！　お待たせー！」

「おう由比ヶ浜か。そうだな、すんげえ待つたわ」

「そこは嘘でも今来たところだとか言うところじゃないの!?」

「そんな気遣いを俺に期待するな、諦めろ、無茶を言うな」

「もー、かおりんにもそんな感じなの？　普通だつたら好感度下がりそなんだけど」

「なめるな、アイツは普通じやない」

「自分の彼女に対して酷くない？　いいのそんなんで！」

しようがないだろ。実際、学校の共通認識でカス野郎のレツテル貼つてた中学時代の俺に對してあれこれ調べ上げた拳句、俺の嘘告白まで受け入れて……あれ？　俺と折本の出会い方からして普通じやなくない？　ナニコレなんていうご都合主義ラノベ？

「もう、ダメだよ八幡。そんな意地悪しちゃ」

「そうだぞ八幡よ。おなご女子には優しく接しなくては」

「そうだな戸塚、俺が悪かつた」

「あれ、八幡？ 我には何もなし？」

「つーか由比ヶ浜、その恰好どうした」

「あれ八幡、我的こと無視？」

「え？ 何かおかしい？」

「おかしいところしかないだろ。なんで友達と遊びに行く服装なんだよ」
うなだれる材木座を放置し、由比ヶ浜の服装の確認をする。端的にいうと裾の短い
ジヤケツトに短パンを合わせたものだった。

明らかに雪ノ下が指定した大人しめ、というものは明らかにかけ離れた格好だ。
「だつて大人っぽい格好で来てつてゆきのん言つてなかつた？」

「根本的に間違つてんじやねえか。雪ノ下が言つてたのは大人しいな？ 大人っぽいと
大人しいは違うぞ」

「え、ウソツ」

「いやまあ、俺も知らんけど。それ言つたらたぶん戸塚もダメそうだしな」

「え、わ、彩ちゃんかわいい！」

「もうつ由比ヶ浜さん。かわいいは誉め言葉じやないんだからね」

「ごめんごめん、怒らないで彩ちゃん。ていうか、そつか。だからヒツキーそんなに
かつちりした格好だつたんだ」

「まあな。ホントだつたら俺も戸塚みたいに完全にラフな格好で来るつもりだつたんだが……」

出るときには小町に見つかってお着替えをさせられたんだよなあ。ちなみにこのジャケットは親父のヤツ。意外と着れるもんなんだな。こうしてみると、自分で成長した気持ちになれるよな。知らんけど。

「最初声かけるときホントにヒツキーかなーって確認しちゃつたもん。全然雰囲気違つたし」

「由比ヶ浜さんもそう思つたよね。今の八幡、すごくかつこいいよ」

「どうでもいいけど、その言い方だと普段の俺残念に聞こえるな」

「いやいや八幡よ、さすがにそれはないだろう。お主、学内ではトップクラスに人気があるからな?」

「は? マジ? 初耳なんだが」

「はつはつは、そう照れることはないぞ八幡。あれだけキヤーキヤー言われておればさすがに……え、マジで気づいてないのか?」

「おう、まつたく知らんかった」

「そうか、そんな噂が立つてたのか。普段から常に折本たちと喋つてゐるから、他の声とか視線を

気にしてことなかつたからな。

おや？ どうして皆してため息ついたり頭痛が痛いみたいなポーズとつたりしてるのがな？

「ま、まあいい。一先ずそれは置いておこう。そして後で美咲殿に教育を施してもらおう」

「おい待て。後半のはいらんだろ」

「ううん、八幡。絶対してもらつたほうがいいよ

「さすがにヤバ過ぎるよヒツキー……」

解せぬ。なぜここまで言われなくちゃならんのだ。もしかしてそんなに酷いのか？
え、マジ？ 三木にお願いしておこうかな。

「ごめんなさい、遅れたかしら？」

暗がりから我らが部長の声が聞こえた。

そちらを見ると、白いサマードレスに黒いレギンスを履いた雪ノ下の姿があつた。
「わ、ゆきのんかわいい……！」

「ありがとう由比ヶ浜さん。メンバーはこれでいいのかしら？」
「ああ、さすがにメンバーが多すぎると面倒だろ？」

「そうね。……さて」

雪ノ下は一步距離を置き、俺達をじろじろと見始めてきた。
なにこれ、何を見られてるの?

しばらくして何かが終わつたのか、ふうと一つ息をついて、

「合格」

俺に指をさし、

「不合格」

由比ヶ浜に指をさし、

「不合格」

戸塚に指をさし、

「貴方は誰かしら? 今回の依頼に関わりがある人かしら」

最後に材木座が指をさされた。

「あぶねえ……セーフだつたか」

「えー、これじゃダメなの?」

「八幡の予想通りだつたね」

「ねえ、我だけおかしくなかつた?」

「冗談よ財津君。けれどごめんなさい。さすがにその恰好の人バーにいるのは違和感
を覚えるわ。ほかの場所なら何とかなつたかも知れなけれど……」

確かにそうだな。アニメでたまにバーで荒れてるおっさんのシーツとか観るけど、そういうところでこんな格好のやつとか観たことないわ。あつてもスナックとかだな。和服繫がりだしいけるだろ、たぶん。

「むう、では我もダメそうだな。では八幡と雪ノ下嬢のみで行つてまいるか?」

「それはダメよ。折本さんに悪いし、二人きりだと壊れるわ。私が」

「わざわざ倒置法を使つてまで誇るなよ。ていうかいい加減慣れてくれない?」

「無理よ。今この状態でギリギリなのよ」

ダメかー。雪ノ下も三木の教育受けたほうがいい気がしてきたな。今度ついでにお願いしておくか。

「仕方ないわ、財津君、貴方もダメもとで連れて行くわ。それと、財津君が門前払いされた場合備えて由比ヶ浜さんには私の家にあるドレスに着替えてから同行してもらうわ。戸塚君は申し訳ないけれど、さすがに男性用のは持つていないので。貴方なら女装しても行けると思うけれど……」

「ううん、さすがにやめておくよ」

「ごめんなさい。今度は貴方の分の衣装を揃えて置いておくわ」

「そこまでしなくていいよ!?」

ふふっと笑う雪ノ下と慌てる戸塚の図。なんだろうな、とても絵になつてゐる。

「なあ、八幡。我、雪ノ下嬢にちゃんと名前覚えられてないんだろうか？」

「それはない。あいつは学校の生徒全員のクラスと名前把握してるからな。ただのあだ名だろ」

「そういうものであるか……」

うーんと腕を組んで悩んでる材木座は置いておいて、話を進めるか。由比ヶ浜を着替えさせて行くみたいだしな。

「そしたらせつかく戸塚に来てもらつたし、一緒に飯食つてるわ。その間に由比ヶ浜を着替えさせてくれ」

「わかつたわ。では行きましょう由比ヶ浜さん」

「え、うん。でもこんな時間にお邪魔してもいいのかな……」

「大丈夫よ。私、一人暮らししてるから」

「何者ゆきのん!?」

そんな会話を残して、雪ノ下達は暗闇に消えていった。なんかこんなナレーション残すと不穏に聞こえるな。

「して、何を食す?」

材木座がポンと腹を叩いて聞いてくる。

少し悩んだが、答えは一つだつた。

「ラーメンだな」

「賛成」

「うむ、では行くとしよう。ここら辺にいいラーメン屋があるぞ」

「お前、三木に隠れてラーメン食つてるのか」

「……絶対内緒だぞ」

そう言つて材木座はシーツと指を立てる。

その姿がやけに似合つていたため、三木にチクることを心に決めた。

川崎沙希

（4）

雪ノ下と由比ヶ浜の二人と別れ、野郎三人で晩飯中をしていたところ。そこで重大な失態が発覚してしまった。

その失態を犯していたのは案の定というべきか、ことごとくばかりにやらかしたのは材木座だった。

いや、正直その展開は予期すらしてなかつた。ていうか、出来るわけもなかつた。

「ざ、材木座……お前！」

「……ふ、バレてしまつては仕方あるまい。これに関しては謝罪をしよう。だが、言い訳だけはさせてほしい」

戸塚を置き去りにするほどの不穏の空気が流れる。

しかし、この事実だけは到底看過できない。この失態だけは、雪ノ下や三木じやなくても嘘だろ？ という反応をせざるを得ない、それほどまでのやらかしだつた。

そう、この男、材木座義輝は――

「お前、なんで……ガツチガチの和服を着てるのに靴だけローファーなんだよ！」

「その言い訳を、怒鳴る前に聞いてくれ！」

「ふ、二人とも！ そんなに大きな声出したら他の人に迷惑になっちゃうよ！」

止めるな戸塚！ よりにもよつてコイツ、ミスマッチすぎる組み合わせを出してきたんだぞ！ 最初は袴の裾で見えなかつたが……、まさかラーメン屋のカウンターにあるような少し高めの椅子に座るタイミングで気付かされるとか後出しにも程があるだろ！ せめて、目的の店でのチエックで判明させてほしかつた！

「頼む！ 二人とも、我的話を一先ず聞いて給う！」

「一応聞いてやる。なんだよ」

「うむ。あれは我が——」

「話が長くなる前口上だな。三行で話せ」

「我、家を出ようとする。

下駄を履いた瞬間なぜか花緒が切れる。

予備の物も全てどこかしら古びていて使い物にならない。

我、困り果てる。

仕方ないからローファーで我慢しよう。

と、いつたところだな

「よし、歯あ食いしばれ」

「なにゆげぶらあ!?」

横つ面を痛くない程度の威力で拳を振り抜く。

「つたく、この馬鹿め……。お前がいなかつたら由比ヶ浜しか雪ノ下の精神安定係がいなくなるだろうが。五人がいる状態でもギリギリだつて言つてたのに二人が来れなつてなつたら絶対雪ノ下崩壊するだろ。あれ？ もう依頼達成無理じゃねこれ？」

「いやつーか、そうだよ！ 葉山だ葉山！ アイツ正式な奉仕部の一員だろ、何してんだ！」

「え、八幡聞いてなかつたの？」

「彼奴は何やら家の都合があるとかで来れないと申しておつたぞ？」

「なんで奉仕部員の俺より部外者の方が詳しいんだよ……。報連相くらい俺にもしてくれてもいいんだぞ？」

「いや、八幡もいる時にちゃんと言つていたはずなんだが」

「やれやれだぜ……。そういう事はちゃんと相手の反応まで確認しておくもんだぞ。俺みたいにいつも何かしら考え方をしているヤツとか特にな。」

「まあいいわ。とりあえず俺はそろそろホテルに戻るわ。戸塚はどうする？ 帰るなら途中まで送るぞ」

「あれ、八幡。我には何も聞かないの？」

「お前は強制連行だ」

「散つ！」

「あ、おい待て逃げるな！」

「くっそ、なんでローファーなのに無駄に機敏なんだよ！ 戸塚を一人にするわけにはいかないから深追いも出来ねえ！」

「まあいいか。どうせアイツ、学校でボロカスにされるだけだしな」

「あ、あはは。さすがにそれはないとと思うけどな」

「それがあるのがアイツの運命だ。つと、悪い戸塚。途中まで送るぞ」

「ううん、さすがにそこまでしなくていいよ。それより早く行かないと二人を待たせちゃうよ？」

「くつ……確かにそうだ。じゃ、じゃあ戸塚、気をつけて帰れよ」

「うんおやすみ、八幡」

「ああ、おやすみ」

戸塚に名残惜しすぎる別れを告げ、集合場所に走る。早くこの場から去らないとマジで後ろ髪を引つ張られそうだしな！

川崎沙希

（5）

「これは、どういう事かしら？」

集合場所、ホテルの真下。

俺こと比企谷八幡は由比ヶ浜の衣装替えを終えた雪ノ下の前で正座をしていた。

そして、その雪ノ下は俺の目の前で今まさに氷結系高位魔法が何かを放てるんじやないか、くらいには冷たい空気を放つてた。

いや、よく見たら雪ノ下の後ろで実際吹雪いてない？　ここだけ温度下がつてない？

「いや違うんですよ。俺の説明聞いてくれませんか？」

「いいわ、私が、比企谷君に、エスコートしてもらえる理由を、懇切丁寧に三行で説明しないさい」

「材木座が家を出る時点で草履の鼻緒が千切れてるのに気づいたんですよ。替える物は無いのか聞いたらちようど外向けに履けるものがそれしかなく、仕方ないからローファーで来たとか言つてコードチェック以前の問題でなんかもうすみませんでした」

「ごめんなさい。比企谷君は何も悪くないからそんな土下座なんてしないで頂戴。ホントに、お願ひだから」

怖いんだもん。なんだよ今の威圧感。そこらの魔王とか目じやないんだけど。
「ほ、ほらヒツキ。ゆきのんもこう言つてるしさ、ね？だから土下座するのやめよ？」

なんかアタシたちが悪者みたいに見えるからさ」

「ユキノシタ、モウ、オコツテナイ？」

「なんでカタコトだし！ 大丈夫だつて、ね、ゆきのん！」

「そうよ比企谷君。貴方に頭をここまで下げられると私の頭が地面に減り込むわよ
「なんで二人ともそんなに頭を下にしたがるんだし！ もー！」

由比ヶ浜に無理矢理腕を引っ張られ立たされる。目の前に映った雪ノ下が怒つてな
いのを確認してようやく一息ついて元のテンションに戻すことに成功した。

絶対、雪ノ下を怒らせないようにしようと自戒して。

「では行きましょう。私の意志が碎け散る前に」

「そうだね。えつと、エレベーター……」

「あっちょ。ついてきて」

そう言うとコツコツとヒールの音を響かせながら歩いていく。

それを追うように俺達も動き始める。

「つーか、なんかあれだな。様になつてるよな、雪ノ下」

「だね。歩き姿とかチョーきれーだし」

「この歳であそこまでなるもんかねえ。よっぽどいいところの育ちなんだろうな」

「ヒツキーってゆきのんと同じ小学校だつたんでしょ？ 何か知つてること無いの？」

「無いな。実際、高二になるまで話したことあるねえし」

「ふーん。なんか以外。もう少し接点があると思ったのに」

「無いんだな、これが」

そんな風に由比ヶ浜とひそひそ話していると前にいる雪ノ下がエレベーターの前に止まつて俺達に聞こえるくらいの小さい声で話かけてくる。

「いい、二人とも。ここから先は誰が来てもそちらを見ない。エレベーターの中では扉の方を向いて、少し上を見上げていて。それと、あまり話をしないようにね」

「う、うん！ わかった！」

なんかよくわからないが、そういうマナーとかあるんだろうか。普段だつたら横向きだつたりスマホ片手に下を向いたりしてるとから不思議な感覚に陥りそうだ。

「大丈夫よ、どうせすぐに慣れるわ」

「なんでだ？」

「これ、社会人のマナーだもの」

さらつと言つてお前も学生だろうよ。まあ、家の都合だろうけどなあ。高校生でも企業主催のパーティーやみたいな場所に連れて行かれるんだろう。

「さ、行くわよ」

いつの間にか来ていたのか、数人を乗せていたエレベーターの扉が開く。出る人を優先に、全員出たのを確認して乗り込む。ちょうど待っていたのは俺達三人だけだったからゆつたりと乗れる。

エレベーターに乗った後、特にどの階にも止まることなく着いた。

もし他の人がいたら何かおかしなところがないかソワソワしてしまうから、正直助かる。

店の近くにまで来たところで雪ノ下は足を止め深く、それはもうとても深く深呼吸をし始めた。

「おい雪ノ下。さすがにそれは不審者に見えるぞ」

「ええ、わかっているわ。でも、今、この瞬間だけは、勘弁してもらえないかしら」「お、おう。わかつた」

怖い。雪ノ下の目つきが極限にまで追い詰められた肉食獣のそれだ。

さすがに人の目に留まるところでやつてたら店の中に入ることができなくなる。そうなると……あー、名前は忘れたけど、とにかく件の女生徒の情報を集めることが難しくなる。

「ふう、もう大丈夫よ。行きましょう……。じゃあ比企谷君、腕を腰の辺りまで上げて、

「そうね、よく偉ぶつてゐる人が偉そうにしてゐる真似をしてもらつていいかしら」

「ん、んん？ こうか？」

「そう。そのまま手を少し前に出して……それで軽く握りこぶしを作つたら男性が女性二人をエスコートするときの立ち方よ。では由比ヶ浜さん。比企谷君の腕に背中側から手を置いて。ちょうど肘と手首の真ん中辺りよ」

「え、つと。こう？」

「ええ。それで問題ないわ。比企谷君、あとは任せるわ」

「は、何がだ？」

「あとは貴方が私達をお店まで連れて行くの。しつかり前を見て、変な挙動をしないようにな。大丈夫、自信満々に、とまでには言わないけれど、このお店に入つても何ら問題ないですと言わんばかりの表情をしていればいいわ」

「……真顔でいいか」

「もちろん」

「そうかい。んじや、行くぞ」

ゆつくりと歩き始め、店の入り口、開け放たれた重そうな木製のドアをくぐるとすぐさまギャルソンの男性が脇にやってきて、すっと頭を下げた。

何かを聞くわけでもなく、スッと腕で指し示された方、一面ガラス張りの窓の前、そ

の中でも端の方にあるバー・カウンターに俺達を導く。

席の案内を終えた男性はまた軽く頭を下げ、入り口に戻っていく。

それをほどほどに見届けた俺達は固定された少し背の高い丸い椅子に座る。そんな中、俺は他の人から見たらわからない程度に目線をきょろきょろと泳がせる。

さすがにこんな場所なら高校生が働いてたらわかるだろうと思つての行動だつたんだが、どうやら空振りのようだ。さすがにやりすぎると怪しまれそうだし、やめておこう。

そう思つて目線を前にやるとキュツキュツとコップを拭いていたバーテンダーが手を止めてじつとこちらを見つめている。あら？　俺の顔に何か付いてるのかしら。そうなら恥ずかしいから早めに落としたいな。

「…………」

え、ホントになんで俺の事そんなにガン見してくるの？　目つきが鋭すぎて怖いんだけど。

そんな俺に気付いたのか、雪ノ下にはあとため息をつかれる。いや、仕方なくない？　今何の時間かわからんなんだもん。

「初めまして、川崎沙希さん。奇遇ね、こんなところで」

「……雪ノ下と由比ヶ浜、それに比企谷か」

「…………は？」

「いつまで経っても話しかけないからまさかとは思つたけど、貴方クラスの人の顔を覚えて無かつたのかしら」

「え、ちょっと待て。じゃあこいつが」

「ええ、この人が件の子よ」

川崎沙希 ↗⑥↖

「それで、なに頼むのか決めてくれない？さすがに、冷やかしは御免だから」
バー・テンダーをしていた……名前なんだつけか、まあいいや。今回の目的の人物が話
しかけてきた。

確かにコイツの言う通り、何も頼まずただ談笑しているだけだと他のスタッフからも
いい顔をされないだろう。

「私はペリエを。由比ヶ浜さんにも同じものをお願いするわ。比企谷君は何か好みのも
のはあるかしら？」

「いや、俺もこういうとこ来るの初めてだから何もわからん。マツ缶あるか？」

「あるわけないでしょこんなところに……。ジンジャーエールくらいならあるけど
「じゃあそれで頼むわ」

はいよ、と軽く返事をした——名前わかんないとやりにくいな。仮称Kさんにしてお
くか。Kさんが手際よく、なんか、よくわからんけど、あつという間に俺達の前に注文
したもののが置かれていた。

「大したものだな。素人目でもかつこよく映つたわ」

「そりやどーも。で？　あんたたち、なんでここにいるん？　デー」

「デートなんて言つたら、抜くわよ、舌を」

「……なんかあたし、悪い事言つた？　なんでそこまで言われなきやいけないわけ」

異常なまでに殺氣だつた雪ノ下と、そんな雪ノ下に怯むことなく睨みを利かせるKさん。

そして、その空気にひたすらに怯える俺と由比ヶ浜の岡の完成だ。ダレカタスケテ。
「ま、まあまあ落ち着いてゆきのん。ごめんね、川崎さん。その手の話題、二度とゆきの
んに振らないでね？」すつごく地雷だから」

「あつそ、まあ別にどーでもいいけど。それで、結局何しに来たの」

結露でできたボトルについている水を付近で丁寧に拭いていく。

そのちよつとした動作だけでもかなり様になつてゐる。
——ここに勤めて、それなりに経つてゐかもな。

「お前を探してたんだよ。あー、川崎、だつけか？　お前の弟が心配してゐからさつさと
家におとなしく帰れ。そしたら依頼は解決。お前の弟が小町に引つ付かなくなる。皆

ハッピーだ。だから早くこの仕事辞めるか他の、法に則つてちゃんとしたどこに行け」

それだけ言つて少し乾いた口の中を潤すためにジンジャーエールを少し含む。

雪ノ下の代わりに説明したが、要件は概ねこんなところだろう。

ていうか、いつまで高ぶつてんだ雪ノ下のヤツ。ホントに沸点が低いなこの手が絡むと。

「あー、なるほどね。大志がそんなこと言つてたんだ。わかつた、あとで大志とは話付けて多くから帰つていいよ」

「辞めるつもりないだろソレ」

「当たり前でしょ。ま、辞めさせられたとしてもまた別の店でバイトするだけだけど」「そうか。ま、大志に話をつけて依頼が無くなるならいい。帰るぞ、二人とも」

「「えつ」「」」

三人してこつちを凝視してくる。え、なにこの空氣。少し重くないですか？

「どうかしたか？ 何か……ああ、そういうやジンジャーエール飲むの忘れてたわ」

グラスを傾けて一息に飲み干し、勘定を終わらせようと財布を懐のポッケから財布を出そうとすると、そつと雪ノ下の左手が俺の服を掴む。

「何を言つてるの？」 比企谷君

「何、つて。いやもう終わりだろこの依頼。終わつたつづーか、無くなるつてのが正しいけどな」

依頼主から依頼が取り下げられるならもはや俺達がやれることは無い。
なら帰るしかないだろ。いつまでもここにいても店に迷惑だし。

「ちよつ、ヒツキー!? 本気で言つてる!?」

「いや、本気もクソもないだろ。え、何、俺がおかしい?」

「まあ、普通あの場面だつたらもう少し食い下がつてくると思ったよ」

「お前は儲けもんだろ。余計に引っ付かれなくて済むんだから」

「そうだね、じやあ勘定、置いてつて」

「——待ちなさい」

一瞬、気温が下がつた気がした。

おそらく気のせいだ、そのはずだ。そんな超常現象なんか、涼○ハルヒの憂鬱で間に合つてる。

じやあ、これ、何?

雪ノ下を中心に、変なオーラ出てきてるんだけど!?

「比企谷君、まだ帰るには早いわ。おかげを奢つてあげるから、まだいてくれないかしら?」

「え、いや、だから」

「いて、くれるわね?」

「ア、ハイ」

「川崎さん、彼用にジンジャーエールを」

「はいよ」

「こつわ！　え、ホントにこれ雪ノ下か!?　いつもの雪ノ下とかテンparるか壊れるかポンになるかのどれかしかなかつたのに、いきなり葉山によく向けてる、いやそれ以上の圧が来たんだけど！」

頼む由比ヶ浜！　ここはお前が……ダメだつ、由比ヶ浜も由比ヶ浜でめちゃくちや目をグルグルさせてる！」

「はい、ジンジャーエール」

「あ、ありがとうございます……」

「なんでそんなかしこまつてんの」

仕方ないだろ、まだ雪ノ下に対する恐怖感が抜けきつてないんだよ。

「さて、川崎さん？」

俺のジンジャーエールが届いたところで

「一回目の警告よ。もし、このことが学校にバレた場合、最悪自宅謹慎を命じられるわ。それに加えて、進学にもマイナスの要素になるわ。主に、推薦関係とかね。もし関係ないというなら、これは切り捨てていいわ」

「あつそ。じゃあ普通に入試をするから、問題ないね」

川崎は、そう返した。

そして雪ノ下は、一回だけ頷いて続ける。

「では、二回目の警告よ。これはあまりしたくないけれど、仕方ないわ。今私の、そんなに気が長くないから」

「前置きはいいから早くしてくれない？　あまり話し込んでると他のスタッフにいい顔されないからさ」

「なら、端的に言うわね」

「くつ、と自分が頼んだペリエに口をつけて、もはや詰みの言葉を言い放つ。

「労働基準法に違反しているお店があると、監督署に報告する。それだけよ」

「…………」

「本来、貴方はこんな時間に働いてはいけないの。それくらい、これくらいのお店なら承知しているはず。なら、なんで貴方は働いているのか？　それは貴方が年齢を詐称しているから、ね。そうでなきや、明け方まで働かせるなんてあるはずがないわ。まあ、どの道、このお店は大打撃でしょうね」

「…………」

川崎は、何も言えない。

そして、雪ノ下は、まだ続ける。

「最後の警告よ。まあ、あまりこれは言いたくなかったのだけれども、貴方の態度が気に

入らないから、言わせてもらうわね」

「……何を、言うつもり」

「貴方の家、かなり経済面がひつ迫しているそうね」

「——っ！」

川崎の目が見開かれる。明らかな動揺だ。

「理由としてはそうね、大志君の塾代と、貴方自身の進学費用、つてどころかしら。貴方、さつき自分で入試を受けると言っていたものね。確かに、塾つてかなりお金がかかるものね。それに、塾代だけじゃなく、入試を受けるにしても、仮に受かつても入学費用もバカにならないわ。両親は共働き、それに妹ももう一人いるのよね？　これ以上、負担をかけられないものね」

「…………」

「そして、二回目の警告を掘り返すけれど、もしこのお店が営業停止になつた場合、どうなると思う？　貴方、のせいで大損失よ？　貴方程度に責任なんて取れないでしようから、親にしわ寄せがいくわね。さて、経済面がひつ迫している貴方の家は、どうなつてしまふのかしらね」

残つたペリエを飲み干し、由比ヶ浜と俺のおかわりの分の勘定を置き椅子から立ち上がる。

「以上よ。私からはもう何も言わないわ。行きましょう」

「え、あ、うん……。じゃあ、またね、川崎さん」

スタスターと歩き去つていく雪ノ下と、それに付いていく由比ヶ浜。

そして俺は、まだ椅子に座っていた。

「……アンタは、行かないの？」

「ん、まあな。まだおかわりのジンジャーエール、飲み干してないし」

あと雪ノ下が怖い。

「ま、災難だつたな。アイツに相対したのが運の尽き、つてことで」

「……そうだね。あー、上手くやれてたつもりなんだけどなあ」

「弟に心配かけてる時点でアウトだろ。姉貴失格だぞ」

「うっさい、そんくらいわかってる」

「嘘つけ。わかつてたらこんなマネしないだろ」

「うぐつ、と言葉を詰まらせる。

さて、こつちはこつちで用意していたもん出しておくか。

「川崎」

「わ、いきなり物を投げないでよ……なにこれ」

「帰つたら中身見てみろ。頑張りや、まあこんな綱渡りしなくとも大丈夫だろ」

放り投げたのは何回か折り曲げた紙切れ。
別に金を稼ぐための情報は無いが、金をどうにかする方法は載つてゐる。
それ以上は何もしないぞ。

今回は、依頼だつたから焼いたお節介だからな。

川崎沙希

（7）

後日談として、川崎沙希のあの後について。

結論として、アイツはバーを辞めた。

「さて、比企谷君。洗いざらい話してもらうわ」

「洗いざらいも何も、俺はただアイツがあのバイトを辞めても大丈夫な理由を提示しただけだ」

放課後の校舎、奉仕部に行くときによく使っている踊り場。そこで雪ノ下に捕まつた俺は、文字通り尋問をされていた。

とはいって、俺がやつた事なんてたかが知れている。

「そのやり方がわからないのよ。いつたい、どんな魔法を使つたの？」

「別に難しい話じやないぞ？　ただ金を工面する方法を出して辞めるように促しただけだ。今回、アイツの問題は金だ。それはストーカーでもしてたのかつてくらい情報持つてたお前もわかつてたんだろ？」

「当然ね。彼女のことは隅から隅まで事前に調べつくしておいたわ」

「なんか聞かない方が身のためな気がするからスルーするぞ」

家族構成までならわかるけど、どこから手に入れたんだ経済面とか。ラノベとか漫画でよく見る表現ではあるけど、こうしていざ目の前でやられると恐怖以外覚えないな。

「今回俺が使つたのはスカラシップ制度つてやつだ。簡潔に言うと成績が良ければ、学校にもよるがある程度初期費用諸々が免除されるお得な制度だな」

「それを素直に聞き入れてくれたってわけね」

「お前が異常に追い詰めてくれたのが一番の要因だけどな」

「そうかしら。私、あの時ほとんど何もしていない気がするのだけれど」

「人を脅しに脅しまつったヤツが何もしてないとか無理があるだろ。とにかく、お前が精神的に追い詰めてくれたおかげで思考が狭まつてたから、提案をあっさり飲んでくれたつてわけだ」

ま、成功しようがしまいが俺はどつちでもよかつたけどな。

「なら、今回は私が役に立つたっていう事？」

「まあ、そうだな」

そう言うと雪ノ下は小さくガツツポーズを俺から見えないよう気を付けながらする、んだけど、見えてるからね？ 隠すようにするだけ成長はしてはいるんだけども。

「とりあえずこれで依頼は達成か。しばらく依頼とか来ない方が嬉しいんだが」

？」

「勘弁してくれ……。なるべくバイト以外で働きたくないんだが」「あら、何か理由でもあるのかしら？」

「親父とお袋が俗にいう社畜だからな。その背中をずっと見続けてたら仕事つてクソなんだなって刷り込まれたんだよ」

平日は朝早くから出社して夜遅くに帰宅、休日は疲れを取るためか今度は遅くまで寝ている。そんな二人の姿を見て誰が「私もあるなりたい！」とか目を輝かせて言うもんか。昔の俺の目みたいに濁らせて「うわあ……」って言ってた方がまだ健全だろう。

「とにかく、もし比企谷君の方で何か解決案があれば事前に教えてもらえないかしら。それも含めて私の方でもどう動くか考えたいから」

「ああ、すまんな。報連相を忘れてたわ」

正直、この解決策は出すつもりも無かつたし言うか悩んだんだよな。スカラシップは俺も使う予定だつたから、ライバルを余計に増やすようなことはしたくなかったし。

「では、話も終わつたところで部室に行きましょう。皆、部室で待つていいでしよう」「だな。これ以上待たせると一部がうるさそうだしな」

この後、案の定折本とか部員じやないはずの材木座が騒ぎ立つたのは言うまでもな

い。
マジでうるさかつたちくしょう。

由比ヶ浜、ハピバ ①

「由比ヶ浜さんの誕生日パーティーをサプライズで行います」

いつもの放課後、由比ヶ浜を除いた奉仕部のメンバー十 α が集まつた部室に、雪ノ下の声が響き渡つた。

「由比ヶ浜さんの誕生日パーティーを、サプライズで、行います」

「いや、聞こえてるよ。わざわざそんなサプライズのところを強調して言わなくとも大丈夫だよ」

「いいえ、隼人君。それは早計よ。うつかり口を滑らせて喋つてしまふ人が若干名いるもの」

ちらりと俺の方、というより、俺の隣に陣取つてゐる折本に視線が集まる。

全員、「ああ、なるほどなあ」という空気になり、折本がウケ散らかしているのがテンプレとなつてゐる。なんやかんや、ここにいるメンツはある程度どんな人柄なのかわかつてきただようだ。

「本当ならメールで連絡しようと思つていたのだけれど、ちようど都合よく由比ヶ浜さんが三浦さん達と遊びに行くという知らせを隼人君から聞いたから今ここで提案して

いるというわけよ」

「ほーん、ま、いいんじやねえの。頑張れ」

「あら、比企谷君は参加しないのかしら?」

「いや、俺だつて一応忙しいんだぜ? バイトしたり部活だつたりアニメ見たりエトセトラエトセトラ……」

「で、本音は?」

「面倒くさい」

「では参加ということで問題ないわね。各自、由比ヶ浜さんへのプレゼントは考えて置いてちようだい。場所やケーキの手配は私がしておくわ」

「あれー? おかしいなー? いつの間にか参加することが決定されちゃつてるぞー? ？」

「では、今日の部活動は由比ヶ浜さんへのプレゼントを買うことに費やしてもらつて構わないわ。後で平塚先生には私から伝えておくから」

「はいよ。じゃ、お疲れさん」

「折本さん、比企谷君がサボらないよう監視をお願いね」

「オッケー、任せといて~」

おい待て、なんで俺がサボることが確定事項のように話し進めてんだよ。その通りだけどよ。

しかし、誕生日プレゼントか。アイツの好みとか知らんから何買えばいいのかわからん。最悪、折本のセンスに乗つかるか。

「折本、さつそく買いに——」

「——つて、言おうと思つたけどね。監視と協力はしないよ。比企谷、今回はちゃんと自分の力で買つてきな」

「は？　いや、まさか」

「じゃ、頑張れ比企谷！」

そう言つて、早々と自分のカバンをつかみ、三木姉弟達にウインクをしてから部室を後にされた。

……ええ？　まさか俺、折本に捨てられた？　頼む折本、カムバツク！　お前がいな

いとマジで何もわからん！

「き、刻、美咲！」

「よし、行くぞ姉貴。俺達の戦いはこれからだ」

「任せろわっしょい。最高の誕ブレを仕入れて見せるぜい」

おい待て、謎のテンションで出ていくな置いてくな見捨てるな！

「え、えっと、仲町……？」

「……頑張つて、比企谷くん」

「嘘だろ!? いやホントに待つて！ 頼む！ お願ひ待つてえええ……」
いつどのタイミングで示し合せたのか、いつものメンバーは俺を置いていなくなつ
てしまつた。

ああ……。終わつた。もうダメだこれ、どうしようもないわ。

「うし、帰るか」

「諦めるのが早すぎるので比企谷」

「うるせえ、もう無理だ。お手上げだ。俺は家に帰らせてもらう！」

「テンションで乗り切ろうとしないでくれ……。いいから、ちょっと頑張つてみてくれ」
「そうは言うけどなあ……」

実際、俺アソツのこと何も知らんからどんな物がいいのかわからんし。アレか？ と
りあえず最近の流行りのモノとかあげればいいのか？ あ、ダメだ、八幡そういうのわ
かんないや、てへつ。

「いいわ、比企谷君。一つヒントをあげる。彼女、犬を飼つてるわ」

「……犬？」

「以上よ。じゃ、頑張つてね、比企谷君」

「え、いやちよつと——」

それ以上を何か言う前に、葉山によつて優しく丁重に部室から追い出された。荷物も一緒に。

しかし、犬、犬かあ。確かにそれなら犬関連のグッズ買えばハズレはなさうだし良さそうだな。

「さて、んじやさつそく買いに行くか。いつぞやか折本達と行つたあそこでいいか」
あそこ、というのは南船橋駅にあるかなり大きいショッピングモールのことだ。そこならペットショップとか似たような店がいっぱいあるだろ、たぶん、知らんけど。

由比ヶ浜、ハピバ

（2）

——これが、詰んだってやつか。

商業施設一階に設置してあるベンチに座つて黄昏れている俺がいる。最初、犬のグッズとか買おうとしたんだがさっぱりわからん。何アレ、どんだけ種類あんだよ。ボールとか人形とか首輪とかリードとか……。どういうのがいいのかわからん。

そもそもアイツが飼つてる犬がどんなのかわからん。下手にサイズがあるものとか選ぶと邪魔になるだけだし……。

「あー、面倒くせえ……」

正直、こんな真面目に探さなくてもいいはずなんだよな。適当に菓子の詰め合わせとかにしておくか。それならあいつも喜ぶだろ……たぶん、知らんけど。

そういうや、俺なんも知らねえ気がするなあ。由比ヶ浜つて何が好きなんだ？ 折本達の好みなら、美咲を除いていくらでも知つてるけど他のヤツは知らねえ……ていうか、名前すら知らない気がする。いや、気がするじやなくて知らないな。んく……。まあ、いいか。

そんなことより、さつさと美味そうな菓子でも探すか。それなら目に付いた店のを適当に探しておcka……ん？　スマホが鳴つてる？

「よつと、誰から……つて、葉山？　アイツ、なんで俺のアドレス知つたんだ？　渡してねえはずなんだけど」

まあどうせ折本だろ。アイツならやりかねないし。
んで、内容は……。

「……マジか。プレゼント菓子禁止かよ」

誕生日パーティーの時に大量の菓子とケーキを用意するから、とかいう理由で食べ物関連のプレゼントを避けるよう頼むような内容だつた。せつかく人がこれにしようとした矢先にこの連絡は萎えるな……。

ま、まあ？　買う前に言われて助かつたと前向きに捉えておこう。後ろ向きに捉えたらやつてくれたなクソッタレ、だな。いや、なんか違うな。

「あー、もう知らん。本当に知らん。知るかもう。帰ろう。帰つて撮り溜めたニチアサを全部見つくすぐそつと」

重たい腰を上げ、隣に置いておいた鞄を肩に下げて帰ろうとして、

「お？　アレつて……」

『比企谷。どうだつた？　いいの見つかつた？』

「ああ、たぶんな」

家についてしばらくした後、折本から電話がかかってきたと思つたら開口一番がこれだつた。

『……え？　買つたの？　ホントに？』

『なんだその意外そうな声。買わないと思つてたのか？』

『でも実際、買おうとしたけど何がいいのかわからなくなつて何も買わずに帰ろうとしたでしょ？』

「エスパーかよ。正解だ」

さすがになんでもわかられてるな。まあ、唯一否定することがあるなら――

『ていうか、雪ノ下さん達からヒント貰わなかつたら何もせずに帰ろうとしたでしょ？』

「おう、まつたくもつてその通りだな。パーエクトだ、折本」

『当つたり前でしょ。ていうか、何買つたん？　こつそり教えてよ』

「あー、いや、それは見てからのお楽しみにしといてくれ」

『何それ、めっちゃ気になるんだけど！　じゃあハードル上げておくからよろしくつ！』

『じゃーね！おやすみっ！』

『じゃーね！おやすみっ！』

……マジで切りやがった。

正直勘弁してほしい。たまたま見つけて、何となく買ったものだ。だからホント、マジで、勘弁してください。

……振りじやなく、マジだからな？

由比ヶ浜、ハピバ

（③）

「由比ヶ浜さん、今日は家に帰れないと思うことね」

「雪ノ下さん、お願ひだから言い方をもう少し考えてくれないかな」
由比ヶ浜の誕生日当日の朝。ホームルームも終わつた我らが2—Eに突如として現
れた雪ノ下雪乃是、あろうことか大人のお持ち帰り宣言をかましやがつた。ナイスツッ
コミだぞ葉山。お前がいなかつたら大惨事だつたぞ。

ていうか、アイツ今雪ノ下のこと名字で呼んでたな。場所で気でも使つてんのかな?
何のかは知らんけど。

「えー……つと、私、どこに連れていかれるのかな……？」

「ちょ、雪ノ下さん！ 結衣にナニしようとしてんだし！」

「あら、何故そんなに取り乱しているのかしら？ ただのお誘いじゃない」

「お、お誘い……！」

あらー、あんなにハデハデな……誰だつけ、まあいいか。金髪縦ロールがめちゃく
ちゃ取り乱しちやつてるじyan。見た目完全にビツチっぽいのに。

「は、隼人！　まさか、隼人も雪ノ下さんのそれに……！」

「大丈夫、優美子、誤解しないでほしいんだけど、ただの誕生日パーティーの誘いだからな？」　結衣、今日誕生日だろ？」

「えつ、う、うん。あー、なるほどね？　ビックリしちゃったよ……ホントに」

「……それならそうと早く言うし！　も、もちろん？　あーしはわかつてたけどね！　もちろん！」

そんな顔面真っ赤にして言われても説得力が皆無なんだよなあ。なにあの子、もしかしてとんでもなく清純派ギャルだつたの？　ギャップ萌えが過ぎるんじゃないのか？

「それで、どうかしら由比ヶ浜さん。もし先約があるなら別の日にセッティングするけど

「あー、えつと……」

「いいよ、結衣、行つてきな」

「え……、いいの？」

「いいから、あーしらとは明日にでも祝つたげるから。今日は雪ノ下さん達と楽しんできな」

へー、意外といい人だな。人つて見かけによらないってこういうことを言うんだろう。好感度高いですね、これは。なんで実況者みたいな立ち位置になつてんだ、俺は。

「礼を言うわ、三浦さん。この借りは必ず返すわ」

「雪ノ下さんが言うとなんか違う意味に聞こえるんだけど……」

「気のせいよ。じやあ、由比ヶ浜さん。また放課後に奉仕部でね」

「うん、またねゆきのん」

長い黒髪を翻し、教室から出ていこうとする雪ノ下……だつたが、なぜか急旋回して俺の席にスタスターと歩いてきた。

何、どうしたの、なんかあつた？

「比企谷君、おはよう」

「お、おう、おはよう」

「……じゃあ、また」

「おう、また部室でな」

それだけのやりとりをするためにわざわざ来たのかコイツ。去り際に「よし、瞞まずに話せた」って小さい声で呟きながらガツツポーズしてるのが見えたけど、知らないふりしといてあげよう。いつたら絶対壊れるだろうしな。

「あれ、雪ノ下さんいたの？」

「おう、折本か。どこ行つてたんだ？」

「数学の教科書持つてくるの忘れたから刻に借りてきただんぐ」

「は？　忘れるなんて概念あるのか？　置き勉してないのか？」

「比企谷には関係ないかもしないけど、今日までの宿題あつたかんね？」

「ほーん、そうなんか」

「興味なさすぎでウケる！」

高校受験までは頑張った数学だが、学年が上に行くたびに訳が分からなくなり、ついには刻にお手上げだと言われてしまう始末になつた。みたか、これが俺の実力だ、エツヘン。

「じゃあ今日の宿題は」

「当然やつてない」

「だよね、ウケる」

緩い会話を朝のHRが始まるまで続けた。

そして、午前の授業をすべて終わらせた後、気付いてしまつた。

「……由比ヶ浜の誕プレが、無い」

由比ヶ浜、ハピバ

（4）

「由比ヶ浜さん、今日は家に帰れないと思うことね」

「雪ノ下さん、お願ひだから言い方をもう少し考えてくれないかな」
由比ヶ浜の誕生日当日の朝。ホームルームも終わつた我らが2—Eに突如として現
れた雪ノ下雪乃是、あろうことか大人のお持ち帰り宣言をかましやがつた。ナイスツッ
コミだぞ葉山。お前がいなかつたら大惨事だつたぞ。

ていうか、アイツ今雪ノ下のこと名字で呼んでたな。場所で気でも使つてんのかな?
何のかは知らんけど。

「えー……つと、私、どこに連れていかれるのかな……？」

「ちょ、雪ノ下さん！ 結衣にナニしようとしてんだし！」

「あら、何故そんなに取り乱しているのかしら？ ただのお誘いじゃない」

「お、お誘い……！」

あらー、あんなにハデハデな……誰だつけ、まあいいか。金髪縦ロールがめちゃく
ちゃ取り乱しちゃつてるじやん。見た目完全にビツチっぽいのに。

「は、隼人！　まさか、隼人も雪ノ下さんのそれに……！」

「大丈夫、優美子、誤解しないでほしいんだけど、ただの誕生日パーティーの誘いだからな？」　結衣、今日誕生日だろ？」

「えつ、う、うん。あー、なるほどね？　ビックリしちゃったよ……ホントに」

「……それならそうと早く言うし！　も、もちろん？　あーしはわかつてたけどね！　もちろん！」

そんな顔面真っ赤にして言われても説得力が皆無なんだよなあ。なにあの子、もしかしてとんでもなく清純派ギャルだつたの？　ギャップ萌えが過ぎるんじゃないのか？

「それで、どうかしら由比ヶ浜さん。もし先約があるなら別の日にセッティングするけど

「あー、えつと……」

「いいよ、結衣、行つてきな」

「え……、いいの？」

「いいから、あーしらとは明日にでも祝つたげるから。今日は雪ノ下さん達と楽しんできな」

へー、意外といい人だな。人つて見かけによらないってこういうことを言うんだろう。好感度高いですね、これは。なんで実況者みたいな立ち位置になつてんだ、俺は。

「礼を言うわ、三浦さん。この借りは必ず返すわ」

「雪ノ下さんが言うとなんか違う意味に聞こえるんだけど……」

「気のせいよ。じやあ、由比ヶ浜さん。また放課後に奉仕部でね」

「うん、またねゆきのん」

長い黒髪を翻し、教室から出ていこうとする雪ノ下……だつたが、なぜか急旋回して俺の席にスタスターと歩いてきた。

何、どうしたの、なんかあつた？

「比企谷君、おはよう」

「お、おう、おはよう」

「……じゃあ、また」

「おう、また部室でな」

それだけのやりとりをするためにわざわざ来たのかコイツ。去り際に「よし、瞞まずに話せた」って小さい声で呟きながらガツツポーズしてるのが見えたけど、知らないふりしといてあげよう。いつたら絶対壊れるだろうしな。

「あれ、雪ノ下さんいたの？」

「おう、折本か。どこ行つてたんだ？」

「数学の教科書持つてくるの忘れたから刻に借りてきただんぐ」

「は？　忘れるなんて概念あるのか？　置き勉してないのか？」

「比企谷には関係ないかもしないけど、今日までの宿題あつたかんね？」

「ほーん、そうなんか」

「興味なさすぎでウケる！」

高校受験までは頑張った数学だが、学年が上に行くたびに訳が分からなくなり、ついには刻にお手上げだと言われてしまう始末になつた。みたか、これが俺の実力だ、エツヘン。

「じゃあ今日の宿題は」

「当然やつてない」

「だよね、ウケる」

緩い会話を朝のHRが始まるまで続けた。

そして、午前の授業をすべて終わらせた後、気付いてしまつた。

「……由比ヶ浜の誕プレが、無い」

おかしい、確かに昨日バツグの隣に用意しておいた……。

「やつべ、バツグ入れるの忘れてた」

本当にやらかした。

仕方ない、雪ノ下に連絡して時間稼ぎするよう頼んでおくか。

あと、折本にも後から合流することを伝えておくか。

「折本、すまんが」

「比企谷ごめんっ！ 先に行つててくれない？ 結衣ちゃんの誕プレ持つてくるの忘れた！」

「いやお前もかよ……」

「なんでこうもタイミング悪く折本まで忘れてんだよ。カツプルかお前等……カツプルだつたわ。

「なら早く取りに帰るぞ。あまり遅くなつたらドヤされちまう」

「だね～。ひひつ、二人して誕プレ忘れるとかウケるつ」

「ウケなくていいから、行くぞ。実は怒らせるとおつかないんだからな、雪ノ下のヤツ」「マジ？ ジヤ、早く帰んなきやじyan。すぐ比企谷の家の前に行くから先に行つてるね」

「おう……いや待てわざわざ合流しなくても——」

「つて、早すぎるだろアイツ。もう見えなくなつたんだが。

あの調子だとスマホも見ないだろうし、俺も早く家に帰るか。折本が俺の家に来る前にはさすがに着いてないとマズイしな。

由比ヶ浜、ハピバ ⑤

時は進み、比企谷宅。

由比ヶ浜の誕プレを取りに家に着き、自室に置きっぱなしになつていた例の物をカバンの中にしまい、折本を待つ……はずだつた。

「はー……。おつす、比企谷」

「いや早すぎねえか?」

同じく誕プレを忘れた折本が、すでに俺の家の前まで着いてた。

いや、ホントに早いな。どうなつてんのコイツの脚力。世界狙えない?

「ほら、早く行くよ。結衣ちゃん達が待つてるって」

「おう」

マイチャヤリに乗り、折本の後を追うように漕ぐ……ホントに早い。カラオケ店に着くまでに疲れで動けなくなりそう。

「ほらファイトだよ比企谷! 急いで!」

「わかったから、前見ろ前! 危ねえぞ!」

「わかつてゐつてー！」

スピード出してる時に後ろを振り向かないでほしい。事故つたら大惨事だぞ。

「おつし、着いたー！」

「はあ……はあ……。はええよ……」

なんで通常より五分近くタイム縮めて走つてんだよ。疲れるわ。

「比企谷もだいぶ早くなつたよねー」

「まあ昔と比べたら、な。それより自転車置きに行くぞ」

「はーい」

あ、そうだ。カラオケの部屋番号知らないな。

雪ノ下に確認の連絡……する前に来てたわ。さすが、話が早いな。

俺達以外の全員はもう着いて部屋に入つてゐるのか。まあ、誕^ブレを忘れるとかいう失態をするのは俺と折本だけだよな。

幸い、まだ入つたばつからしいしのんびり行くとしよう。これ以上急いでも疲れるだけだし。何なら今の時点で疲れてるから帰りたいまである。いや、今帰つたら折角買つたプレゼントが無駄になるか。

仕方ない行くか、急がずのんびりな。

「折本は誕^ブレ何にしたんだ？」

「へつへーん、ヒミツ！ サプライズだかんね」

「いや、サプライズの相手は俺じゃないんだから秘密にしなくてもいいんじゃないのか？」

「えー、でももし被つてたりしたらそれも面白いじゃん？ その楽しみも誕生日会にとつておかないとさ」

「そういうものなのか？」

「そーゆーもんなの」

「そうなのか。俺等で誕生日祝うときつてポンポンプレゼント渡して今回みたいにカラオケボックスみたいな一室借りて遊ぶか、誰かの家で遊ぶか、みたいな感じだからな。世間一般だとそういうものらしい。」

「比企谷はさー、そろそろ他の世界を知るべきなのかもね」

「なんだそれ。知らん世界知つて何になるんだ？」

「世界つて言つても、そんな広義なことじやないよ？ ただ、比企谷はアタシらのせいで世間知らずに育つちゃったじゃん？」

「なんで俺が折本達に育てられたことになつてんだ」

「だからさ、今日の結衣ちゃんの誕プレは練習」

なんか、折本の様子がおかしい。

いつもこんな真面目な雰囲気こんな長く続かないのに、茶々を入れても全くいつものコイツに戻らない。

え、ナニコレ、どつきりか何かか？ もう今の時点で驚きが沢山だからドツキリのプラカード持つて出てきていいぞ。由比ヶ浜の誕生日にやることじやないけどな。

「だからさ、覚悟してね比企谷」

隣にいたはずの折本が、急に立ち止まって俺の手を握る。

思わず俺も止まり、折本の方を見る。

そこには、いつも、何があつても崩れない笑顔に、

「比企谷の知らない世界、いっぱい見せてくからね」

どこか、影が差してるように思えた。